

サムエル書上

本書及び次の書は、ヘブレオ人にサムエル書と稱ばれている。サムエルとこれに注油したサウル、ダヴィド兩王との歴史を載せているからである。しかし教父達には、列王記一及び二と稱せられ、この方が一層普通である。兩書の筆者については、前書は第二十五章までサムエルが書きそのあとと後書とは、ナタン、ガド兩預言者の手に成つたというのが通説である。歴代史略上二三・二九参照。

第一章

エルカナの妻アンナ石婦なりしが願を立て一子を得サムエルと名づく
シロに於いて之を天主に獻げその願を果す。

一 エフライムの山地なるラマタイムソフ
イムに、¹⁾ その名をエルカナ²⁾と云う人
ありけり、エフライム人³⁾なるスフの子
トフ、その子エリウ、その子イエロハム
の子なり。 ^ニ 彼に二人の妻あり、その一

第一章 1)ラマタイムソフイムはまたラマとも稱せられる處、今日のエル・ラムである。ベンヤミン族領内にあり(書一八・二五)、イエルサレムから北へ八キロ。2)エルカナ(「天主獲得し給えり」の意)はレヴィの子カートの子孫。3)レヴィ人で、エフライム族の領内に居住地を貰つていた。

三 人の名はアンナ、⁴⁾ 他の一人の名はフェネンナ⁵⁾と云えり。フェネンナには子等ありしが、アンナには子等あらざりき。⁶⁾ 三 さてこの人はシロ⁷⁾に於いて萬軍⁸⁾の主を禮拜し、之に禮物を献げんとて定めの日⁹⁾に、その市より上りぬ。ヘリの二子、オフニとフイネエス、其處に主の司祭たり。¹⁰⁾ 四 その日また來りしかば、エルカナ犠牲を献げて、その妻フェネンナとそのすべての息子娘に分前¹⁰⁾を與えけるが、^五 アンナには悲しみつつただ一部を與えぬ、蓋は彼アンナを愛したればなり。されど主はその胎を閉鎖し給えり。^六 その敵手も亦之を苦しめ、主がその胎を閉鎖し給いしを責めて、^七 太く惱ましたり。¹¹⁾ ^七 彼女は年毎に、彼等が主の聖殿に上る時の廻り來る度に然な

⁴⁾ヘブレオ語ハンナー。「惠、優美」の義。—⁵⁾「珊瑚」の義。—⁶⁾舊約聖書には石婦(うまずめ)であつた女が幾人か、奇蹟的に懐胎したことが記してある。天主は云わばかくして漸次童貞母の奇蹟に對し人の心を準備させ給うたのである。—⁷⁾士師の時代、主としてここに契約の櫃があつたから(士一八・三一。二一・一九。)—⁸⁾主の萬軍とは諸天使のこと(書五・一四)。⁹⁾毎年の。申一六・一六の規定以上の善行。—¹⁰⁾和祭の牲の分前。モイゼの律法では、牲の奉納者等に聖別された肉の一定量を與えることになつていた利七・一一以下参照。—¹¹⁾ヘブレオ人、一般に小アジア人は、子ができないのを恥ずべきこと、天罰と思つていた。

八 し、かくの如くにして之を怒らしめぬ。さればアンナは泣きて食物を攝
 八 らざりき。八時にその夫エルカナ之に云いけるは、「アンナよ、汝は何
 九 故泣くや、何故食せざるや、また何故汝の心を悩ますや。我は汝にとり
 九 て、十人¹²⁾の子にも優るに非ずや。」と。九茲に於いてアンナも、シロに
 一〇 て飲食せし後起ち上りしが、折しも司祭へり、主の聖殿の門前なる腰掛
 一〇 に坐しおれり。¹³⁾一〇アンナは心悲しきあまり、主に祈りて、太く泣き、
 一一 願を立てて云いけるは、「萬軍の主よ、汝もし汝の婢の悩みを憐して、
 一一 我を憶い、汝の婢を忘れず、汝の召使に男子を與え給わば、我は之を
 一二 生くる日の限り主に献げて、その頭に剃刀を觸れざるべし。¹⁴⁾」と。一二然
 一二 るに彼女が主の御前にて多く祈りたる時、偶々へりその口に目を注ぎぬ。
 一三 一三さてアンナは心の中にて語りたれば、ただその口唇動くのみにして、
 一四 聲は全く聞えざりき。さればへりは彼女を酔えりと思ひて、一四之に云い
 一四 けるは、「汝何時まで酔えるぞ。¹⁵⁾ 汝の飲み過ぎたる葡萄酒の酔を些か

12) 多数を示す概
 数。— 13) 監督し
 見張をするため
 の幕屋の入口に
 14) 生まれるべき
 子について誓つ
 たのは、終身天
 主に仕えさせる
 ことと、ナザレ
 人にするものと
 の二つ。後者に
 關しては、民四
 ・六。五・七を
 参照。— 15) いつ
 まで酩酊したよ
 うな振舞をして
 いるのか。

一五 醒ませ。」と。一五 アンナ答えて云いけるは、「わが主よ、然らず、蓋し、
 我は極めて不幸なる女にして、葡萄酒をも、強き酒をも、飲みたるにあらず、
 主の御眼前にわが心を披瀝したるなり。一六 汝の婢をベリアルベリアルの娘
 等¹⁶⁾の一人と思ふなかれ。そは我わが悲嘆の夥多なるあまり、今まで
 語りたればなり。」と。一七 その時へり之に云いけるは、「安んじて行け。¹⁷⁾
 希わくはイスラエルの天主、汝が彼に求めし願いを、汝に容し給わんと
 とを。」と。一八 彼女乃ち云いけるは、「願わくは汝の婢、汝の御眼前に恩
 恵を得んことを。」¹⁸⁾と。かくてこの女、その途を行きて食し、その顔色最
 早さまさまに變ることなかりき。一九 さて彼等朝に起き、主の御前に禮拜し、
 歸りてラマタなるその家に至れり。しかしてエルカナその妻アンナを知り
 しに、¹⁹⁾ 主之を憶え給えり。²⁰⁾ 即ち日を経てアンナ懐胎し、一子を産むに
 至りしかば、彼女その名をサムエル²⁰⁾と名づけたり、是、主に求めたるに
 よりてなり。二二 茲に於いてその夫エルカナ、及びその家族一同、主に祭の

16) 不品行な娘
 17) 別れの挨拶のきまつた云い方。
 18) あなたの愛顧と代願とを
 お願い致します。—19) ……と交わる義。
 創四・一の註参照。—20) 天主に聽き容れられた」の義。

二二 犠牲と誓いたる物²¹⁾とを献げんとて、上り行きしが、二三 アンナ
 は上り行かず、その夫に云いけるは、「我はこの子の乳離れす
 るまで²²⁾行かじ、然る後之を携え行きて主の御眼前に現れしめ
 毎も其處に留まらしむべし。」と。二三 その夫エルカナ乃ち之に
 云いけるは、「汝に善しと見ゆる所を爲し、之を乳離すまで留
 まれかし。ただ我は主がその曰いし所を果し給わんこと²³⁾を願
 う。」と。よりて女は留まりてその子に乳を與え、之を乳より
 離す期を待ちぬ。二四 かくて之を乳離したる後、彼女は犢三頭、
 粉三柵、葡萄酒一壺²⁴⁾と共に、之をシロなる主の家に携え行け
 り。時にその子なおいと幼かりき。二五 しかして彼等犢を屠りて
 その子をへりに付したるが、二六 アンナ云いけるは、「乞う、わ
 が主よ、汝の魂は活く、主よ、我は曾て此處に於いて汝の前
 に立ち、主に祈りたりしかの女なり。二七 我はこの子の爲に祈り

21) 故にエルカナも誓願を
 立てていたのである。
 22) 乳離れは時として三歳
 後にさせた。今日でも小
 アジアや南洋諸島では、
 四五歳になつて始めて乳
 離れさせることが少くな
 い。—23) その御言葉はど
 ういうことであつたらう
 か。律法學士等はサムエ
 ルの榮ある運命について
 の特別な御啓示と考へて
 いる。天主は信心深い母
 にこの子を與えて、之を
 全く御自分のものとする
 思召であることを、十分
 にお示しになつた。
 24) 革袋に一つ。

二八 しを、主はわが求めし願いを我に容し給えり。二八されば我も亦之を主に献げたり、その生くる目の限り彼を主に献ぐべし。」と。彼等乃ち其處に於いて主を禮拜したり。時にアンナ祈りて云いけるは、

第二章

アンナの頌歌—ヘリの子等悪事をなし父に十分の懲戒を受けず—
ヘリの家に對する天罰の預言。

一 わが心は主によりて喜び、¹⁾ わが角はわが天主によりて高し。²⁾ わが口はわが敵に對して開く、蓋は我、汝の救済によりて樂しめばなり。
二 主の如く聖なる者はあらず、蓋し、汝を除きて他になく、我等が天主の如く強き者なければなり。³⁾ 最早誇りて高き事を云い續くるなかれ、舊き事を汝の口より棄てよ、主は全知の天主

第二章 1) アンナはサムエル誕生の喜びと

感謝の情を、讚歌として表明する。聖母と

ザカリアとの讚美歌ハ路一・四六以下及び

六八以下)はこの歌に基づき、イスラエル

人達が個人的經驗において天主の御攝理の

支配といたことをいかに認め慣れていたか

を示すものである。—2) 高き角とは内的の

強さの象徴で、牡牛から採つた象り。

3) 無禮なこと。

四 在し、すべての思想は彼に明白なればなり。 四 強き者の弓は
 折れたり、弱き者は力を帯びたり。 五 嚮に満足りし者は、糧の
 爲に雇われ、飢えたる者は飽かさされたり。 石婦は數多産み、多
 くの子を有てる者は衰えたり。 六 主は殺し、また活かし給う、
 黄泉に下し、また戻し給う。 七 主は貧しからしめ、また富まし
 め給う、卑からしめ、また高からしめ給う。 八 乏しき者を塵よ
 り起し、貧しき者を卑賤より擧げて、王侯と共に坐せしめ、光
 榮の座を保たしめ給う。 蓋し地の樞は主の所有にして、主之が
 上に地の球を置き給えり。 九 主はその聖徒の足を護り給わん、
 悪しき者は暗黒に在りて黙さん、蓋は何人も己が力によりて強
 くなるを得ざればなり。 一〇 主の敵は主を恐れん、主諸天に在り
 て彼等の上に雷を轟かし給わん。 一 主、地の果を審判き、そ
 の王に主權を與え、その受膏者の角を高くし給わん。 一と。

4) 子を産んだために。
 5) 申三二・三九。土一三
 ・二。智一六・一三。
 6) 詩一一二・七、八。
 7) 雷は天主の審判の一つ
 の印。天主が全世界の人
 を裁き給うという思想は
 メシアに関連している。
 メシアの時代になつてそ
 ういう審判があると、イ
 スラエル人は考えていた
 のである。(詩二。一一
 〇。参照)。故に王とい
 う語も、イスラエルの現
 世的王ではなく、救世主
 をさしているのである。

二二 さてエルカナはラマタに行き、その家に至りしが、かの子は司祭ヘリの
 二二 面前に於いて、主の御眼前に事えたり。二三 然るにヘリの子等はベリアルの子⁸⁾
 二三 子にして、主を知らず、二三 また民に對する司祭のなすべき事をも知らざ
 一四 三又の肉又を手にして來り、一四 之を釜、または大釜、または壺、または鍋
 一四 口に來るすべてのイスラエルにかく爲しぬ。一五 また脂肪を焼く前に、司祭
 一五 の下僕來りて、犠牲を献げる人に云えり、「司祭の爲に煮るべき肉を我に
 一六 與えよ、蓋し、我は汝より煮たる肉を受けじ、生肉をこそ受けめ。」と。
 一六 その時犠牲を献ぐる者之に云いけるは、「慣習に循いて、今日は先ず脂
 一六 肪を焼くべし。然る後、汝心に欲むだけ取れ。」と。然るに下僕答えて
 一七 之に云いけるは、「然せずして、今與えよかし、然らずば我強いても取ら
 一七 ん。」と。一七 さればかの若者等の罪は、主の御前に甚だ大なりき。そは彼

8) 本一・一六 参照。一) 犠牲の獸の肩と胸とは司祭の分として、その所得となることになつていた。脂肪の部分は祭壇上で焼いた(利七・三〇―三四)。 献げる前に犠牲の肉を取つて炙つたりするのは重い罪惡であつた。

一八 等々人を主の犠牲より遠ざけたればなり。一八さてサムエルは、子供ながら
 一九 亞麻布の肩衣¹⁰⁾を着けて、主の御面前に仕えけるが、一九その母之が爲
 二〇 に小さき上衣を作り、定めの日、祭の犠牲を献げんとてその夫と共に
 上る時、持ち來れり。¹¹⁾ 二〇時にへり、エルカナ及びその妻を祝して、彼
 二一 に云いけるは、「汝が主に奉りたる人質の爲に、主この女より汝に子
 胤を與え給えかし。」かくて彼等己が住處に歸り行けり。 二一しかして
 二二 主アンナを恵み給いければ、彼女懐胎して、三男二女を産みぬ。童サム
 二三 エルは主の御許にて成長てり。 二三さてへりは甚だ老いたりしが、己が子
 等のすべてのイスラエルに爲したる一切の事と、彼等が幕屋の門口に待
 二四 ちいたる女等¹²⁾と共に臥したる次第とを聞き、 二三彼等に云いけるは、
 「汝等何故にかかる事を爲すや、我すべての民より之を聞きしが、憎む
 べき悪事なり。 二四わが子等よ、然するなかれ。寔に汝等主の民をして非
 二五 を行わしむと、わが聞く噂は善からず。 二五人もし他人に對して罪を犯さ

10) 裁ち方は大司祭のと同様であるに相違ないが地質は全く違つてゐる肩衣。
 11) 司祭になる準備をする人々の母親達にとつてまことに立派な模範。 — 12) そこで女のいろ／＼な仕事をしていた處女、また多分は寡婦も。出三八・八。路二・三七参照。

二六 ば、天主之に對して御心を宥められ給うこともあらん。されど人もし主に對して罪を犯さば、誰か之が爲に祈るを得べき。」と。然るに彼等その父の聲に聽き従わざりき。蓋は主彼等を殺さんとし給いたればなり。13) 二六 さて少年

サムエルは身大きく、成長ち行きて、主にも人にも好まるる者となりぬ。14)

二七 折しも天主の人、15) ヘリの許に來りて、之に云いけるは、「主かく云い給

う。// 汝の父祖エジプトに於いてファラオの家に在りし時、我、彼等の家に

明らかに現れしに非ずや。二八 しかして我、彼をしてわが祭壇に上りて我に香

を焚き、わが前に肩衣を着けしめんとて、イスラエルの中より彼を選び、司

祭たらしめ、イスラエルの裔等の犠牲を悉く、汝の父祖の家に與えたり。

二九 何が故に、聖殿にて献げよと命じたるわが犠牲とわが禮物とを、汝等足に

て踏み躪りたるぞ。また何が故に汝我よりも汝の子等を貴びて、わが民イス

ラエルのあらゆる献物の初穂を食するぞ。// 三〇 されば主イスラエルの天主は

かく云い給う、// 我寔に云えり、汝の家と汝の父祖の家とは、幾久しくわが

13) 彼らは

惡事をな

し、度々

聖龍に逆

らつたの

で、心が

頑冥にな

つていた

それで特

別な聖龍

も奪われ

てしまつ

た。

14) 路二・

五二。

15) 天主の
人とは、
預言者と

<p>眼前<small>めのみま</small>に仕<small>つか</small>うべしと。〃されど今<small>いま</small>や主<small>しゆ</small>は云<small>い</small>ひ給<small>たま</small>う、〃そはわが欲<small>ほつ</small>する所<small>ところ</small>に非<small>あら</small>ず、すべて我<small>われ</small>に光榮<small>こうえい</small>あらしむる者<small>もの</small>は、我<small>われ</small>も之<small>これ</small>に光榮<small>こうえい</small>あらしむべし、されど我<small>われ</small>を輕<small>かる</small>んずる者<small>もの</small>は、蔑<small>ないがし</small>ろにせらるべし。16)</p> <p>三二 視<small>み</small>よ、日<small>ひ</small>は來<small>きた</small>る。その時<small>とき</small>我<small>われ</small>は汝<small>なんじ</small>の腕<small>かひな</small>と汝<small>なんじ</small>の父祖<small>ふそ</small>の家<small>いえ</small>の腕<small>かひな</small>とを斷<small>た</small>ち、汝<small>なんじ</small>の家<small>いえ</small>に老<small>お</small>ゆる者<small>もの</small>をなからしめん。17) 三三 即<small>すなわ</small>ちイスラエル<small>いすらえ</small>の普<small>あまね</small>く繁榮<small>さか</small>ゆる時<small>とき</small>に、汝<small>なんじ</small>聖殿<small>せいでん</small>に汝<small>なんじ</small>の敵手<small>あいて</small>18) を見<small>み</small>るべく、汝<small>なんじ</small>の家<small>いえ</small>には末永<small>すえなが</small>く老<small>お</small>ゆる者<small>もの</small>なからん。三三 然<small>しか</small>りと雖<small>いえど</small>も、我<small>われ</small>はわが汝<small>なんじ</small>より出<small>い</small>でし人<small>もの</small>を祭壇<small>さいだん</small>より全<small>まった</small>くは取除<small>とりぞ</small>かじ、ただ汝<small>なんじ</small>の眼霞<small>めかす</small>み、汝<small>なんじ</small>の靈<small>たま</small>魂<small>し</small>衰<small>おとろ</small>うることあらん。また汝<small>なんじ</small>の家人<small>かじん</small>の大部分<small>おほく</small>は、丁年<small>ていねん</small>に及<small>およ</small>びて死<small>し</small>すべし。三四 さて、汝<small>なんじ</small>の二子<small>し</small>、オフニ及<small>およ</small>びフイネエスに起<small>おこ</small>るべきこの事<small>こと</small>を以<small>もつ</small>て、汝<small>なんじ</small>に對<small>たい</small>する徵<small>しるし</small>とせん。即<small>すなわ</small>ち彼等<small>かれら</small>は兩人<small>ふたり</small>共に日<small>ひ</small>を同<small>おな</small>じうして死<small>し</small>すべし。19) 三五 我<small>われ</small>はまたわが爲<small>ため</small>に忠信<small>ちゆうしん</small>なる司祭<small>しさい</small>を起<small>おこ</small>さん、彼<small>かれ</small>はわが心<small>こころ</small>とわが精神<small>せいしん</small>とに従<small>したが</small>いて爲<small>な</small>さん。されば我<small>われ</small>彼<small>かれ</small></p>	<p>三三</p>	<p>三四</p>	<p>三五</p>
--	-----------	-----------	-----------

いうに同じ。—16) 王上二・二七。—17) 王上三・二七。—18) 他族の司祭。これはヘリ族出のアビアタルが司祭職を免ぜられ、他の血統のサドクがその代りに立てられた時、一部成就した。しかしそれがもつと完全に果たされたのは、新約に入つてアローンの司祭職がキリストのそれに取つて代られた時であつた。—19) 本四・一一。—この天主の人の言葉は、アフエクの戦闘で、ヘリの子等が殲れた時、成就した。

三六
 が爲に堅固なる家を建てん、彼はいつの日にもわが注油せる者の前に歩まん。三六しかしして汝の家に遺れる者は、來りて祈禱を求め、銀一枚とパン一片とを出して云ぬん、乞う我に司祭の職務の一部を許容して、一口のパンにても食するを得しめよ。 // と。」

第三章

主サムエルを四度呼びて、之にヘリとその一家に下るべき禍を啓示し給う。

一 さて少年サムエルは、ヘリの前にて主に仕えけるが、その頃は主の御言貴くして、¹⁾ 明白なる啓示あらざりき。²⁾ 或る日ヘリその處に臥しおりしが、³⁾ その眼霞みて見るを得ざりき、⁴⁾ 天主の燈火消えざる内、サムエルは、天主の櫃ある主の聖殿に眠りおりしに、主サムエルを呼び給いしかば、彼「我此處に在り。」と答えたり。⁵⁾ しかしてヘリの許に馳せ行きて云いけるは、「我此處にあ

第三章 1) 稀にして。民が不信仰不従順であつたために、その頃は主の御啓示が稀であつたのである。 2) 奉事する司祭やレヴィ人用の小房が建ててある前庭に 3) ヘリは殆ど盲目同様になつてからは、もはや見張の役もできなかつたので、サムエルの如く(三節) 聖幕屋の中で眠つていたのではない。 4) この燈火は朝になつて消されるのである(出三〇・七。二七・二〇)。

六 六 七 八 九
 り、蓋し汝我を呼び給えり。」と。然るに彼、「我、呼ばざりき。歸りて眠れ。」と云いしかば、則ち行きて眠りぬ。然るに主またサムエルを呼び給えり。よりてサムエル、起きてヘリの許に行き、「我、此處にあり、汝、我を呼び給いたればなり。」と云いしに、彼「わが子よ、我、汝を呼ばざりき。歸りて眠れ。」と答えたり。サムエルは未だ主を知らず、また主の御言も嘗て彼に啓示されたることなかりき。主また三度目にサムエルを呼び給いぬ。彼乃ち起きてヘリの許に行き、九また、「我、此處にあり。汝、我を呼び給いたればなり。」と云いたり。茲に於いてヘリ、主の童を呼び給えることを悟り、⁵⁾サムエルに云いけるは、「行きて眠れ。しかして彼もし重ねて汝を呼び給わば、⁶⁾主よ、語り給え、汝の下僕聽く。」と云うべし。」と。よりてサムエル、行きて己が處に眠りしに、⁷⁾主來りて立ち、前に二度呼び給いし如く、「サムエル、サムエル」と呼び給いしかば、サムエル云いけるは、「主、語り給え、汝の下僕聽く。」と。⁸⁾時に主サムエルに曰いけるは、「視

5) サムエルはまだ主と親しい語らいをしていなかった。6) その場の様子から、ヘリは主がサムエルを呼び給うたことを悟つた。7) 多分は目に見えるお姿で

一三 よ、我イスラエルにて一事^じを爲^なす、之^{これ}を聽^きく者^{もの}はいずれもその耳^{みみ}兩^{ふたつ}ながら鳴^なるべし。二三その日には我^{われ}へりに對^{たい}し、その家^{いえ}に就^つきてわが云^いいたりし事^{こと}を悉^{おこな}く行^なわん。我^{われ}は始^{はじ}めん。しかして爲^なし遂^とげん。二三寔^{まこと}に我^{われ}は豫^{あらかじ}め彼^{かれ}に、その惡^{あく}の爲^{ため}に末^{すえ}永^{なが}くその家^{いえ}を審^さ判^{はん}かんと告^つげおきたり。盖^そは彼^{かれ}、その子^こ等^らの非^ひを行^{おこな}いしを知^しりながら、之^{これ}を懲^{こら}さざりしが故^{ゆえ}なり。一四さればこそ我^{われ}はへりの家^{いえ}に、その家^{いえ}の惡^{あく}は犧^{いけにえ}牲^{もつ}を以^{もつ}てしても禮^{そなえもの}物^{もつ}を以^{もつ}てしても、永^{とこ}久^{したえ}に贖^{あがな}うを得^えじ、と誓^{ちか}いたるなれ。」と。一五さてサムエルは朝^{あさ}まで眠^{ねむ}りて、主^{しゅ}の家^{いえ}の戸^とを開^{ひら}きしが、⁹⁾サムエルは啓^み視^{しらせ}をへりに告^つぐるを怖^{おそ}れたり。一六時^{とき}にへり、サムエルを呼^よびて、「わが子^こサムエルよ」と云^いしかば、則^{すなわ}ち答^{こた}えて「我^{われ}此^{こゝ}處^とにあり。」と云^いしに、一七彼^{かれ}之^{これ}に問^といけるは、「主^{しゅ}の汝^{なんじ}に告^つげ給^{たま}える御^み言^{ことば}は何^{なん}とありしぞ、乞^こう、我^{われ}に隠^{かく}すなかれ。汝^{なんじ}もし汝^{なんじ}に告^つげられたるすべての御^み言^{ことば}の中^{うち}、一語^ごたりとも我^{われ}に隠^{かく}すことあらば、願^{ねが}わくは天主^{てんしゅ}汝^{なんじ}にかく爲^なし、更^{さら}に累^{かさ}ねてかく爲^なし給^{たま}わんことを。」と。一八茲^{こゝ}に於^おい

8) ラテン語 Verbum 即ち言葉の義。

9) 聖幕屋の前庭に至る入口の幕は、シロが幕屋の所在地と定まつて以来、扉のついた堅固な門と換えられたらしい。
10) 得一・一七 参照。

一
てサムエル、彼に御言を悉く告げ、一として之を隠すことなかりしに、彼答えけらく、「そは主にて在す、その御眼に善しと映する所は、之を爲し給えかし。」と。一九さてサムエルは成長ちしが、主之と共に在しければ、彼の言は一として地に落ちざりき。二〇されば、ダンよりベルサベーに至るまで、¹²⁾ すべてイスラエルは、サムエルが主の忠實なる預言者なることを知れり。三 主また累ねてシロに現れ給いぬ。蓋し主の御言に循い、シロに於いてサムエルに顯れ給いしなり。かくてサムエルの言はイスラエルに普く及びたり。

第 四 章

イスラエル人ファイリスト人に打破られて天主の櫃を迎えたれど、再び敗るヘリの子等殺され、契約の櫃奪わる―その報せを聞きヘリ後に倒れて死す。

一 茲にその頃ファイリスト人等、戦わんとて相集まれることありしがイスラエル、ファイリスト人と戦わんと出征き、祐助の石¹⁾の邊に陣

11) 預言が地に落ちるとは、その成就されぬこと。―12) ダンは北のはずれに、ベルサベーは南方、ヘブロンからエジプトに至る途のほとりにある。

第四章 1) ヘブレオ語で、エベン・エゼル。主が後にサムエ

二 せり。然るにファイリスト人はアフエク²⁾に至りて、イスラエルに對し
 戦列を布きぬ。かくて彼等戦鬪を交うるや、イスラエル、ファイリスト人
 に背を向け、その戦鬪に此處彼處の戦場に於いて四千³⁾人ばかり殺された
 三 り。三よりて民陣營に歸りしに、イスラエルの長老等云いけるは、「何
 故に主は今日我等を、ファイリスト人の前に撃破り給いしぞ。我等の許に
 シロより主の契約の櫃を携え來らん。しかしてそれが我等を敵の手より
 四 救うよう、之を我等の中に來らしめよ。」と。茲に於いて民シロに人を
 遣したれば、彼等、智天使の上に坐し給う萬軍の主の契約の櫃を其處よ
 五 り携え來りしが、ヘリの二子オフニ及びFINEESも、天主の契約の櫃
 と共に在りき。³⁾ かくて主の契約の櫃陣中に至るや、イスラエル皆大い
 六 に叫び呼ばわりしかば、地も爲に揺せり。六時にファイリスト人等、歡
 呼の聲を聞き、「ヘブレオ人の陣中に於けるかの大いなる叫喚聲は何ぞ
 七 や。」と云いしが、やがて主の櫃の陣中⁴⁾に來りしことを悟りぬ。セファイリ

ルの祈によつてこの所でこゝろよく御民イスラエルに御祐助を下し給うたのでかく稱せられる
 2) パレスチナの南、マスファトとセンの間にあ
 り。—3) 少しも悔悛しようと思
 わぬヘリの二子
 は、いわば契約の櫃と民との間
 を隔てていたよ
 うなものであつた。

八 スト人乃ち怖れて云いけるは、「神かの陣中に來れり。」と。また嘆息して云
 いけらく、「我等は禍なる哉、蓋し昨日も一昨日も、かかる歡喜はあらざり
 けり。我等は禍なる哉、誰かこれらの高き神々の手より、我等を救うを得
 べき。是等は曾て荒野に於いて、數々の災厄もてエジプトを撃ちし神々なり。
 九 フイリスト人等よ、勇み立ちて雄々しく振舞え。ヘブレオ人が汝等に仕え
 たる如く、彼等に仕うるなかれ。勇み立ちて戦えよ。」と。一〇 かくてフイリ
 スト人戦いたるに、イスラエル敗れて、いずれも皆その天幕に逃げ入りける
 が、蒙りたる損害は甚だ大にして、イスラエルの斃れし者、歩兵三萬なりき。
 二 剩え、天主の櫃は奪い取られ、ヘリの二子、オフニとフイネエスとは死せ
 り。三 然るにベンヤミンの一人、戦列より脱れ走り、衣破れ、頭に埃を浴
 びて、四 その日シロに至りしが、五 その來りし時、ヘリは道に對い床几に坐
 して、眺め居たり、蓋しその心に天主の櫃のことを案じ居たればなり。さて
 六 かの入りて邑に告ぐるや、全市爲に哭き號びぬ。七 へり乃ちその叫びの聲

四) フイリ
 スト人は
 聖櫃の上
 のケルビ
 ムを神々
 と思つて
 いたので
 あるう。
 五) 本二・
 三四のお
 告げに合
 う。
 六) 衣を破
 り、頭に
 塵をかぶ
 るは悲し
 みの印。

を聞きて、「此の喧囂の聲は何事ぞ。」と云いしが、やがてその人急ぎ來りて、
へりに告げたり。一五へり、時に九十八歳なりしかば、その目霞みて見えざりき。

一六かの人へりに云いけるは、「我は戰鬪の中より來れる者、我は今日戰列を遁
れたる者なり。」と。へり乃ち之に云いけるは、「わが子よ、何事か起りたる。」

一七と。報告に來れる者、之に答えて云いけるは、「イスラエルはファイリスト人
に逐われて逃げ、民の中討死せる者甚だ多し。剩え汝の二子、オフニ及びファイ

一八ネエスは死し、天主の櫃は奪い取られたり。」と。かく彼が天主の櫃に云い
及びし時、へりは床几より後方に門の邊に落ち、首を折りて死せり。蓋し彼

一九は老人にして高齡なりしが故なり。因に彼は四十年の間イスラエルを裁決きた
り。折しもその媳なるフイネエスの妻は、懐胎の身にて産期近かりしが、天

二〇主の櫃は奪い取られ、その舅及び夫は死せりとの報を聞くや、身を屈めて子
を産めり、蓋し俄に陣痛彼女に起りたればなり。かくてその死せんとする時

に當り、その周圍に立ちたる人々、之に云いけるは、「恐るるなかれ、汝男子

の弱い
兩親の
その子
等に對
する誤
つた寛
容を、
天主が
罰し給
うとい
う恐る
しいみ
せしめ

を産みたり。」と。されど女は彼等に答えず、また之に氣づかざりき。8) 三しかしてその子をイカボド9) と名づけて云いけるは、「光榮イスラエルを去れり。」と。是、天主の櫃奪い取られしに由り、且、その舅及びその夫の故に由りてなり。三三なおも云いけるは、「光榮イスラエルを去れり。蓋は天主の櫃奪われたればなり。」と。

第五章

櫃の前にてダゴン二度地に倒る—櫃の至る所ファイリスト人いたく苦しめらる。

一 さてファイリスト人等は、天主の櫃を取りて、之を祐助の石よりアゾトに携え行きぬ。1) 二即ちファイリスト人等、天主の櫃を取るや之をダゴン2) の社に運びて、ダゴンの傍に置けり。三然るにアゾト人翌日早く起きたるに、視よ、ダゴン、主の櫃の前に、俯向に地に倒れ臥したり。よりて人々

8) 男子を生むことはイスラエルの女にとつて大いなる喜びであつたが、敗戦のゆえにこの女はそれさえ感じなかつた。—9) イカボドという名は、「榮譽なし」の意。

第五章 1) アゾト(アスドド)はファイリスト人の五主要都市の一つで、ガザとヤツファのほど中央にある。—2) ダゴンは半人半魚の偶像神。士一六・二三參照。

四 ダゴンを執りて、再び之を本の處に置きり。彼等また次の日、朝に起き出で見たるに、ダゴン、主の櫃の前に、俯向に地に倒れ臥したり。しかしてダゴンの頭及びその兩手、斷たれて鬩の上にあり、³⁾ 5) ただダゴンの胴體のみ本の處に残れり。この故に、ダゴンの司祭等も、その社に入る何人も、今日に至るまで、アゾトに在るダゴンの鬩を踏まず。六更に主の御手はアゾト人を太く苦しめ、之を滅ぼし、アゾト及びその附近を痔病もて惱まし給いぬ。⁴⁾ 加うるにその地方の中なる村々田畑には鼠の大群生じ、市には數多の人死ありて恐慌を來せり。⁶⁾ 七アゾト人禍のかくの如きを見て云いけるは、「イスラエルの神の櫃は、我等の許に留むべからず。その手、我等及び我等の神なるダゴンを太く苦しむればなり。」と。八乃ち人を遣し、ファイリスト人の諸侯を悉く己が許に集めて、「我等イスラエルの神の櫃を如何にすべき。」と云ひしに、

3) アゾト人は、自分等の最高の神でさえ、主の前には平伏せざるを得なかつたことを悟らなかつたので、第二の奇蹟で、もはや偶然とは決して考えられないうように、イスラエルの天主が彼らの神々を滅ぼし給うたことが示された。1) のラテン語原文は、"percussit in secretiori parte narium" 直譯すれば「尻の隠れたる所を撃つ。」一二節も同じ。
5) 詩七七・六六。

ゲト人⁶⁾の答^{こた}えけるは、「イスラエルの神^{かみ}の櫃^{ひつ}は、持ち廻^{まわ}るべし。」と。
かくて彼等^{かれら}イスラエルの天主^{てんしゆ}の櫃^{ひつ}を持ち廻^{まわ}りぬ。然^{しか}るに之^{これ}を持ち廻^{まわ}れる間に、主^{しゆ}の御手^{みて}いずれの市^{まち}にも下^{くだ}りて、甚^{はなは}だ多くの人死^{ひとじに}を出^{いだ}せり。
主^{しゆ}また各都市^{かくとし}の人々^{ひとぐ}を、小^{しょう}なる者^{もの}より大^{だい}なる者^{もの}に至^{いた}るまで、撃^うち給^{たま}いしかば、彼等^{かれら}の腸^{はらわた}出^いでて腐^{くさ}れたり。さればゲト人^{びと}相諮^{あひか}りて、己^{おの}が爲^{ため}に毛皮^{けがわ}の床几^{しょうぎ}を造^{つく}りぬ。一^一。茲^{こゝ}に於^おいて彼等^{かれら}、天主^{てんしゆ}の櫃^{ひつ}をアツカロンの^のに遣^{おく}りけるに、天主^{てんしゆ}の櫃^{ひつ}アツカロン^に至^{いた}るや、アツカロン人^{びと}叫^{よび}びて云^いけるは、「我等^{われら}及び我等^{われら}の民^{たみ}を殺^{ころ}さんとて、彼等^{かれら}神^{かみ}の櫃^{ひつ}を我等^{われら}の許^{もと}に持^もち來^{きた}れり。」と。二^二。乃^{すなわ}ち人^{ひと}を遣^{つかわ}してフィリスト人^{びと}の諸侯^{きみたち}を集^{あつ}めたるに、その人々^{ひとぐ}云^いけるは、イスラエルの神^{かみ}の櫃^{ひつ}を遣^{おく}りて本^{もと}の處^{ところ}に返^{かえ}さん。さらばその我等^{われら}並びに我等^{われら}の民^{たみ}を殺^{ころ}すことあらじ。」と。
三^三。盖^そはいずれの邑^{まち}にも死^しの恐怖^{おそれ}あり、天主^{てんしゆ}の御手^{みて}甚^{はなは}だ重^{おも}かりしが故^{ゆえ}なり。死^しせざる人々^{ひとぐ}も痔疾^{じのやまい}に苦^{くる}しめられ、各都市^{かくとし}の叫喚^{さけび}天^{てん}に達^{たつ}しぬ。

6) ゲトもその地の主要都市の一つであつた。書一一・二二参照。一) 彼等は災厄の眞の原因を悟つたが、天主に然るべき尊敬を拂おうとはしなかつた。またその力の及ばぬ町を見出すつもりでもあつたのである。8) 彼等の中には出痔で悩む者が多くあつた。一) 9) 同盟各大都市中最北のもの。今日のアキル。

第六章

櫃ベトサメスに歸る―其處に於いて好奇心よりその内部を見たる者數多死す。

二 かくて主の櫃は七箇月の間ファイリスト人の地にありしが、ニフイ

リスト人司祭と占卜者とを召びて云いけるは、「我等主の櫃を如何にすべき。之を如何にしてその處に返すべきか、我等に告げよ。」

三 と。彼等云いけるは、「汝等イスラエルの神の櫃を返す時は、空しきままにて之を遣るなかれ。罪に對する汝等の負擔を彼に果すべし。

四 さらば汝等は癒さるべく、また何故に彼の手の汝等を離れざるかを知らん。」と。四人々答えけるは、「我等が罪の爲に彼に償うべきは

五 何なりや。」彼等乃ち答えけるは、「馬汝等ファイリスト人の州の數に循いて、金の臀部¹⁾五つと、金の鼠²⁾五匹とを造るべし。是、汝等

一同と汝等の諸侯にその災厄ありたればなり。されば汝等その臀部の像と、地を荒したる鼠の像とを造りて、イスラエルの神に光榮を

第六章 1) ラテン原

語 anus 第一の意味「圓」。第二は「臀」の婉曲な云い方。

2) 鼠はファイリスト人にペストの象徴とされていたらしい。それで彼らは新しい自然科學の研究でも確認された鼠が發疹ペスト傳播に關係あることを知つていたのであるらう。

六 歸すべし、或は彼、汝等と汝等の神々、³⁾ 及び汝等の地より、その手を引き給うこともやあらん。六 汝等何故に、エジプト及びファラオがその心を頑固にしたる如く、汝等の心を頑固にするぞ。彼は撃ち懲らされし後、彼等を去らしめ、彼等漸く行きしに非ずや。⁴⁾ 七 されば今より着手して、新しき一輛の車を造り、未だ軛を着けしことなき牝牛二頭を車に繋ぎ、その仔牛を家に閉込めおけ。八 さて主の櫃を取り、之を車に載せ、汝等が罪の爲彼に償うべき黄金細工を小匣に納めてその傍に置き、之を去らしめ行かしむべし。九 しかして見るべし、櫃もしその領に至る道よりベトサメスに上らば、この大いなる災厄を我等に下せるは彼なり。されどもし然らずば、我等に觸れしは彼の手⁵⁾に非ずして、その起りしは偶然なるを知るべし。と。一〇 茲に於いて彼等かくの如くなしぬ。即ち、犢に乳養う牝牛二頭を取り、之を車に繋ぎ、その犢を家に閉じ込め、二 天主の櫃、及び黄金の鼠と臀部との像を納

3) 多分ダゴンのほかの神々も倒れたのであるらう。
 4) 出一二・三一。
 5) 仔牛を閉込められた母牛は、フィリスト人の考えによれば牛小屋へ戻る筈であつた。ところ³⁾がそ⁴⁾うでなければ、ある神の力が、それもその地に牛の引きこむこととなつた櫃のあるじたる神が、これを驅り、導いたという印になる。

二二 めたる小匣を車に載せたり。二三 さて、牝牛はベトサメスのに至る道を取りて真

直に歩み、啼きながら同一路を進み行きて、右にも左にも曲らざりき。ファイリ

三 スト人の諸侯はベトサメスの境界まで之に従い行きぬ。二三 折しもベトサメスの

人々は、谷にて小麦を刈り居たるが、その目を舉げて櫃を見、之を見るや喜べ

四 り。一四 さるほどに車はベトサメスの人ヨズエの畑に入りて其處に停まりぬ。然

るに其處に大いなる石ありしかば、彼等車の材を割りてその上に牝牛を置き、

一五 主に燔祭を献げたり。一五 即ちレヴィ人天主の櫃と、その傍なる、黄金細工の品

を納めたる小匣とを下してその大石の上に置き、それよりベトサメスの人々燔

一六 祭を献げ、その日主の爲に犠牲を屠りたり。一六 ファイリスト人の五人の君侯は之

一七 を見て、その日の内にアツカロンに歸りぬ。一七 さてファイリスト人が罪の償いと

して主に献げたる黄金の腎部は次の如し、アゾト一つ、ガザ一つ、アスカロン

一八 一つ、ゲト一つ、アツカロン一つ。一八 また黄金の鼠は五つの州にあるファイリス
ト人の邑の數による。その數の中には石垣ある邑より石垣なき村まであり、な

6) エダ 族中の レヴィ 人の邑

<p>二一 て云わしめけるは、「ファイリスト人は主の櫃 カリアテイアリム¹¹⁾の住民の許に使者を遣し 所にか上り行き給わん。」と。三かくて彼等</p>	<p>二〇 民嘆き悲しみぬ。二〇ベトサメスの人々乃ち云 いけるは、「誰かこの主聖なる天主の御前に 立つことを得べき。主我等の許を去りて誰の</p>	<p>一九 お主の櫃を載せたる大アベルのさえあり、之 は⁸⁾今日に至るまで、ベトサメスの人ヨズエ の畑にあり。一九然るにベトサメスの人々の中 に、主の櫃を見たる者ありしかば、⁹⁾主之を 打ち殺し給いぬ。即ち民の中より七十人を、 他の民の中より五万人を打ち殺し給えり。¹⁰⁾ 主かく民を打ちて大いに懲らし給いければ、</p>
--	---	--

の「大石」の義。一⁸⁾ラテン原語 *quee* は女性
關係代名詞なる故「櫃」をさす筈。しかし多く
の解釋者はアベルすなわち石をさすものとして
いる。一⁹⁾世俗的な好奇心で眺めた。一¹⁰⁾本文
は多分こうであるが、しかしイエコニアの子
等は、主の櫃を畏れていたので、ベトサメスの
人々と共に喜びはしなかつた。それで天主はそ
の中の七十人と五人のかしらを撃ち給うた。
(七十人譯)。五萬という數は本文考證によれば
不確實であり、それ自體不可能である。なぜな
らベトサメスにはそれほど多數の人がいなかつ
たからである。一¹¹⁾本七・三によれば、サムエ
ルがカリアテイアリムの住民に問われて、契約
の櫃を、天主がどこに持ちゆくべきか示し給う
まで、保管すべきことを漏らしたのらしい。カ
リアテイアリムはイエエルサレムから西へ十二キ
ロの所にある。

を返せり、汝等下りて、之を汝等の許に携え歸れかし。」と。

第七章

聖櫃カリアテイアリムに移さる―サムエル犠牲を献ぐる間に
主ファイリスト人を撃破し給う。

一 茲に於いてカリアテイアリムの人々來り、主の櫃を携え歸りて、

ガバーなるアミナダブリの家に之を持込み、主の櫃を守らしめんた

めその子エレアザルを聖別したり。主の櫃カリアテイアリムに留

まりし日より、日久しくして、(實に最早二十年を経過したれば、)

イスラエルの全家主に從いて安息えり。時にサムエル、普くイス

ラエルの家に告げて云いけるは、「汝等もし汝等の心を盡して主に

回歸らんとせば、バール、²⁾ アスタロトなど異なる神々を汝等の中

より棄て、³⁾ 汝等の心を主に備えて、ただ之にのみ事えよ。さらば

主汝等をファイリスト人の手より救い出し給わん。」⁴⁾ 茲に於い

第七章 1) アピナダ

ブは歴史家ヨゼフス
・フラヴィウスによ

れば、レヴィ人であ
つた。―2) 原語は複

數形 Baalim 四節に
於いても然り。

3) 神々の像を毀ち棄
てよとの再三のすゝ

め。―4) 申六・一三。
續四・一〇。

てイスラエルの裔等、パール、及びアスタロトを棄て、ただ主にのみ事
 えたり。五サムエルまた云いけるは、「すべてのイスラエルをマスファ
 ト⁵⁾に集めよ、さらば我、汝等の爲主に祈らん。」と。六彼等乃ちマスフ
 アトに相集まり、水を汲みて、主の御眼前に注ぎ、⁶⁾その日斷食し、其
 處に於いて「我等主に對して罪を犯せり。」と云いぬ。しかしてサムエ
 ル、マスファトに於いてイスラエルの裔等を裁決きたり。七然るにフィ
 リスト人、イスラエルの裔等がマスファトに相集まれる由を聞きたれば
 フィリスト人の諸侯イスラエルを討たんと上り行きぬ。イスラエルの裔
 等之を聞くや、フィリスト人を恐れたり。八彼等乃ちサムエルに云いけ
 るは、「我等の爲に、主我等の天主に叫ぶことを已むるなかれ。これ主
 が我等をフィリスト人の手より救い出し給わんためなり。」と。九よりて
 サムエル、乳飲む仔羊一頭を取り、⁷⁾之を燔祭として全く主に獻げぬ。
 かくてサムエル、イスラエルの爲主に祈りしに、主之に聽き給えり。

5) 士二〇・一參
 照、前にベンヤ
 ミン族に戰を宣
 した國民集會の
 開かれた處。
 6) 水を汲んで注
 ぐのは、律法に
 云つてない宗教
 的儀式。これは
 斷食及び罪の告
 白と關連して行
 つたので、償い
 の志をあらわす
 ものと思われる
 のもつと年をと
 つたものには、
 欠點があるかも
 知れない。

一〇 然るにサムエルが燔祭を献げ居りし時、ファイリスト人イスラエルに對し戰鬪を始むるに至りしが、主その日大いなる雷霆をファイリスト人の頭上にはためかせ、之を恐れしめ給いしかば、イスラエルの向う所、彼等敗走せり。⁸⁾

一一 イスラエルの人々乃ちマスファトを出でて、ファイリスト人を追ひ、之を撃破りて遂にベトカルの下に至りぬ。⁹⁾ 一二 時にサムエル一つの石を取りて、之をマスファトとセンとの間に置き、¹⁰⁾ その處を、「祐助の石」と稱びて云いけるは、「此處まで、主我等を助け給いぬ。」と。 一三 かくてファイリスト人征服えられ、重ねてイスラエルの境界に至らんとはせざりき。しかしてサムエルの生ける日の限り、主の御手ファイリスト人を禦ぎたり。 一四 かくてファイリスト人がイスラエルより取りし邑々は、アツカロンよりゲトに至るまで、その領地と共にイスラエルに返還されぬ。かくの如く主イスラエルをファイリスト人の手より救い給いて、イスラエルとアモル人との間に平和ありき。¹¹⁾ 一五 さてサムエルはその生ける日の限りイスラエルを裁決きぬ。 一六 即ち年毎にベテ

8) 集四六

・二〇。

9) 集四六

・二一。

10) サムエ

ルは戰勝

記念に巨

石の碑を

立てた。

11) アモル

人は南に

おいてフ

イリスト

人に次い

で最も敵

對した民

族であつ

た。

一七
 ル、ガルガラ、及びマスファトを巡回り、上述の處に於いてイスラエルを裁決き、¹²⁾一七) ラマタに歸れり。蓋し其處にその家ある故にして、彼其處に於いてイスラエルを裁決きたり。彼はまた主の爲其處に祭壇を築きぬ。

第八章

サムエル老い、その子等彼の道を歩まざるによりて、民王を戴かんことを希う。

一 一) さてサムエル老ゆるに及んで、その子等をイスラエルの士師と定むるに至れり。二) その長男の名はヨエル、次男の名はアビアにして、ベルサベーに於いて士師たり。三) 然るにその子等、彼の道を歩まずして、貪慾に流れ、賄賂を受け、²⁾ 審判を枉げぬ。四) 茲に於いてイスラエルの長老等皆集まりて、ラマタなるサムエルの許に來り、五) 之に云いけるは、「視よ、汝は老い、汝の子等は汝の道を歩まず。されば我等を裁決か

12) 裁く場所ガルガラ(書四・一四)及びマスファ(士一一・一一)の兩所は彼の領地内にあり、もう一つのベテルは彼の領地に近かつた。

第八章 1) ベルサベーは南のはずれにあつたから、老人には到り難かつた。
 2) 士師が贈物を受納することとは禁じられていた。申一六・一九参照。

六 しめんため、諸國の民が戴ける如く、我等にも王を立てよ。」と。六この言サムエルの眼に快からず

見えたり、蓋は彼等「我等を裁決かしめんため、

我等に王を與えよ」と云いたればなり。サムエル

乃ち主に祈りけるに、主サムエルに曰いけるは、

「その汝に云う所、何事にても民の聲に聽き従え。

蓋し彼等が棄てたるは汝に非ず、我にして、彼等は

我をして彼等の上に君臨せしめざらんとするなり。」

八 彼等は、我が彼等をエジプトより導き出しし日よ

り今日に至るまで、その爲したる諸々の所行により

て、我を棄て、他し神々に事えし如く、汝にも亦然

す。九 されば今彼等の聲に聽き従え、されど彼等を

戒めて、彼等を治むべき王の權利を豫じめ之に告げ

3) 王政の始まる前に、王を立てるに就いての掟が豫め與えられていた(申一七・一四―二〇)。しかしかかる事情の下に民がサムエルに向かつてなした要求は、天主を棄てるに等しく、従つてサムエルの不興を招かずにはいなかつた。―何一三・一〇。徒一三・二二。

4) この願いに伴う大罪は、その理由がサムエルの老齡よりも寧ろ天主に對する信仰や信頼の欠如であつたので、彼の不興を招いたのである。―もし彼らがただ汝のみを棄てたのなら、汝が彼らの願いを拒否して、彼らを罰するのは當然である。しかし彼等は我を棄てたのであるから、その願いが聞き届けられるという、一層ひどい罰を受ける。

一〇 よ。」との。の。一〇よりてサムエル、彼に王を請い求めたる民に、主の御言を
 二 悉く告げ、二さて云いけるは、「汝等を治むべき王の權は次の如くなる
 三 べし。即ち彼は汝等の息子を取りて、その車に載せ、又之を己が爲に騎兵
 三 となし、その車の前驅となし、三なお己が爲に立てて將となし、百夫長と
 三 なし、またその畑を耕さしめ、その作物を刈らしめ、またその武器や車を
 三 造らしむべし。一三彼はまた汝等の娘をも取りて、己が爲の香料製造者、料
 一四 理係、パン焼者となすべし。一四彼はまた、汝等の畑と、葡萄畑と、最佳き
 一五 橄欖畑とを取りて、その臣下に與え、一五更に汝等の穀物と葡萄畑の收穫と
 一六 の十分の一のを取りて、その宮人と下僕とに與うべし。一六彼はまた汝等の
 一七 僕婢、及び最佳き若者と驢馬とを取りて、己が勞役に用い、一七また汝等
 一八 の畜群の十分の一を取るべく、汝等彼の奴僕となるべし。一八かくてその日
 には汝等、己が爲に選びたる汝等の王の面前より叫喚ばん。されどその日
 には主汝等に聽き給わざるべし。蓋は汝等己が爲に王を求めたればなり。」

の王權はこうあるべきだといふのではなく、こうなるだろつといふのである。それだけにそれは、全く異つていたサムエルの權よりもいよいよ恐るべきものとなる筈であつたの天主が既に求めておいでになつたのは別な。

一九 と。一九 然るに民、サムエルの聲に聽き従うを欲まずして云いけるは、
 二〇 「否、我等王を戴きて、二〇 諸國の民の如くにならん。かくて我等の王
 こそ我等を裁決き、我等の先頭に立ちて出征き、我等の爲我等の戦争
 二一 に戦うべけれ。」と。三 三 させてサムエルは民の言を悉く聽きて、之を
 三二 主の御耳に告げたり。三三 時に主サムエルに曰いけるは、「彼等の聲を
 聽きて、之が上に王を立てよ。」と。サムエル乃ちイスラエルの人々
 三三 に云いけるは、「人各々己が市に行け。」と。

第九章

サウル父の驢馬を探ねてサムエルの許に來り、その歡待を受く。

一 茲にベンヤミンの人にして、その名をキスと云える者あり、イエミ
 二人の子アファイア、その子ベコラト、その子セロル、その子アビエル
 二 の子なりしが、力強かりき。二 彼にサウルと稱ぶ優れて佳き一子あ
 三 り、イスラエルの裔等の中、之より佳き者はあらず、肩より上民のす

8) 我は天主が誰を王と定め給うたかを知つたら、また汝らを呼びよせよう。

第九章 1) 「申し子」すなわち兩親が天主にお願いして授けられた子の義。

一四 主汝等に王を興え給えり。一四 汝等もし主を畏れ、之に仕え、その御聲を聴き、

主の御口に背かずば、汝等も、汝等を治むる王も、主汝等の天主に従う者たら

一五 ん。一五 されど汝等もし主の御聲を聴かず、その御言に背かば、主の御手汝等と

一六 汝等の父祖との上に下るべし。一六 されば今立ちて、主が汝等の眼前に爲し給う

一七 べきこの大なる事を見よ。一七 今日は麥の刈入時に非ずや。我主を呼びて御祐助

を求めん、さらば主は雷と雨とを賜わん。かくて汝等、己が上に王を求めしに

一八 より、主の御眼前に大いなる非を爲したる事を、知り、且曉らん。」と。一八し

一九 かけてサムエル、主に叫びしに、主その日雷と雨とを賜えり。12) 一九 茲に於い

て民皆主とサムエルとを大いに恐れたり、民乃ち舉りてサムエルに云いけるは、

「汝の下僕等の爲に、主汝の天主に祈り給え、これ我等の死することなからん

ためなり。我等寔に、己が爲に王を求めて、我等の數々の罪にまた惡を累ねた

二〇 り。」と。二〇 然れどもサムエル民に云いけるは、「恐るるなかれ。汝等このす

べての惡を爲せり、されど主に従うを已めずして、汝等の心を盡し主に仕え、

12) 五月末頃行われる
麥の刈入時に
雷や雨が
あるのは、
パレスチナでは非常
に珍らしいこと
とである。

九

叫びけるに、主モイゼとアーロンとを遣し、汝等の父祖をエジプトより導き出して、之をこの處に住めしめ給いしは如何に。然るを彼等は主己が天主を忘れたれば、主之をハソル軍の將シサラの手にフイリスト人の手に、またモアブの王の手に付し給いぬ。よりて彼等之と戦えり。然るに彼等後に至り、主に叫びて云いけるは、

一〇

「我等主を棄て、パールとアスタロトの手に仕えしに由りて、罪を犯せり。されど今我等の敵の手より我等を救い給え。さらば我等汝に仕えん。」と。二茲に於いて主、イエロパールと、バダンと、イ

二

エフテと、サムエルとを遣して周圍に在る汝等の敵の手より汝等を救い給いしかば、汝等安んじて住めり。然るに汝等、アンモン

二三

の裔等の王ナースが汝等を攻めんと來るを見て、我に云いぬ「否、王ありて我等を治むべし。」と、主汝等の天主こそ汝等の王に在すものを。三さて今や汝等の選び、且望みし王此處に在り。視よ、

二四

5) 創四六・五。1) 6) 士四・二。1) 7) 原語複數形 Balaam。パール及びアスタロトの神々。1) 8) ゲデオンとサムソンのこと。サムソンがこゝでバダン或はベダンと稱はれてゐるのは、ダン族の出であるから。9) 士六・一四。1) 10) さればヤベスが未だ圍まれざる前のナースとの戦争が、彼らの王を奉戴せんと欲する原因となつたのである。1) 11) 本八・一九。一〇・一九。

三

我はわが青春より今日に至るまで、汝等と共に生活したり、視よ、我、此處に在り、^三主の御前に、またその油を注ぎ給いし者の前に、わがことを告げよ、

四

我は何人かの牛又は驢馬を取りしことありや、何人かを讒れることありや、何人かを虐げしことありや、何人かの手より賄賂を受けしことありや、あらば今日我之を悔いて、汝等に償いを爲さん。」^三と。^四彼等云いけるは、「汝は我等を讒りしことも、虐げしことも、また何人かの手より賄賂を受けしこともなし。」

五

と。^五彼また彼等に云いけるは、「汝等がわが手の中に何物をも見出さざること、は、主汝等に之を證し給う、またその油を注ぎ給いし者⁴も今日之を證す。」

六

と。彼等乃ち云いけるは、「證し給う。」と。^六サムエルまた民に云いけるは、「主はモイゼとアロンとを立て、且エジプトの地より汝等の父祖を導き出し給える御者に在す。セされば、いざ、立て、主が汝等に對し、また汝等の父祖に對し、爲し給える諸々の御憐憫の業に就き、我主の御前に於ける裁判にて汝等と論争わん。」^八即ち、ヤコブ、エジプトに入るや、汝等の父祖主に向かいて

七

と。彼等乃ち云いけるは、「證し給う。」と。^六サムエルまた民に云いけるは、「主はモイゼとアロンとを立て、且エジプトの地より汝等の父祖を導き出し給える御者に在す。セされば、いざ、立て、主が汝等に對し、また汝等の父祖に對し、爲し給える諸々の御憐憫の業に就き、我主の御前に於ける裁判にて汝等と論争わん。」^八即ち、ヤコブ、エジプトに入るや、汝等の父祖主に向かいて

八

と。彼等乃ち云いけるは、「證し給う。」と。^六サムエルまた民に云いけるは、「主はモイゼとアロンとを立て、且エジプトの地より汝等の父祖を導き出し給える御者に在す。セされば、いざ、立て、主が汝等に對し、また汝等の父祖に對し、爲し給える諸々の御憐憫の業に就き、我主の御前に於ける裁判にて汝等と論争わん。」^八即ち、ヤコブ、エジプトに入るや、汝等の父祖主に向かいて

3) 集四

六・二

二。

4) 注油

されて

王とな

つたサ

ウル。

一四 日は何人をも殺すべからず、それは今日主イスラエルに救済を成就せ給いたればなり。」と。13) 一四またサムエル民に云いけるは、「いざ、我等ガルガラ14) に行き、彼處にて王政を新たにせん。」と。一五 民乃ち皆ガルガラに行き、其處に於いて主の御前にサウルを王となし、また其處に於いて主の御前に和祭の犠牲を屠り献げぬ。かくしてサウル及びイスラエルの人々皆、其處に於いて大いに歡を盡せり。15)

第十二章

サムエル士師の職を辭し、責を果したることを民に告ぐ。

一 時にサムエル、すべてのイスラエル人に云いけるは、「視よ、我は汝等が我に云いし一切の事に就き、汝等の聲を聽きて、汝等の上に王を立てたり。二 今や王汝等の前に歩む。1) されど我は年老いて髮白く、わが子等汝等と共にあり。2)

13) サウルがかく寛仁を示したの
は、賢明であつた(母下一九・
二二のダヴィドの態度を思い合
わせよ)。一四) ガルガラは本七・
一六にある聖なる處の一つで、
ヤベスのすぐ近くにある。
15) サウルが一般に王と認められ
たこと。

第十二章 1) 王は汝等の指揮を
する、殊に戦争の時に。
2) 汝等と同様、すなわち士師の
權を有せず。

九 スラエルの裔等は三十萬、またユダの人は三萬ありき。九 人々來り
 八 の如く出でたり。八 彼乃ちベゼク⁷⁾に於いて彼等を數えたるに、イ
 七 らるべし。」と。茲に於いて主を懼るる情民に起り、彼等恰も一人
 六 たる使者等に云いけるは、「汝等ヤベス・ガラードに在る人々にか
 五 く云うべし。〃明日⁸⁾陽熱からん時⁹⁾、汝等に救援あらん。〃と。」
 四 茲に於いて、使者等至りてヤベスの人々に告げしかば、彼等喜べり。
 三 〇 しかして云いけるは、「明朝我等汝等¹⁰⁾の許に出で降らん、され
 二 ば汝等欲いのままを我等に爲すべし。」と。二 さて明日となるや、
 一 サウル民を三隊となして、陣の中に朝の哨戒の時¹¹⁾に侵入し、日の
 暑くなるまでアンモン人を殺したれば、残れる者は逃げ散りて、彼
 等の中二人共に在るはなかりき。三 時に民サムエルに云いけるは、
 二 「豈サウルを我等の王とすべけんや。〃と云えるは誰ぞ。その人
 一 を付せ、我等之を殺さん。」と。¹²⁾ 一三 然るにサウル云いけるは、「今

け加えたのは、自分
 がまだ萬人に王と認
 められていなかつた
 からである。一⁷⁾イ
 ツサカル族の領内に
 ありて、ヤベス市に
 相對す。一⁸⁾歸りて
 後。ナイスの定めた
 期限は経過したのら
 しい。一⁹⁾正午に。
 10) アンモン人。
 11) 夜の哨戒時間の最
 後。すなわち午前二
 時から六時まで。
 12) この言葉は本一〇
 ・二七で不満を云つ
 た人々をさす。

り出し、³⁾ 汝等を全イスラエルに對する恥辱とせん。」と。

三 ヤベスの長老等之に云いけるは、「我等がイスラエルの

全地に使者を遣さんため、我等に七日の猶豫を與えよ、し

かしてもし我等を防衛する者なくば、我等汝の許に出で降ら

ん。」⁴⁾ かくて使者等サウルのガバーに至り、民の聞

ける所にてこの言を語り聞かせたるに、民皆聲を擧げて泣

きたり。⁵⁾ 折しも見よ、サウル牡牛を追いつつ畑より來り

て、云いけるは、「民何事ありて泣くや。」と。彼等乃ち

六 ヤベスの人々の言を之に告げぬ。然るにサウルその言を

七 聽くや、主の靈之に下りて、その怒太く燃えたり。彼乃

ち牡牛二頭を取りて之を寸斷し、使者の手によりイスラエ

ルの領内に普く送りて云わしめけるは、「凡そ出でてサウ

ルとサムエルの⁶⁾とに従わざる者は、その牡牛かくの如くせ

方の首都。—³⁾小アジアで、戦
争の捕虜に對し屢々取つた處置
左眼は楯に隠れるので、こうす
ると戦鬪ができなくなつた。

⁴⁾ ナースが承諾したのは、その
都市を急速に陥れることができ
そうにもなかつた爲と、殘餘の
民の救援に來ぬことが確實であ
つた爲とであつた。王の選舉の
ことは、イスラエル全族に使者
を遣つたヤベス市民同様、彼も
知らなかつた。⁵⁾ サウルは人
民がまだ王政を受けるに慣れて
いないことに氣付いていた。そ
れで自分のもとの生業にいそし
みつつ、王として起つべき機會
を待つのが最も良いと考えたの
である。⁶⁾ 彼がサムエルを附

置きぬ。しかしてサムエル民を皆、各自その家に歸したり。

二六 サウルも亦、ガバーなる己が家に行きしが、天主が心を動か
し給える軍勢の一部¹⁶⁾も彼と共に^ゆ行けり。二七 されどベリアル

の子等は、¹⁷⁾「この者果して我等を救うを得べきや。」と云いて、
之を輕蔑んじ、之に禮物を奉らざりき。¹⁸⁾ 然れども彼は聞かさ
るが如くよそおいたり。

第十一章

サウル、アンモン人を破りて、ヤベス・ガラードを救う。

一 然るにその一箇月ばかり後の事なりき、アンモン人ナース¹⁾
上り來て、ヤベス・ガラードと戦争を始めしに、ヤベス²⁾の人
皆ナースに云いけるは、「我等と盟約を結べ、さらば我等汝に
仕えん。」と。ニアンモン人ナース之に答えけるは、「我は次の
條件の下に汝等と盟約を結ばん。即ち我汝等一同の右の眼を抉

16) 儀杖隊。これは進んで新王に奉仕を申し出た。
17) 不満な人々。――18) 新王に禮物を奉るのが習慣であつた。それを拒んだのは、敵意の表示。

第十一章 1) 本一二・一二によれば、ガラードの東にある荒野の境界に住んでいた強い好戦民族アンモン人の、當時の王であつた。――2) ガラード地

二〇 艱難とより救い出し給える天主を棄て、否、我等の上に王を立てよ。と云いたり。されば今、汝等の族毎に、また家毎に、主の御前に立て。〃と。13) 二〇かくてサムエル、イスラエルの諸族を來らしめたるに、籤はベンヤミン族に當れり。14) 三次いでベンヤミン族とその一門とを來らしめたるに、籤メトリの一門に當り、更にキスの子サウルにまで及びぬ。茲に於いて人々彼を探ねたれど、見當らざりき。二三 されば彼等その後主に、彼の其處に來るや否やを問ひしに、主答え給ひけるは、「視よ、彼は隠れて家に在り。」と。二三 彼等乃ち馳せ行きて彼を其處より連れ來りしが、彼民の中に立ちし時、肩より上、民の何人よりも高かりき。二四 時にサムエルすべての民に云ひけるは、「寔に汝等主の選び給える者を見る、そは全ての民の中に之に類う者、15) また非ざればなり。」と。民皆叫び云ひけるは、「王の壽長かれ。」と。二五 さてサムエルは王政の憲法を民に告げ、書に録し、主の御前に藏め

13) 本八・一九。
 14) サウルが既に注油されて王になつたことは、ただサムエルとサウルしか知らなかつた。籤びきはウリムとトウミムを用いてしたらしいが、それによつて天主の御旨を民全體に知らせようとしたのであつた。—15) 體格の偉大で立派なことは、支配者の特別な資格とされていた。

一三 るか。」と。10) 然るに一人、他の一人に答えて云いけるは、「抑々彼等の父は誰ぞ。」と。茲に於いて「サウルは預言者の仲間なるか。」と云うは諺となりぬ。11) 一三さて彼預言を終うるや、高き處に至りしが、
 一四 時にサウルの叔父彼とその下僕とに云いけるは、「汝等は何處に行きしぞ。」彼等答えけるは、「驢馬を探ねに。されど見當らざりしかば我等サムエルの許に行きぬ。」と。一五その叔父彼に云いけるは、「サムエルの汝に云いし事を我に告げよ。」と。一六サウル乃ちその叔父に云いけるは、「驢馬の見當りしことを我等に告げたり。」と。されどサムエルフア12) に、主の御許に召集め、一八イスラエルの裔等に云いけるは、「主イスラエルの天主かく云い給う、〃我はイスラエルをエジプトより導き出し、エジプト人の手より、また汝等を苦しめたる諸々の王の手より、汝等を救えり。一九されど汝等は今日獨り己をあらゆる災厄と

10) この問は、サウルに豫想もしていなかつた事が起つたという驚異をあらわしている。答は「サウル及び預言者たちの群に起つた事は、全く自然的原因によらずして起つた。それにはより高い力が作用していた」という意味らしい。
 11) 本一九・二四。
 12) 天主が少し前に王がなくても民を救い得る旨、お示しになつた所。

六 下り來るに逢わん、しかして彼等は預言すべし。六時に主の靈汝に下りて、汝彼等と共に預言し、變じて別人とならん。七されば是等の徵汝に起らん時は、何事にても汝の手の當るままに之を爲せよかし、蓋は主汝と共に在せばなり。の八また汝は我より先にガルガラに下らん、(我も必ず汝の許に下り行くべし)これ供物を獻げ和祭の犠牲を屠らんためなり。わが汝の許に至りて、汝に爲すべき事を示すまで、汝、七日の間待つべし。」との九かくて彼その背を向けてサムエルの許を去るや、天主その心を變じて異らしめ給えり。しかして是等の徵は悉くその日に起りぬ。一〇即ち彼等前述の丘に至りしに、視よ、一群の預言者彼に逢えり。折しも主の靈彼に下りしかば、彼等の中にて彼預言したり。の二されば昨日及び一昨日の彼を知れる者皆、その預言者等と共に在りて預言するを見、相互に云いけるは、「キスの子に何事か起りし。サウルは、預言者の仲間な

天主の御榮えに對する熱心を、聖歌などによつてあらわした人々である。サムエルは預言者の學校を創始したが、その内の一つはガバーに、その他はラマにあつた。一の特別お助け下さつて。一s)本一三・八。一9)彼はこれら預言者達と共に熱烈な宗教的歌を唱つた。

二 徴は次の如し。3) 二 汝、今日わが許を去り往かば、南の方べ

ンヤミンの境界なるラケルの墓の畔に於いて、二人の人に逢

うべし、彼等は汝に云わん、⁴ 汝が探ねに行きし驢馬は見當

れり。されば汝の父は最早驢馬のことを思わす、ひたすら汝

等の身を心配し、わが子の爲に我何をか爲すべき、と云

いたり。〃と。三 汝其處を去りて更に進み行き、タボルの榭

樹の所に至らば、天主に詣でんとベテルに上る三人の人、其

處にて汝に逢わん、その一人は仔山羊三頭を、一人はパン三

塊を、また一人は葡萄酒一壺を携えおるべし。四 彼等は汝に

挨拶するや、パン二塊を汝に與えん、しかして汝之をその手

より受けん。五 その後汝天主の丘⁵に至らん、其處にはフィ

リスト人の守備隊あり。さて汝其處の邑に入らん時、一群の

預言者⁶の、琴、太鼓、笛、小琴を己が前にして、高き處よ

三〇・二三以下、利八・一

〇以下)。それで今サウル

が注油によつて聖別され、

王になると、これによつて

王位も司祭職と共に、天主

のお定めになつた制度とし

て起つたことになる。

2) 臣事と尊敬とのしるし。

3) 徒一三・二一。一4) 天主

の権限に屬する献物の一部

による最初の臣事の禮。こ

の事はサウルにとつて、天

主の御選びを蒙つたという

何より明らかかな保證である

5) ガバー。一6) この預言者

等は、律法の考察、規則正

しい信心の勤行、いろいろ

な苦行にいそしみ、且その

が、その時サムエル屋上なるサウルを呼びて云いけるは、「起
 きよ、我汝を去らしめん。」と。サウル乃ち起きたり。茲に於
 いて彼等兩人、即ち彼とサムエルと、共に出でぬ。三七 彼等下り
 行きて市の極部に至りし時、サムエル、サウルに云いけるは、
 「下僕に、我等の先に立ちて進めと云え、¹³⁾ されど汝は少時留
 まれかし、そは、我汝に天主の御言を示さんためなり。」と。

第十 章

サウル注油を受けて、別人の如くになる—サムエル民を召集して
 王を立てんとす—籤サウルに當る。

一 かくてサムエル油の容器を取りて、彼の頭に注ぎ、¹⁾ 之に接
 吻して²⁾ 云いけるは、「視よ、主は汝に注油して、その嗣産に
 君主たらしめ給えり。されば汝、主の民をその周圍にある敵の
 手より救い出すべし。即ち天主汝に注油して君主たらしめ給え

13) 實際の聖別は少時秘し
 ておかなければならなかつた。

第十章 1) 注油は天主の
 靈を賦與することの象徴
 (利八・一二)。それまで
 は天主の民の中では、た
 だ司祭や聖所の注油のほ
 か、行われなかつた(出

て云いけるは、「我はイスラエルの最も小さき支族なるイエミニの子にして、わが一族はベンヤミン族の諸家の中最も賤しきものに非ずや。然るを何故にかかる言を我に云えるぞ。」と。二三

それよりサムエル、サウルとその下僕とを連れて、之を堂内に導き、招かれたる人々の最も上座なる席を之に與えたり、11) 座にありしは三十人ばかりなりき。

二三サムエル次いで料理人に云いけるは、「我が汝に與えて、汝の許に取除けおくよう命じたりし分を出せ。」と。二四料理人、乃ち肩を取り

上げて、サウルの前に置きり。サムエルまた云いけるは、「視よ、遺しおきたる物を。汝の前に置きて食せよ。其は我民を招きし時、之を

故意に汝の爲に貯えおきたればなり。」と。よりてサウルその日はサムエルと共に食しぬ。二五かくて彼等高き處より邑に下り行きしが、後

サムエル屋上にてサウルと語り、またサウルの爲屋上に臥床を用意したれば、12) 彼眠れり。二六さて翌朝彼等が起きしは、既に夜明けなりし

るのである。汝は最早父の驢馬二三頭のことを心配するには及ばない、やがてもつと多くの物が、イスラエルにあるすべての物が、汝の所有に歸するから。
11) サウルは將來王位に就くので、最も上座に着いた。
12) 小アジアでは大抵平屋根で、そこは夏でも涼しく氣持がいいから、夜寝るのによい。

一五 高き處たかところに上らんとて現れ、彼等かれらに向いて出で來れり。一五 然るに主しほ、サウルの來きたる前日ぜんじつ、サムエルの耳みみにうちあけて曰のたまいけるは、⁹⁾一六 明日略あすぼよこの時刻じくに、我われベンヤミンの地ちより、一人ひとりの人ひとを汝なんじの許もとに遣つかさん。汝なんじ之これに注油ちゆうゆして、わが民たみイスラエルの上うえに立つ者ものたらしむべし。さらば彼かれわが民たみをフイリスト人びとの手てより救すくい出いださん。そは彼等かれらの叫さけびわが許もとに至いたりしに由よりて、我われわが民たみを眷顧かえりみたればなり。」と。一七 またサムエル、サウルを見し時ときにも、主しほ之これに曰のたまいけるは、「視みよ、わが汝なんじに告つげし人ひとを。是これぞわが民たみを治おさむべき者ものなる。」と。一八 折おりしもサウル、門もんの中うちなるサムエルに近寄ちかよりて云いいけるは、「乞こう、洞見者どうけんしやの家いえは何處いずこに在あるか、我われに告つげよ。」と。一九 サムエル乃すなわちサウルに答こたえて云いいけるは、「我われこそ洞見者どうけんしや見者けんしやなれ。今日きよう我われと共ともに食しょくせんため、わが前まえに高き處たかところに上ゆり行ゆけ。さらば我われ明あ朝あ汝おんみを去さらしめ、汝おんみの心こころにある事ことをすべて汝おんみに示しめさん。二〇 また一昨日おととい汝おんみの失うしないたる驢馬ろばは、既すでに見出みいだしたるに由より、案あんずるなかれ。凡およそイスラエルの佳よき物ものは誰たれの所有ものなりや。汝おんみ及び汝おんみの父ちちの一家かの所有ものに非あらずや。」と。二一 サウル答こたえ

9) 徒一 三・二 一。 10) 凡そイスラエルの佳き物は誰のものなりや」といふサムエルの言葉はわがと隣味に主權をさしてい

九 が手に銀一スタテル⁶⁾の四分の一あり。我等之を天主の人に與えて、我等に道を示さしめん。」と。九 (往昔イスラエルにては、人天主に問わんとて行くに當り、「いざ、洞見者の許に行かん。」と云いたり。蓋し、今日預言者と云わるる者、往昔は洞見者と稱ばれしなり。)の一。サウル乃ちその下僕に云いけるは、「汝の言や甚だ善し。いざ、我等往かん。」と。かくて彼等、天主の人の居る市に入り行けり。二 然るに彼等その市に至る坂を上れる折しも、少女等の水を汲まんとて出で來れるに逢いしかば、之に云いけるは、「洞見者此處に在りや。」と。二三 彼等之に答えて云いけるは、「在り。視よ、彼は汝の前にぞある。いざ急げ、彼寔に今日この市に來れり。そは今日高處にて、民の犠祭あればなり。二三 汝等市に入るや、彼が食せんとて⁸⁾高き處に上り行く前に、直に之に逢うべし。蓋し民は彼が來るまで食せじ、そは彼、犠牲を祝して、然る後招かれたる人々食すればなり。されば、いざ上れかし。汝等今日彼に逢うべければなり。」と。一四 茲に於いて彼等市に上り行き、市中を歩み居りしに、サムエル

6) 今の貨幣價値では約五十圓。
 7) この括弧の付いていない書もある。
 8) 犠牲の食事

三 べてに拔んでたり。或る時サウルの父キスの驢馬失せしかば、キスその子サウルに云いけるは、「下僕等の一人を伴い、起ちて往き、驢馬を探ねよ。」と。彼等乃ちエフライムの山地を通り、サリサの地を通りて行きたれども見出さざりしかば、またサリムの地をも通り過ぎしかど居らず、イエミニの地を通りたれども、全く見當らざりき。かくて彼等スフの地に至りし折、サウル彼と共に在る下僕に云いけるは、「いざ歸らん、然らずば恐らくはわが父驢馬を措きて、我等の爲に心痛せん。」と。下僕彼に云いけるは、「視よ、この市に天主の人あり、名高き人³⁾にこそ。その云う所、皆謬たず成就す。されば我等今彼處に行かん、彼我等の來れる道に就きて我等に示すことを得ん。」と。時にサウルその下僕に云いけるは、「視よ、我等往かん。されどその天主の人に、我等何をか贈るべき。」我々が囊の中なるパンは盡きたり、されば天主の人に與うべき贈物もなく、また何物もなし。」と。下僕再びサウルに答えて云いけるは、「視よ、わ

2) ラマはそこにあつた。
 3) 預言の賜物あるに由つて
 4) 本七・一七。
 5) 天主の御前に空手が出ることは許されなかつたが、王や預言者に對しても同様

三 迷いて空しき物を追うなかれ、それは空しきが故に、汝等を益すること
 三 また救うこともなきなり。三 然なせば、主もその大いなる御名の爲に、そ
 の民を棄て給わさるべし。主、汝等を己が民となさんと誓い給いたればな
 三 三 我は主に對して、汝等の爲に祈るを己むる如き、かかる罪は斷じ
 二四 13) 我は主に對して、汝等の爲に祈るを己むる如き、かかる罪は斷じ
 て犯さじ。しかして我は汝等に善くして正しき道を教えん。二四 されば主を
 畏れ、誠實もて汝等の心を盡し之に仕えよ。蓋し汝等その汝等の中にて行
 二五 給える大いなる御業を見たればなり。二五 されど汝等なお惡に留まりなば
 汝等も、汝等の王も、等しく滅ぶべし。」

第十三章

サウルとフィリスト人との戦争—イスラエル人の患難—サウル、
 サムエルの來らざる内に犠牲を捧げ、その爲に譴責を受く。

一 サウル一歳¹⁾の子にして、始めて王たり、二年の間イスラエルを治めぬ。
 二 さてサウルは己が爲にイスラエル人三千を選べり、その二千はサウルと

13) サムエルは
 天罰を下し給
 う天主を恐れ
 ることから、
 恩恵を垂れ給
 う天主を愛す
 ることへ民を
 導こうとする

第十三章
 1) この節のこ
 の語は明らか

共にマクマス、²⁾ 及びベテルの山地にあり、一千はヨナタスと共にベンヤミンのガバーにあり、³⁾ 殘餘の民は彼之をそれぞれその天幕に歸したり。

三 折しもヨナタス、ガバーに在るフィリスト人の守備隊を討ちけるが、⁴⁾ フィリスト人之を聞きし時、サウル全國に喇叭を吹鳴らして云わしめけるは、「ヘブレオ人よ、聽け。」と。^四 しかしてすべ

てのイスラエルが聞きしは、かくの如き報なりき曰く、「サウル、フィリスト人の守備隊を討てり。」と。茲に於いてイスラエル、フィリスト人に對して起てり。民乃ち叫びて、サウルに従いガルガラに至りぬ。^五 フィリスト人も亦イスラエルと戦わんとて集まれり、即ちその戰車三萬、⁵⁾ 騎兵六千、

に筆寫生の誤謬である。天主はこういう副次的な事では、聖書に語の誤りが入ることを許容し給うた。しかし原文を最古の譯と照合して見ると、本文の重要な箇所では語に謬りなく傳えられていることがわかる。タルグム(舊約原典のアラマ語意譯)などには、「サウルは、一歳の兒の如く罪なかりき。」と解釋してある。彼はそういう精神で二年間治めたのである。1)2)マクマスは今日のムーマスで、イエルサレムから北へ行程三時間の所にあり、ヨルダン河側方の溪谷に至る隘路の入口にある。1)3)王の權威を擁護し、外敵に抵る戦士の中核を形成するための、常備軍の始め。1)4)彼はイスラエル人の勇氣を鼓舞し、フィリスト人を愕かすため、父に問わずにこうしたらしい。5)一流批評家の意見では筆寫した人の誤

六 きて、ベタヴェンの東、マクマスに陣せり。六イスラエルの
 人々、己が窮地に陥りしを見るや、(實に民苦しかりし
 かば)、洞に、繁みに、岩に、窟室に、井に隠れたり。
 七 またヘブレオ人は、ヨルダンを渡りて、ガド及びガラ
 ドの地に入れり。しかもサウルなおガルガラに留まるに及
 びて、之に従える民皆太く恐れたり。八 彼、サムエルの指
 令に従い七日の間待ちおりしが、サムエル、ガルガラに來
 九 らざりければ、民彼より離れ去りぬ。九 時にサウル云いけ
 るは、「燔祭と和祭とを我に持ち來れ。」と。かくて燔祭を
 一〇 捧げたり。八) 然るに燔祭を捧げ終えし時、視よ、サムエ
 二 ル來りしかば、サウル挨拶せんと之を出で迎えしに、二サ
 ムエル彼に云いけるは、「汝何をか爲したる。」と。サウル

謬で、甚だしく過大な數である
 と。これは比較的少數な民族で
 あつたフィリスト人の數にも合
 わず、あまり戦車の効果を發揮
 できぬ山岳地帯で行われたその
 戦争の必要にも合わぬし、また
 北方カナアン人の王ヤビンが七
 百輛(士四・三)サロモンが千
 四百輛(王上一二・二六)、シ
 リアの王アダレゼルが千輛(代
 上一八・一四)しか戦車を持つ
 ていなかつたなどという他の歴
 史的事實にも合わぬ或は三千の
 誤りか。一) 原語 *cisterna* 空井
 戸、或は水を溜めるための大き
 な坑。一) 本一〇・八。
 8) 司祭の職務を横取りして。

一三 答えけるは、「我、民が我より離れ去り、汝定めの日に來らず、ファイリス

ト人がマクマスに集まれるを見たれば、⁹⁾ 一三 // 今やファイリスト人ガルガ

ラに下りて我を襲わんとするに、我なお主の御顔を和がしめず。// と云

一三 い、必要に迫られて燔祭を捧げたり。」と。一三サムエル乃ちサウルに云

いけるは、「汝、愚なる事を爲して、主汝の天主の汝に命じ給える誠命

を守らざりき。汝もしかく爲さざりせば、主今より汝の王位を堅固うし

一四 て、永久にイスラエルを治めしめ給いしならんに。一四されど汝の王位は

今後永續させざるべし。主その御意に適う人を求めて、主之にその民の

長たる事を命じ給えり。そは汝主の命じ給いし所を守らざりしが故な

一五 り。」と。¹⁰⁾ 一五 それよりサムエル、起ちてガルガラよりベンヤミンのガバ

一に上りしが、¹¹⁾ 残れる民もサウルに従いて上り行き、己等と戦う民の

ガルガラよりガバ一に來れると、ベンヤミンの丘にて出會わんとせり。

一六 時にサウル、己と共にある民を數えたるに、約六百人ありき。一六かくて

9) ヨナタスの部下が四散し、丘が占領された後

10) ここでも犠牲より従順が優れ

りとされている

その上サウルは

王位がその一族

の専有とされぬ

という罰を蒙つ

た(母下七・一六参照)。

一徒一三・二二。

11) サムエルは戦

闘に参加するつ

もり。

一七 サウルとその子ヨナタス、及び彼等と共にある民はベンヤミンのガバールに在り、ファイリスト人はマクマスに陣せり。一七茲にファイリスト人の陣より掠奪に出で行きし三隊あり。一隊はエフラの道に向いてスアルの地に行き、一八他の一隊はベトホロンの道を取り、また第三隊は荒野の方セボイムの谷に臨める境界の道に赴きたり。一九當時イスラエル全國に鍛冶工なかりき、蓋はファイリスト人警戒して、ヘブレオ人に劍或は槍を作らしめざらんとしたるに由るなり。二〇さればイスラエル人は、その鋤の刃、鶴嘴、斧、鋏を銳利にせんとする時には、皆ファイリスト人の許に下り行きしが、二三是故に彼等の鋤の刃、鶴嘴、熊手、斧の刃は鈍り、突棒に至るまで、鍛え直すを要したり。二三されば戰鬥の日來りし時も、サウル及びヨナタスと共にあるすべての民の手には、劍も槍も見えざりき。ただサウルとその子ヨナタスとを除くのみ。二三さてファイリスト人の守備隊は、出でてマクマスに進まんとせり。

12) これはファイリスト人のいつものやり方であつた。彼らはイスラエルに侵入すると、至る所で武器を奪い取るのみならず鍛冶工をも曳いて行つたのである。

第十四章

ヨナタス、ファイリスト人を攻む—奇蹟的勝利—サウル輕卒なる誓を立てしにより、ヨナタス危うく一命を失わんとして、民に救わる。

一 或る日のことなりき、サウルの子ヨナタス、その武器持の若者に云いけるは、「いざ、我等かの對岸に在るファイリスト人の守備隊の所に渡り行かん。」と。されど彼は之をその父には告げざりき。

二 時にサウルはガバーの極部、マグロンに在る石榴の樹の下に住まり居りしが、彼と共にある民は凡そ六百人なりき。三 しかして、シ

四 口に於いて主の司祭たりしヘリの子FINEES、その子イカボド、その兄弟アキトブの子なるアキアス、肩衣を着けたり。民はヨナ

タスのいずこに行きしかを知らざりき。四 さてヨナタスが渡りてファイリスト人の守備隊の許に至らんとしたる坂の間には、兩側に聳え立つ岩ありて、此方にも彼方にも齒の如く峻しき崖をなせり。その

第十四章 1) この大

膽極まる雄々しい行

動は、主の御力に對

する無限の信賴から

出たもの。實際主は

その天主を堅く信賴

して敢行した勇まし

い企圖に、奇しき勝

利の榮冠を與え給う

た。—2) 大司祭の職

權を示すもの。

3) 本四・二一。

五 一つの名をボゼスと云い、他の一つの名をセネと云う。五一つの岩は北の
 六 方にマクマスに面して聳え、他は南の方にガバーに對して聳えたり。六ヨ
 ナタス、その武器持の若者に云いけるは、「いざ、我等割禮を受けざるか
 の守備隊の所に渡らん、さらば主或は我等の爲に計らい給うこともやあら
 七 ざればなり。」と。七その武器持之に云いけるは、「すべて汝の心に適う如
 八 く爲し給え。汝の欲む處に行き給え、我、何處にても汝の欲し給う處に、
 九 汝と共に在らん。」と。八ヨナタス答えけるは、「視よ、我等かの人々の許
 九 に渡り行かん。かくて我等彼等に現れん時、九彼等もし〃我等が汝等の許
 一〇 に往くまで留まれ。〃とかく我等に語らば、我等その處に佇みて、彼等の
 一〇 許に上らじ。一〇されどもし〃我等の許に上り來れ。〃と云わば、我等上り
 行かん、そは主彼等を我等の手に付し給いたればなり。我等之を以て徴と
 二 なすべし。」と。二かくて彼等兩人、ファイリスト人の守備隊に身を現した

4) ヨナタスは古代の習慣に従い(創二四・四二。士六・三六)、多分イスラエル民族の絶望的局面に天主の御祐助を信じ、てであるう、自ら徴を定め、それによつて、自分の無謀な襲撃の成敗を知らうとした。

二二

れば、ファイリスト人云いけるは、「視よ、ヘブレオ人等、その隠れおりし穴より出で來れり。」と。 二三 次いで守備隊の人々、ヨナタス及びその武器持に語り

二三

て云いけるは、「我等の許に上り來れ、さらば汝等に物を示さん。」と。ヨナ

二四

タス乃ちその武器持に云いけるは、「我等上り行かん。我に従え。實に主彼等

二五

をイスラエルの手に付し給えり。」と。ヨナタスは手足もて攀じ

二六

つつ上り行きぬ、その武器持之に従えり。やがて數人ヨナタスの前に墮れたり。

二七

その武器持も彼に従いて他の數人を殺せり。 二八 ヨナタス及びその武器持の最初

二八

に討ち取りしは約二十人にして、こは普通一軛の牡牛が一日に耕す、畑半ばの

二九

内に於いての事なりき。 三〇 折しも畑にある陣の中に奇蹟起りて、掠奪に出で行

三〇

けるその守備隊の人々も皆愕けり。 卽ち地震撼きしが、この起りしは天主より

三一

の奇蹟の如くなりき。 三二 ベンヤミンのガバに在るサウルの哨兵等、顧みたる

三二

に、視よ、群衆討たれて、此方彼方に逃げまどいたり。 三三 その時サウル已と共

三三

にある民に云いけるは、「我等の許より誰が行きしか査べ見よ。」と。人々乃ち

の彼らは相手
が自分の許
に上り
來ること
となど
できぬ
と思つ
ていた
から、
これは
嘲弄の
語であ
る。
の略前
四・三
○。

一八 査べたるにヨナタスとその武器持とその場に居らざること知られ
 たり。一八 サウル、アキアスに云いけるは、「主の櫃を持ち來れ。」
 と。(蓋し天主の櫃はその日イスラエルの民と共に其處にありし
 なり。) 一九 かくサウル司祭に語れる折しも、フィリスト人の陣中
 に大いなる喧囂起り、ますます加わりしかば、いよいよ明らかに
 聞えたり。時にサウル司祭に云いけるは、「汝の手を引け。」と。
 二〇 かくてサウル及び彼と共にあるすべての民、叫びて戦の場に至
 りしに、視よ、各々劍を己が味方に向けしかば、人死甚だ多かり
 き。(8) 二一 剩え、昨日も一昨日もフィリスト人と共にあり、(9) 之と共に
 陣に上り來れるヘブレオ人等、歸りてサウル及びヨナタスに従
 えるイスラエル人と共になりぬ。二三 またエフライムの山地に隠れ
 おりしイスラエル人も、皆フィリスト人の敗走したるを聞き、戦
 わんとして己が國人に合しければ、サウルと共にある者凡そ一萬

の戦争の結果を天主に
 何うため。(1)のフィリ
 スト人らは、驚愕恐怖
 のあまり逃走を始めた
 それは彼らの哨兵がか
 の兩人のうしろにどれ
 ほどのイスラエル人が
 いるのか見ることがで
 きなかつたからである
 ただ二人だけでフィリ
 スト人襲撃を敢行しよ
 うとは、彼らの夢にも
 知らぬ所であつた。(1
 士七・二二。代下二〇
 ・二三。(1)の奴隸とし
 て留められていたイス
 ラエル人たち。

二三 人となれり。二三 主かくその日イスラエルを救い給いぬ。しかして戦闘はベタ

二四 ヲエンにまで及びたり。二四 さてイスラエルの人々その日相合せるに、サウル

民を誓わしめて云いけるは、「夕べまで、即ち我が敵に仇を復すまで、

二五 パンを食する人は呪われよかし。」と。されば民皆パンを食せざりき。二五 然

るに平民皆森に至りしに、畑の面に蜜あり。二六 即ち民森に入るや、蜜の流る

るを見たり。されど何人もその口に手を運ぶ者なかりき。蓋し民誓いを恐れ

二七 しなり。二七 然るにヨナタスは、その父が民を誓わしめし折、聞かざりしかば

己が手に持てる杖の先を差し伸べて、生蜜に浸し、その手をその口に運びけ

二八 るに、その目光を帯びぬ。10) 二八 折しも民の一人答えて云いけるは、「汝の父民

を誓わしめて「今日パンを食する人は呪われよかし。」と云えり。(よりて民

二九 疲れたり。11) 二九 ヲナタス乃ち云いけるは、「わが父國を困惑せしめぬ。11)

三〇 汝等我が些かこの蜜を味わいしに由り、わが目光を帯びたるを見たり。三〇 ま

して民得たるその敵の鹵獲品を食しなば、なお如何ばかりなるべき。フィリ

10) 元氣が付くと、

眼も活々

となる。

11) ヲナタ

スはその

父の誓い

の無分別

を歎く。

しかしそ

の王を公

然非難し

たのはよ

るしくな

かつた。

三一 スト人の中に更に大いなる人死ありしに非ずや。」と。三二 かくの如く彼等ファイリスト人を討ちて、マクマスよりアヤロンに至れり。されど民太く疲れしかば、三分捕物に跳びかかり、羊と牛と犢とを取りて、地上に屠り、之を血と共に食せり。12) 三三 さて人々サウルに、民血と共に食し、主に對して罪を犯せりと告げしに、彼云いけるは、「汝等曲事をなしたり。今わが許に大石を轉し來れ。」と。13) 三四 サウルまた云いけるは、「汝等分れ散りて民の中に入り、之に云え、」各人わが許にその牛と羊とを引き來り、これが上にて屠り食せよ。さらば汝等血と共に食して主に對し罪を犯すことなからん。」と。三五 茲に於いてすべての民、各々夜までその手に牛を引き來り、彼處に於いて屠れり。三六 さてサウルは主の爲に祭壇を築きしが、彼はこの時始めて主の爲に祭壇を築きしなり。三六 かくてサウル云いけるは、「我等夜にファイリスト人を襲い、夜の明くるまで之を荒し、その一人だに殘さじ。」と。民乃ち云いけるは、「すべて汝の

12) 血を食することとは律法で禁じてあつた(利三・一七・七・二六。一七・一〇一—一四)。高くなつてゐる石の上で獸を屠ると血を流し去るに便利であるし、同時にまた人民が命令に従つたか否かをあとで查べるにも都合がよかつた。
13) 利三・一七。

三七 眼に善しと見ゆる所を爲し給え。」と。折しも司祭云いけるは、「我等これより天主に近づかん。」と。14) 三七よりてサウルは主に問いぬ、「我フイリス

ト人の後を追うべきか。汝彼等をイスラエルの手に付し給うや。」と。されどその日は主之に答え給わざりき。15) 三八時にサウル云いけるは、「民の長

三九 等皆此處に來り、今日誰によりてこの罪行われしかを調べ見よ。16) 三九 主イ

スラエルの救主は活き給う、たとい之を爲せるがわが子ヨナタスなりとも

その者は必ず死すべし。」と。之に就きては、民一同、誰も反對する者な

四〇 かりき。四〇 彼またすべてのイスラエルに云いけるは、「汝等は一方に離れ

居れ、我はわが子ヨナタスと共に、他方に居らん。」と。民乃ちサウルに

四一 答えけるは、「汝の眼に善しと見ゆる所を爲し給え。」と。四一 次いでサウル

主イスラエルの天主に云いけるは、「主イスラエルの天主よ、汝何とて今

日汝の下僕に答え給わざりしぞ、徴を與え給え。この非我もしくはわが子

ヨナタスに在らば、啓示給え。またこの非汝の民に在らば、潔め給え。」

14) とういう場合
合にいつもす
る通り、ウリ
ムとトウミム
を用いて天主
に伺いを立て
た。—16) 不同
意の印に。
16) 天主が回答
えにならなか
つたわけは、
たゞ我々の方
に罪があるか
らである。そ
れ故先ずそれ
を償わねばな
らぬ。

と。然るにヨナタスとサウルと非とされて、民は免れたり。

四二

四二 サウル乃ち云いけるは、「我とわが子ヨナタスとの間にて籤を抽け。」と。かくて當れるはヨナタスなりき。四三 時にサウル

四三

ヨナタスに云いけるは、「汝の爲したることを我に告げよ。」と。

ヨナタス乃ち之に告げて云いけるは、「我はわが手に在りし杖の

先もて些か蜜を味わいしのみなるに、視よ、我死せざるべから

四四

ず。17) 四四 サウル云いけるは、「願わくは天主我にかく爲し、更に累ねてかく爲し給え。そはヨナタスよ、汝死せざるべからざ

四五

ればなり。」と。18) 四五 されど民サウルに云いけるは、「さらばヨナタス、イスラエルにこの大いなる救拯を爲せるに、死せざる

べからざるか。是は不當なり。主は活き給う、ヨナタスの頭髮

一筋だも地に落つべからず。そは彼、今日天主と共に働きたれ

ばなり。」と。かくの如く民ヨナタスを救いて死せざらしめた

17) ヨナタスは禁食のことを知らなかつたので、罪を赦されたが、天主はこの機會に、君主や兩親に服従するのが重大な義務であることを皆に教えるため、ヨナタスに籤を當てるをよしとされた。

18) サウルがわが子を犠牲とする覺悟であつたのでそれが彼を赦しを受くるに足る者とした。かくて彼は民の執成によつて、曾てのアブラハムがイサクをそうした如く、わが子が無事に引取ることができたのである。

四六 り。四六 それよりサウルは退きて、フィリスト人の後を追わざりき。されば
 四七 フィリスト人は己が處に行きぬ。四七 さてサウルはイスラエルに王權を確立
 してその周圍なる諸々の敵、即ちモアブやアンモンの裔等や、エドムやソ
 四八 バ¹⁹⁾の王等やフィリスト人と戦いけるが、何處に向いても勝を制したりき。
 四八 更に彼は軍を集めてアマレクを討ち、イスラエルをその掠奪者の手より
 四九 救いぬ。四九 さてサウルの子等は、ヨナタス、イエツスイ、及びメルキアな
 りき。またその二人の娘の名は、姉をメロブと稱び、妹をミコルと稱びた
 五〇 り。五〇 なおサウルの妻は、名をアキノアムと云い、アキマースの娘なり。
 五一 更にその軍將は名をアブネルと云い、サウルの叔父ネルの子なり。五一 即ち
 五二 キスはサウルの父にして、アブネルの父ネルはアビエルの子なり。五二 サウ
 ルの代には常にフィリスト人と激しき戦争ありき。さればサウルは剛くし
 て戦鬪に適する人を見れば、之を己が爲に召し抱えたり。²⁰⁾

19) 母下八・三 参照。ソバは 當時ダマスコ をも含めたシ リア全國のこ とであつた。
 20) 常に戦備を 整えておく必 要と、不俱戴 天の仇敵を極 力抑えつけて おく必要から これが常備軍 の始めであつ た。

第十五章

サウル、アマレク討滅に遣されしが、その王及び家畜の優良なる物を殺さざりしかば、その不従順の故に主に棄てらる。

一 或る時サムエル、サウルに云いけるは、「主汝に注油せしめ、汝をその民イスラエルの王たらしめんとて我を遣し給えり。されば今主の御聲を聽け。二 萬軍の主はかく云い給う、
 「我はアマレクがイスラエルに爲せる一切の事、即ち彼等がエジプトより上りし時、その途に於いて之に反抗いたる次第を回顧たり。三 されば今往きてアマレクを討ち、その所有る物を悉く滅ぼせ。之を容赦するなかれ、またその所有物を何も貪るなかれ、男より、女、子供、乳呑兒、牛、羊、駱駝、驢馬の果に至るまで殺せ。」と。四 茲に於いてサウル民に命じ、之を羔の如く數えしに、五 歩兵二十萬、ユダの人一萬

第十五章 1) 出一七・一八。

2) アマレクはイスラエル人が敵意を以て攻めた最初の異教民族。アマレクに對する呪咀の命令については、出一七・八以下、及び申二五・一七以下参照。また呪咀については、書六・一七参照。3) ヘブレオ語聖書では「テライムにて數えしに」テライムは「羔」の義で、ウルガタ譯の解釋がつく。

五 ありき。五 次いでサウルはアマレクの市に至るや、溪に伏
 六 兵を置きたり。六 しかしてサウル、キン人に云いけるは、
 「行きて、アマレク人の許を離れ、下れかし。然らずば我
 汝を彼と共に連累にすることあらん。寔に汝はイスラエル
 の裔等一同に對し、そのエジプトより上り來れる時厚意を
 盡せり。」と。よりてキン人、アマレクの中より離れたり。
 七 サウル乃ちアマレクを討ち、ヘヴィラよりエジプトの地
 八 に面せるスールに至れり。八 しかしてアマレクの王アガ
 九 グ⁶⁾を生捕にし、その平民を悉く、⁷⁾ 劍の刃にかけて殺し
 ぬ。九 されどサウルとその民とは、アガグを容赦し、また
 羊及び牛の群の中の最も良きものや、衣服、牡羊、ならび
 に凡て美しき物を惜しみて之を滅ぼすを欲せず、ただ惡し
 一〇 くして價值なき物は之を滅ぼせり。一〇 時に主の御言サムエ

4) キン人はモイゼの舅イエトロ
 (出三・一) から出ている。イ
 エトロの子ホバブは、荒野で、
 イスラエル人のために重要な案
 内者の役を勤めた(民一〇・二
 九。二四・二一以下)。その子
 孫はユデア人に混つてパレスチ
 ナの南部に定住した(士一・一
 六)。彼等はそこに一部はアマ
 レク人に圍まれて、住んでいた
 のである。—5) アマレク人の歴
 史は、天主が御民に加えられた
 非道を悉く罰し給うたことを立
 證する。—6) アガグはアマレク
 の王等の共通の名稱、恰もファ
 ラオがエジプトの王等のそれだ
 あるのと同様。—7) 彼が捕えた
 者共。

二 ルに下りて曰わく、^二我、サウルを王となしたるを悔む、⁸⁾それは彼我を棄てて、わが言を果さざればなり。⁹⁾」と。

一三 サムエル乃ち悲しみて、終夜主に叫べり。¹⁰⁾ 一三かくてサムエル未明に起き、朝に及びてサウルの許に行かんとしたる時、人ありてサムエルに、サウルがカルメル¹¹⁾に至り、己が爲に凱旋門を建て、轉り進みてガルガラに下りし由を告げしかば、サムエル、サウルの許に至りしに、サウル、アマレクより奪い來れる分捕物の初を以て、主に燔祭を捧げおれり。一三さてサムエル、サウルの許に至るや、サウル之に云いけるは、「汝主に視せられよかし、我は主の御言を果したり。¹²⁾」と。一四サムエル云いけるは、「然らばわが耳に響くこの羊の聲、及びわが聞く牛の聲は何事ぞや。」と。

一五 サウル云いけるは、「之はアマレクより引き來れり、蓋

8) サウルは不従順で天主との伸を阻害したので、天主の御好意は彼を去つた。それをここに天主の悔みと云つてあるのである。9) サウルは條件を果すのを怠つた。その等閑に附したことに對して、彼の身に罰を下すといふのである。10) サウルを愛する念から。11) 山でなく、ユダ領の南部にあるカルメル市(書一五・五五)。12) サウルは預言者を欺くことができると思つて、嘘を云つた。先ず自分の良心に、もう疾しいことがないように、喜ばしげな態度を装い、預言者に譴責されると、すべての責を人民に轉嫁した。

一六 し民、主汝の天主に屠り捧げんとて、羊及び牛の最も良き物を生かしおきたるなり。されどその殘餘は我等屠れり。」と。一六 然るにサムエル、サウルに云いけるは、「我に許し給え、我、主が昨夜、我に曰いし事を汝に告げん。」と。彼乃ち之に「語れ。」と云えり。一七 よりてサムエル云いけるは、「汝は己が眼に小さき者たりし時、イスラエル諸族の頭族とせられしに非ずや。即ち主汝に注油して、イスラエルに王たらしめ給えり。一八 しかして主汝を途に遣して曰いけるは、「往きて罪人なるアマレクを殺せ。汝、彼等を塵殺しにするまで之と戦うべし。」と。一九 然るを汝何故に主の御聲に聽き従わずして、分捕物に向かい、主の御眼前に惡を爲したるや。」と。二〇 サウル、サムエルに云いけるは、「否、我は主の御聲に聽き従いて、主の我を遣し給える途を行き、アマレクの王アガグを引き來りて、アマレクを殺したり。二一 ただ民、¹³⁾ 殺されし物の初として、ガルガラに於いて主己等の天主に捧げん爲に、分捕物の中より羊と牛とを取りぬ。」と。二三 サムエル云いけるは、「主は燔祭と犠牲とを望み給うや、寧ろ主の

13) またもや責を人民に負わす。

二三 御聲みこえに従したがうを望のぞみ給たまうに非あらずや。蓋けだし従したがうことは犠いけにえ牲にえにまさり、聽きくこ
 とは牡おひつじ羊しの脂ぼう肪を捧さぐるにまさるなり。¹⁴⁾ 二三 故ゆえ如何いかんとなれば、逆さからうは魔ま
 術じゆつの罪つみの如ごとく、従したがうを拒こほむは偶ぐう像ぞう禮らい拜はいの罪つみの如ごとくなればなり。されば汝おんみ
 主しゆの御言みことばを棄すてしほどに、主しゆも汝おんみを棄すてて王おうたらしめ給たまえり。¹⁵⁾ と。
 二四 サウル、サムエルに云いけるは、「我われは民たみを恐おそれてその聲こえに従したがい、天てん
 二五 主しゆの勅みことりと汝なんじの言ことばとに背そむきしによりて、罪つみを犯おかせり。^{二五}されど乞こう、今いま
 二六 わが罪つみを擔にないて我われと共に歸かえり、我われをして主しゆを拜はいせしめよ。」と。^{二六}サム
 エル、サウルに云いけるは、「我われ汝おんみと共に歸かえらじ、そは汝おんみ主しゆの勅みことりを
 棄すてしを以もつて、主しゆ汝おんみを棄すててイスラエルの王おうたらしめ給たまえばなり。」
 二七 と。^{二七}かくてサムエル去さらんとしして身みを轉めぐらしたるに、サウルその袍うわぎ
 二八 の裾すそを攔つかみしかば、則すなわち裂さけたり。¹⁶⁾ 二八 時ときにサムエル之これに云いけるは、
 「主しゆ今日けふイスラエルの王くに國くにを汝おんみより裂さき放はなし、之これを汝おんみに勝まさる汝おんみの近ちかき者もの
 二九 に付わたし給たまえり。¹⁷⁾ 二九 またイスラエルの勝しょう利り者しやは、容ゆる赦るすことも痛つう悔かいに驅か

14) 傳四・一七。
 何六・六。續九
 ・一三。一二・
 七。—15) 王とし
 ての彼を棄てる
 というのは、永
 遠に之を棄てる
 というサウルへ
 の劫罰の宣告で
 はない。—16) 多
 分縫いつけてあ
 った總へふさ
 である。この
 出來事には象徴
 的意義がある。
 (民一五・三八
 参照)。—17) 本二
 八・一七。

三〇 さらることあらじ、蓋し彼は人に非ざれば、悔ゆることなきなり。」と。三〇 サウル之に云いけるは、「我は罪を犯せ

三 り。されど今わが民の長老等の前、及びイスラエルの前にわが面目を立てて、我と共に歸り、我をして主汝の天主を

三二 拜せしめよ。」と。三二 茲に於いてサムエル、サウルに従いて歸りしかば、¹⁸⁾ サウル主を禮拜せり。三三 サムエル乃ち云

三三 いけるは、「わが許にアマレクの王アガグを引き來れ。」と。よりて太く肥滿せるアガグ、戦きつつその許に引き出され

三三 しが、アガグ云いけるは、「苦き死はかくて離すや。」と。¹⁹⁾ 三三 サムエル乃ち云いけるは、「汝の劍、女等を子なき者と

三三 なせる如く、汝の母も女等の中にて子なき者となるべし。」と。しかしてサムエル、ガルガラに於いて主の御前に之を

三四 寸斷せり。²⁰⁾ 三四 さてサムエルはラマタに行きぬ。されどサ

¹⁸⁾ サムエルは最初王に隨行すること拒んだ(二六—二七節)。今それを承諾したのは、サウルの更迭されぬ限りその手中に留まる王位に對する人々の尊敬を減じないためであつた。—¹⁹⁾へブレオ語聖書「アガグ喜ばしげに來りて云いけるは『實に死の苦しきは遠退けり』と。」彼はサウルが自分に好意を持つてゐることを知つていたので、預言者の前に出された時、この人も既にサウルに宥められてゐるものと思つてゐた。—²⁰⁾ 天主の人たるサムエルが自ら手を下してこの流血の處刑を行つたといふことは、呪咀の規定に徴して異とするに足りない。しかし必ず

ウルはガバ―なる己が家に上れり。三五六かくてサムエルはその死する日まで、重ねてサウルを見ることなかりき。21) されどサムエルはサウルの爲に哭きたり。そは主彼をイスラエルに王たらしめしことを悔み給いたればなり。

第十六章

サムエル、ベトレヘムに遣されてダヴィドに注油す—
ダヴィド、サウルの家に召さる。

一 終に主サムエルに曰いけるは、「汝いつまでサウルの爲に哭くや、我彼を棄てて、イスラエルを治めざらしめたるものを。」
汝の角に油を充滿して來れ、是、わが汝をベトレヘムの人イサイの許に遣さん爲なり。寔に我はわが爲にその子等の中より王を選びたるなり。」と。ニサムエル云いけるは、「我争でか行くを得べき。蓋し、サウル聞かば、

しもサムエルが自分の手でこれを行つたと考えるには及ばぬ。
21) サムエルは最早彼を往訪しなかつたのである。

第十六章 1) この哀哭はサウルを愛惜する至情から出ているので、天主の御不興を招かなかつたらしい。

三 我を殺さん。」と。主曰いけるは、「汝畜群の中より犢一頭を汝の手に携え行き、しかして『我主に犠牲を捧げんとて來れり。』と云え。

四 次いでイサイを犠祭に召ぶべし、さらば我汝に爲すべき事を示さん。

五 汝乃ちわが汝に示す人に油を注ぐべし。」と。茲に於いてサムエル、己に主の曰える如く爲して、ベトレヘムに至りしに、市の長老等驚きて彼を迎え、云いけるは、「汝の來れるは平和の爲なりや。」

六 彼云いけるは、「平和の爲なり。我は主に犠牲を捧げんとて來れり。汝等身を聖めて、我と共に來れ、さらば我犠牲を屠り獻げん。」と。かくて彼イサイとその子等とを聖めて、之を犠祭に召べり。

七 六しかして彼等の入りたる時、彼エリアブを見て云いけるは、「この主の御前に在るこそ、その注油し給う者なるか。」と。折しも主サムエルに曰いけるは、「その容貌をも丈の高さをも見るなかれ、其は我彼を棄てたればなり。」

八 我は人の外觀によりて判断せず。

2) ベトレヘムの人々はサムエルが來た時、天主の人たる彼が、何か天罰を彼等に告げぬかと怖れた。

3) この潔めは内面の聖さを象徴する外面的儀式（沐浴や衣服の洗濯など）であつた。――4) サムエルがその旅の目的として犠牲を獻げんとすることを云つたのは、嘘ではなかつた。事實彼はそれに對する御命令を受けていたのである。――5) 王に選ばなかつた。

八 蓋し人は外に現れたる所を見れども、主は心を見るなり。」と。8) 八時に
 イサイ、アビナダブを呼びて、之をサムエルの前に導きしが、彼云いけ
 九 るは、「之も亦主選び給わす。」と。9) 次いでイサイ、サンマを導き來りし
 一〇 が、彼之に就きて云いけるは、「之も亦主選び給わす。」と。一〇イサイか
 くその七人の子をサムエルの前に連れ來りしが、サムエルはイサイに云
 二 いぬ、「主是等より選び給わす。」と。一一サムエルまたイサイに云いける
 は、「汝その子等を既に悉く連れ來れりや。」と。彼答えけるは、「なお
 ひつじも羊を守る末の子殘れり。」と。サムエル乃ちイサイに云いけるは、「人を
 遣して彼を連れ來らしめよ、彼の此處に來るまで、我等必ず食卓に就か
 三 じ。」と。一二茲に於いて人を遣し、彼を連れ來らしめしが、彼は色紅
 に、の容姿美しく、顔麗しかりき。主曰いけるは、「起ちて彼に油を注げ
 一三 實に是ぞその人なる。」と。一三サムエル乃ち油の角を執り、その兄弟の
 中にて之に注油せり。8) かくてその日より後主の靈ダヴィドに臨みたり。

8) 詩七・一〇。
 7) この語を、活々とした紅顔の色に解している解釋者もあれば、また小アジアで美とされていた赤味がかつた頭髮の色(金黃色)に解している者もある。一) 彼等はその注油の目的を知らなかつた。或は預言者がダヴィドを自分の弟子にするつもりと思つたかも知れない

一四 サムエルは起ちてラマタに往きぬ。9) 一四 さて主の靈サウルを離れ、

一五 主より來れる惡靈彼を惱ましたり。10) 一五 時にサウルの僕等彼に云い

一六 けるは、「視よ、主より來れる惡靈汝を惱ます。一六 我等の主君命じ

給わば、汝の前に在る下僕等、琴を弾くに巧みなる人を求めん。こ

一七 れ主より來れる惡靈汝を惱ます時、彼その手もて琴を弾き、それに

よりて汝安きを得んためなり。」と。一七 サウルその僕等に云いける

は、「さらばわが爲に能く弾く者を探ね出して、之をわが許に連れ

一八 來れ。」と。一八 僕等の一人答えて云いけるは、「視給え、我ベトレヘ

ムの人イサイの子を見しが、彼は弾くこと巧みに、力強く、能く闘

一十九 う人にして、言慧しき美しき人なりき。しかも主之と共に在す。」

と。一九 茲に於いてサウル、イサイの許に使者を遣し、云わしめける

二〇 は、「牧場に在る汝の子ダヴィドをわが許に遣せ。」と。二〇 イサイ乃

ちパンを負わせたる驢馬一頭と、葡萄酒一壺と、山羊の仔一頭とを

9) 母下七・八。詩七

七・七〇。八八・二

一。徒七・四六。一

三・二二。一〇) この

惡靈は、天主の御攝

理御許可により彼を

襲つた點で、天主よ

りのものであつた。

サウルは自分が王と

しては天主から棄て

られたことを知つて

主が既に他の人を選

定しておいでになる

だるうと推測してい

た。或は注油式が行

われたという漠然た

る風聞を耳にしてい

たかも知れない。

三二 取り、その子ダヴィドの手によりてサウルに贈りぬ。11) 三三 かく
 てダヴィド、サウルの許に至りてその前に立てり。彼は太く之
 を愛して、その武器持となしぬ。12) 三三 サウルまたイサイの許に
 人を遣して云わしめけるは、「ダヴィドをしてわが眼前に立た
 しめよ、彼寔にわが眼に寵愛を得たればなり。」と。 三三 かくの
 如くにして、主より來れる惡靈サウルに臨む度毎に、ダヴィド
 琴を執り、その手もて弾きたるに、サウル爽涼を覺えて、安き
 を得たり。蓋し惡靈彼を離れ去りしなり。

第十七章

ファイリスト人との戦争—ゴリアト、イスラエルを嘲りて、ダヴィドに殺さる。

一 一 さてファイリスト人、戦わんとてその軍を集め、ユダ領ソコに
 集いて、ドンミムの境界なるソコ¹⁾とアゼカ²⁾との間に陣した
 り。 二 二 さればサウルとイスラエルの裔等とは、相集まりてテレ

11) こうしてダヴィドは、
 就任の曉、天主に嘉せら
 れるには、何をすべきか、
 すべからざるかを知るた
 め、王の宮廷に來た。サ
 ウルの容態が快くなると、
 ダヴィドはまた己が畜群
 の許に歸つた。 — 12) 小姓
 のようなもの。

第十七章 1) ソコはイエ
 ルサレムから西南へ行程
 三時間半の所にある。
 2) 書一五・三五参照。

三 ビンの谷に至り、戦列を布きてファイリスト人と戦わんとせり。三即ちファイリス
 四 ト人は此方なる山の上に立ち、イスラエルは彼方なる山の上に立ちたり、しか
 五 して谷その間に在り。四折しもファイリスト人の陣よりゲトのゴリアトと名のる
 六 賤しき生れの人³⁾出でたり、その身の丈六肘と一あたりあり。四五その頭には青
 七 銅の兜を戴き、身には鱗板の鎧を着けたり。その鎧の重さは青銅五千シクル⁵⁾
 八 なり。六また脚には青銅の脛當をつけ、その肩は青銅の楯もて蔽えり。七その
 九 槍の柄は機の巻取棒の如く、その槍の穂は鐵六百シクルなり。六) しかしてその
 一〇 武器持彼に先立ちて行きぬ。八かくて彼立留るやイスラエルの戦列に向かい叫
 一 わりて云いけるは、「汝等何故に軍の備して來りたるぞ。我はファイリスト人に
 二 して、汝等はサウルの僕に非ずや。汝等の中より一人を選び、その者をして一
 三 騎打に下り來らしめよ。九彼もし我と闘いて我を討取るを得ば、我等汝等の下
 四 僕とならん。されど我もし勝ちて彼を討取らば、汝等下僕となりて我等に仕う
 五 べし。」と。一〇このファイリスト人また云いけるは、「我今日イスラエルの軍勢を

3) ヘブ
 レオ語
 聖書
 「代表
 者」。
 4) 約二
 ・九メ
 一トル
 5) 約七
 十五キ
 ログラ
 ム。
 6) 約九
 キログ
 ラム。

嘲りたり、わが爲に一人を出して、我と一騎打にて戦わしめよ。」と。

二 サウル及びすべてのイスラエル人、このフィリスト人のかくの如く語るを聞き驚き、且大いに恐れたり。三 抑々ダヴィドは上述の如く、ユダ領

ベトレヘムのエフラタ人にてその名をイサイと云える者の子なるが、イサイは八人の子ありて、サウルの代には既に老人たり、人々の中にて高齡な

る者なりき。四 彼の年長の子等三人、サウルに従いて戦闘に加われり。その戦闘に出でたる三人の子の名は、總領をエリアブと云い、次をアピナ

ダブと云い、第三をサンマと云いしが、一四 ダヴィドは末の子なりき。かく年長の三人はサウルに従いたれども、一五 ダヴィドは去りて、ベトレヘムに

てその父の羊を牧わんとて、サウルの許より歸り居たり。一六 さてかのフィリスト人は、朝な夕な出で來りて、四十日の間現れぬ。一七 時にイサイ、

その子ダヴィドに云いけるは、「汝の兄等の爲に炒麥一エファとこの十塊のパンとを取りて、陣營なる汝の兄等の許に馳せ行け。」一八 またこの十の

一) ダヴィドが巨人ゴリアトに對して武勇を揮う前にも一八(一六)章參照)、彼の血統や家族の關係を記述するのである。一六・一。二) 彼等の糧食を新たに供給するため。その頃は各人已の出費で闘つていたのである。

一九 小(こ)さき乾(けん)酪(たつ)をその軍(ぐん)將(しよう)の許(もと)に携(たず)え行(ゆ)き、汝(なんじ)の兄(あに)等(たち)の安(あん)否(び)を尋(たず)ね、その誰(たれ)と共(とも)に配(はい)置(ち)されたるかを知(し)り來(きた)れ。」と。

二〇 然(しか)るにサウルと彼(かれ)等(ら)ならびにイスラエルの裔(こ)等(ら)は皆(みな)、テレビンの谷(たに)にてフイリスト人と戦(た)いおれり。

二一 ダヴィド乃(すなわ)ち朝(あした)に起(お)きて、畜(む)群(れ)を牧(ぼく)者(しゃ)に托(たく)しイサイの命(めい)じたる如(ごと)く荷(に)を負(お)いて行(ゆ)き、マガラと云(い)う處(ところ)に來(きた)り、軍(ぐん)の許(もと)に到(いた)りしに、恰(あた)かも軍(ぐん)は出(い)でて戦(た)い、鬨(とき)の聲(こゑ)をあげ居(い)たり。

二二 卽(すなわ)ちイスラエル、戦(せん)列(れい)を布(し)き、フイリスト人(びと)また之(これ)に對(むか)いて備(そな)えをなせり。

二三 さればダヴィドは携(たず)え來(きた)りし容(うつ)器(わ)を、荷(に)を守(まも)る者(もの)の手(て)に渡(わた)し、戦(せん)場(じやう)に馳(は)せ行(ゆ)きて、その兄(あに)等(たち)のすべて恙(つよ)なきやを問(と)いぬ。

二四 彼(かれ)かく彼(かれ)等(ら)と語(かた)り合(あ)へる折(おり)しも、ゲトのフイリスト人(びと)にてゴリアトと名(な)乗(の)るかの賤(いや)しき生(う)まれの人(ひと)、フイリスト人(びと)の陣(じん)營(えい)より現(あら)わ、上(のぼ)り來(きた)りて例(れい)の言(こと)ばを述(の)べしかば、

二五 汝(なんじ)等(ら)この上(のぼ)り來(きた)れる人(ひと)を見(み)しか。寔(まこと)に彼(かれ)はイスラエル人(びと)は皆(みな)かの人(ひと)を見(み)るや、太(いた)く之(これ)を恐(おそ)れて、その面(めん)前(ぜん)より逃(に)げ失(う)せたり。

二六 時(とき)にイスラエルの或(あ)る人(ひと)云(い)けるは、「汝(なんじ)等(ら)この上(のぼ)り來(きた)れる人(ひと)を見(み)しか。寔(まこと)に彼(かれ)はイスラエルを嘲(あざ)けんとて上(のぼ)り來(きた)れるなり。

二七 さて彼(かれ)を討(うち)取る人(ひと)は、王(おう)莫(ぼく)大(だい)なる財(た)寶(ほう)を以(もつ)て之(これ)を富(と)まし、その娘(むすめ)を之(これ)に與(あた)え、日(か)つその父(ちち)の家(いえ)にはイスラエルに於(お)いての税(みつき)を免(めん)ぜん。」

二六 と。二六ダヴィド乃ち己が傍に立てる人々に語りて云いけるは、「このフ
 イリスト人を討取りて、イスラエルの汚名を雪ぐ人には、何を與うる
 ぞ。10) 抑々この割禮なきフィリスト人は何者なれば活ける天主の軍を嘲
 るや。」と。二七民また之に同じ言を答えて云いけるは、「彼を討取りし人
 には、是々の物を與えん。」と。二八然るに彼が他の人々と語れる折、そ
 の長兄エリアブ、之を聞くや、ダヴィドに怒りて云いけるは、「汝何の
 爲に此處に來りしぞ。また何故にかの少き羊を荒野に遺棄にしたるや。
 我は汝の傲慢とその悪しき心とを知る、そは汝、戦争を見んとて下りた
 ればなり。」と。11) 二九ダヴィド云いけるは、「我、何をか爲したる。ただ
 一言12) に非ずや。」と。三〇乃ち稍彼より離れ、他の人に向いて同じ言を
 云いたるに、民また前の如き言を以て之に答えたり。三一さて人々はダヴ
 イドが語りし言を聞き、サウルの眼前に出でて之を告げぬ。三二かくてダ
 ヴイド導かれてその許に至り、之に云いけるは、「何人も彼が爲に心臆

9) ヘブロンが攻
 圍された時のカ
 レブの同様な申
 し出については
 書一五・一六參
 照。—10) ダヴィ
 ドは特別な條件
 を聞こうとした
 のか、それとも
 王の約束が信じ
 難く見えたのか
 11) 汝は自分の年
 齡身分以上の事
 を見ようとする
 12) 多分云つても
 差支えない質問

三三 すべてからず。汝の下僕なる我行きてかのフィリスト人と闘わん。」と。三三 サウル、ダヴィドに云いけるは、「汝はかのフィリスト人に對抗いて之と戦うに堪えず、そは汝は少年なるに、彼は若き頃より闘士なればなり。」と。三四 ダヴィド、サウルに云いけるは、「汝の下僕己が父の羊群を牧いおりし時、獅子または熊の來るありて、群の中より牡羊を取れば、¹³⁾ 我之を退い撃ちて、その口より取り戻せり。また我に立ち向えば、我その咽喉を扼えて之を締め殺せり。三六 汝の下僕なる我はかく獅子と熊とを殺しぬ。かの割禮なきフィリスト人もその一頭の如くならん。我今行きて民の汚名を雪がん。抑々かの割禮なきフィリスト人は、何者なれば敢て活ける天主の軍を罵るや。」と。三七 ダヴィドまた云いけるは、「獅子の爪と熊の爪とより我を救い出し給える主は、またかのフィリスト人の手より我を救い出し給わん。」と。三九 サウル乃ちダヴィドに云いけるは、「往け、願わくは主汝と共に在さんことを。」と。三八 かくてサウル、ダヴィドに己が衣服を纏わせ、その頭に青銅の兜を被らせ、之に鎧を着せたり。三九 次

13) 集四

七・三。

四〇 いでダヴィドその服装の上にその劍を佩び、武装して歩むを得るや、始めて試
 しめたり。蓋し彼は之に慣れおらざりしなり。しかしてダヴィド、サウルに云
 いけるは、「かくては我歩む能わず、そは我之に慣れおらざればなり。」と。乃
 ち之を脱ぎて、四〇常にその手に持てる己が杖を執り、溪流より五箇の滑かなる
 石を選び出して¹⁴⁾之を携えたる羊飼の袋に入れ、投石器を手に取りてかのフイ
 リスト人に向い進み出でぬ。四一またかのフイリスト人も歩み來り、その武器持
 を己が前に立てて、ダヴィドに近づきたり。四二さてフイリスト人、ダヴィドを
 見るや、之を侮りぬ。そは彼若者にして、色紅に、容貌美しかりければなり。
 四三フイリスト人ダヴィドに云いけるは、「我犬なればか、汝杖をもちて我に來
 る。」と。しかしてフイリスト人その神々をよびてダヴィドを呪えり。四四彼ま
 たダヴィドに云いけるは、「わが許に來れ。我汝の肉を、空の鳥と地の獸とに
 與えん。」と。四五ダヴィド、フイリスト人に云いけるは、「汝は劍と槍と楯とを
 もちて我に來る。されど我は汝が嘲りたるイスラエル勢の天主、萬軍の主の御

14) エス

・サム

ト溪谷

の中を

流れる

川の河

床には

投石器

に用い

るのに

手頃な

圓滑な

石が多

くある

四六 名なによりて汝なんじに至いたる。 四六 今日きようこそ主しゆは汝なんじをわが手てに付わたし給たまわめ。我われ汝なんじを討うち

四七 て汝なんじの首くびを取とり、ファイリスト人びとの軍勢ぐんせいの屍かほねを空そらの鳥とりと地ちの獸けものとに與あたえん。是これ、

四七 イスラエルに天主てんしゆあることを全地ぜんちの知しらん爲ためなり。 四七 なお此こゝに集つどえる者ものども共も、皆みな

四八 主しゆの救すくい給たまうは劍つるぎや槍やりによらざることしを知らん。蓋けだし是こゝは主しゆの戦争たゝかいなれば、彼かれ

四八 は汝等なんじらを我等われらの手てに付わたし給たまうべし。」と。 四八 かくてファイリスト人びと起おこちて來きたり、

四九 ダヴィドに近ちかづくや、ダヴィド急いそぎ馳はせかかり、ファイリスト人びとを迎むかへて戦たゝえり。

四九 即すなわちその手てを袋ふくろに入いれて一箇ひとつの石いしを取とり、投いしなげ石器もて之これを投なげ飛とばし、ファイ

五〇 リスト人びとの額ひたいに打うち當あてしに、石いしその額ひたいに突つき刺ささりて、彼かれ俯向うつむきに地上ちじように倒たおれたり。

五〇 ダヴィドかく投いしなげ石器もと石いしとをもてファイリスト人びとに勝かち、ファイリスト人びとを打うち

五一 殺ころしけるが、ダヴィド劍つるぎを手てに持もたざりしかば、¹⁵⁾ 五一 馳はせ行ゆきてファイリスト人びと

のう上えに立たち、その劍つるぎを取とりて之これをその鞞さやより拔ぬき、彼かれを殺ころしてその首くびを刎はねぬ。

五二 茲こゝに於おいて、ファイリスト人等びとら、その無双むさうの勇士ゆうしの死しせるを見みるや逃にげ失うせたり。

五二 イスラエル及およびユダの人々ひとぐすなわ乃たち起たちて闘とぎの聲こゑをあげ、谷たにならびにアツカロン

15) 集四

七・四。

喀前四

・三〇。

五三 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八
 の門に至るまで、ファイリスト人の後を追いしが、¹⁵⁾ サライム¹⁷⁾の道には、ゲト及びアツカロンに及ぶまで、ファイリスト人の傷つける者倒れたり。五三 イスラエルの裔等はかくファイリスト人を追いたる後歸りてその陣營を襲えり。¹⁸⁾ 五四 さてダヴィドはかのファイリスト人の首を取りて、之をイエルサレムに携え行きしが、その甲冑は己が天幕の中に置きたり。¹⁹⁾ 五五 さてサウルは、ダヴィドがファイリスト人に出で向うを見しその時、軍將アブネルに、「アブネルよ、この若者はいずれの家の裔ぞ。」と云いしが、アブネル云いけるは、「王よ、汝の魂は活く、²⁰⁾ 我之を知らず。」と。五六 王また云いけるは、「この少年は誰の子なるか、汝之を問え。」と。五七 よりてアブネル、ダヴィドがかのファイリスト人を討取りて歸り來るや、之を伴い、ファイリスト人の首を手持てる彼を、サウルの前に連れ行きたり。五八 サウル乃ち之に云いけるは、「おお若者よ、²¹⁾

16) 彼等はゴリアトの約束したことが履行されるまで待つていなかつた。それは再三襲撃を繰返したことからわかるように、相手方にそれを履行する意志がなかつたからである。
 17) サライムはソコヤアゼカの附近にあるユダの町。— 18) 彼等は敵の陣營で掠奪した。
 19) 劍は後にノベに送つて聖幕屋に奉納した(本二一・八以下)。
 20) 「まことに」の義。
 誓いの語。— 21) サウルはダヴィドを知つてい

汝は誰の裔なりや。」と。ダヴィド云いけるは、「我は汝の下僕なるベトレヘムの人イサイの子なり。」と。

第十八章

ヨナタス、ダヴィドの親交—サウル嫉妬してダヴィドの命を奪わんと企て、その娘ミコルを彼に妻す。

一 彼サウルに語り終えし時、ヨナタスの心、ダヴィドの心と結び合いて、¹⁾ ヨナタス己が生命の如く、²⁾ 彼を愛するに至りぬ。³⁾ サウルはその日彼を引留めて、之がその父の家に歸るを許さざりき。³⁾ ヨナタスとヨナタスとは盟約を結べり、そは彼、これを己が生命の如く愛したるが

たから、その身のことではなく、知り難いその一族のことを尋ねたのである。是は又すべての税を免ずべき家がいかなるものか確定するのに必要であつた。

第十八章 1) 創四四・三〇で、ベンヤミンに對する

ヤコブの愛情を表すため既に用いられた甚だ強い云い方。—²⁾ 己自身の如く、自分の生命の如く。本二〇・一七参照。—³⁾ ダヴィドは始めの内サウルの宮殿にただ時々しか來なかつた。戦争が勃發すると、サウルは出征したし、イサイも既に上の息子三人を軍隊に入れていたので、ダヴィドは父の膝下にいたのである。しかしこの時から彼は引續き王の宮廷にいなければならなくなつた。

四 故なり。四ヨナタス、己が着けおる上衣を脱ぎてダヴィドに與え、
 またその殘餘の衣服より、その劍、弓、帶に至るまでかく爲した
 五 五ダヴィドは何にもあれサウルが彼を遣す事の爲に出で行き
 六 六賢明なる振舞を爲しければ、サウル之を軍人の上に立てたる
 七 七に、彼すべての民の眼に、わけてもサウルの臣僕に適いたりき。
 八 八六さてダヴィド、フィリスト人を討取りて歸りし時、女等イスラ
 九 九エルのすべての邑々より出で來り、慶祝の鼓と鐃とをもちて歌い
 一〇 一〇つつ踊りつつサウル王を迎えたり。七その女等、奏でつつ歌いて云
 一〇 一〇いけるは、「サウルは千を撃ち、ダヴィドは萬を撃てり。」と。八
 九 九八時にサウル大いに怒れり、この言その眼に快からざりしなり、彼
 八 八乃ち云いけるは、「彼等はダヴィドに萬を與え、我には千を與えた
 七 七り。この上彼の得べきは何ぞ、ただ王位のみ」と。九その目より後
 六 六サウルは好意の眼もてダヴィドを見ることなかりき。一〇然るに次

4) 武器は當時この上
 ない貴重品と思われ
 ていたので、これを
 贈るのは特別な友情
 の徴であつた。
 5) 出征のため。
 6) 説話者は一節から
 五節まで一寸途切れ
 た話の筋を、再び續
 ける。一) 出一五・
 二〇―二一にあるモ
 イゼの姉や他のイス
 ラエル女たちの如く
 士一一・三四にある
 イエフテの娘とその
 友達の如く。一) 本
 二一・一一。集四七
 ・七。一) 9) 自分の若

一七 女メロブを。我之を汝に妻さん。12) ただ汝勇士として、主の軍に
 一六 だ賢明なるを見て、之を警戒し始めたり。一六されどイスラエル及
 一五 に於いても賢明に振舞い、主之と共に在しぬ。一五サウルは彼が甚
 一四 れば、彼民の眼前に出入せり。11) 一四またダヴィドはいずれの方面
 一三 り。一三茲に於いてサウル彼を己が許より遠ざけ、千夫長となしけ
 一二 して、その面前より退きぬ。一二それよりサウル、ダヴィドを恐る
 一 荒れ狂い10) たれば、ダヴィドまた日々ひびの如くその手に琴を弾きけ
 二 するが、折しもサウル、槍を持ちたりしに、二ダヴィドを壁に突き刺
 三 さんと置いて、之を投げつけたり。されどダヴィドは二度身を躲
 四 るに至れり、そは主彼と共に在し、己より離れ給いしに由りてな
 五 びユダの人々は皆、ダヴィドを愛しぬ、そは彼その前まへに出入すれ
 六 ばなり。一七終にサウル、ダヴィドに云いけるは、「視よ、わが長
 七

い従者が王となる注油
 を受けたことは知らな
 いながらも、サウルは
 本一五・二八でいつか
 サムエルが語つた敵手
 こそダヴィドだと思ひ
 こんだ。一10)ラテン語
 Prophetabat この動詞
 はここでは、悪魔の惹
 起する劇烈な超自然的
 昂奮を意味する。
 11) 民が絶えず彼を見て
 いたか、或は少くとも
 彼が勝利の希望を抱い
 て出征したり、凱旋し
 たりする際には必ず彼
 を見たから。一12)サウ
 ルは夙にわが娘をダヴ

一八 戦え。」と。その時サウル心の中に謂えらく、「彼をわが手に
 かけずして之をフィリスト人の手にかけてしめん。」と。一八ダ
 ヴイド、サウルに云いけるは、「我そも何者ぞ、わが生命そ
 も何ぞ、またわが父の家、イスラエルにてそも如何なるもの
 ぞ、さるを我王の婿となるべしやは。」と。¹³⁾ 一九 然るにサウル
 の娘メロブは、ダヴィドに與えらるべき時に當りて、モラト
 人ハドリエルに妻さるるに至りぬ。¹⁴⁾ 二〇 されどサウルの他の
 娘ミコルはダヴィドを愛せり。サウルは之を告げられて喜び
 ぬ。二一 サウル乃ち云いけるは、「我之を彼に與えん、さらば
 之は彼の蹟きとなりて、フィリスト人の手彼に下らん。」と。
 かくてサウル、ダヴィドに云いけるは、「汝、二つの事によ
 りて今日わが婿となるべし。」と。 二二 次いでサウルその臣僕
 等に命じけらく、「我のおらざる所に於いて、ダヴィドに告

イドに與える約束をしてい
 たが、後それを守らなかつ
 た。今も彼はこの約束を本
 氣でしてはいない。ただ害
 を除くため、無謀な企にダ
 ヴイドを誘おうとしたので
 ある。—¹³⁾ダヴィドは王の
 心中を見抜いたのであるら
 メロブを自分から遠ざけよ
 うとした。しかし表面は王
 の申し出を榮譽としなけれ
 ばならないので、應わしい
 結納も與えることができぬ
 自分の素性の卑しさを述べ
 て辭退の云譯としたのであ
 る。—¹⁴⁾母下二一・八。これ
 はダヴィドにとつてこの上
 ない侮辱であつた。

二三

げて云え、ミ「視よ、汝王に嘉せられ、その臣僕は皆汝を愛す。されば今王のミ婿となれ。」と。ミよりてサウルの僕等はこの言をすべてダヴィドの耳に

二四

告げしに、ダヴィド云いけるは、「王の婿となるは、汝等に小なき事と見ゆるか。剩え我は貧しくして素性卑しき人なり。」と。ミサウルの僕等乃ち彼に

二五

告げて「ダヴィドはかくの如き言を語れり。」と云いしに、ミサウル云いけ

るは、「ダヴィドにかく告げよ、ミ王は結納を要めず、ただフィリスト人の

二六

包皮百を要むるのみ、是王の敵に仇を復さん爲なり。」と。ミサウルはかく

してダヴィドをフィリスト人の手に付さんと思えるなり。15) ミさてその僕等

二七

サウルの云いし言をダヴィドに告げしに、王の婿になるべしとの話、ダヴィ

ドの眼に好ましかりき。ミよりて數日の後、ダヴィド起ちて己が配下なる人

々と共に行き、フィリスト人二百人を殺し、その包皮を携え來り、之を數え

二八

て王に差出し、かくて王の婿にならんとせり。茲に於いてサウル、その娘ミ

コルを彼に妻せたり。ミサウルは見て主のダヴィドと共に在すことを悟りし

15) 包皮百はそれだ
けの敵を
殺したと
いう證據
サウルが
かくの如
き多數を
選んだの
は、ダヴ
イドがそ
れだけ確
實に戦死
するよう
にと。

二九 二九 三〇
 が、サウルの娘ミコルは彼を愛しぬ。二九 サウルは更にダヴィドを恐れ始めたり。しかし
 てサウル、いつの日にもダヴィドの敵となりぬ。三〇 フィリスト人の諸侯、出征しけるが
 その出征の最初より、ダヴィド、サウルのすべての臣僕より賢明に振舞いしかば、その
 名甚だ高くなりぬ。

第十九章

サウルなおもダヴィドの命を奪わんとす。ダヴィド、サムエルの許に
 至る。サウルの使者等及びサウルも預言す。

一 一 さてサウルはその子ヨナタス¹⁾及び僕一同に、ダヴィドを殺
 すべき由を語り。されどサウルの子ヨナタスは太くダヴィド
 を愛したれば、二ヨナタス、ダヴィドに告げて云いけるは、「わ
 が父サウルは汝を殺さんとす。されば乞う、明朝は汝自ら警
 戒して、人知れぬ處に籠り、身を隠すべし。三さらば我は出で
 行き、汝のおる畑に於いて²⁾わが父の傍に立ち、汝のことをわ

第十九章 1)ダヴィドが
 王になつたなら、ヨナタ
 スは非常につらく思うに
 相違ないと、サウルは斷
 定した。2)ダヴィドが
 王の言葉を聞いて、その
 意圖を一層よく悟ること
 ができるように。

四 　　が父ちちに語かたらん。しかしてわが見みる事ことをすべて汝なんじに告つげん。」と。四 かくてヨナ
 タス、その父ちちサウルにダヴィドを賞しょう讃さんして云いいけるは、「王おうよ、汝なんみの僕しもべダヴィ
 ドに對たいして罪つみを犯おかすなかれ。彼かれは汝なんみに對たいして罪つみを犯おかしたることなく、またその
 五 　　汝なんみに爲なす所ところは甚はなはだ善よければなり。五 且かつ、彼かれ一いっ命めいを賭としてファイリスト人びとを討うち
 しに、主しゆすべてのイスラエルの爲ために大おほいなる救すく拯せいをなし給たまいぬ。汝なんみ見て之これを喜よろこべ
 り。然しからば汝なんみ何なに故ゆゑに、何なんの科とがもなきダヴィドを殺ころして、罪つみなき血ちに罪つみを犯おかさ
 六 　　んとするぞ。」と。六 サウル之これを聞きくや、ヨナタスの聲こゑに心こゝろ和やわらぎて誓ちかいけるは、
 七 　　「主しゆ活いき給たまう、我われ必かならず彼かれを殺ころさじ。」と。七 茲こゝに於おいてヨナタス、ダヴィドを呼よ
 八 　　び、是これ等らの言ことばを悉ことごとくく彼かれに告つげ、次ついでヨナタス、ダヴィドをサウルの許もとに連つ
 九 　　れ來きたりしかば、彼かれは昨日きのう、一昨日おとといの如ごとく、その前まえに侍はべりたり。八 やがて戦たたか争いふ再た
 九 　　び起おこりぬ。ダヴィド乃すなわち出いで征ゆきてファイリスト人びとと戦たたかい、之これを撃うちて大たい敗はせしめ
 九 　　たれば、彼等かれらその面めん前ぜしより逃にげ去されり。九 主しゆより來きたれる惡あく靈れいまたサウルに憑つき
 九 　　ぬ。折おりしも彼かれはその家いえに坐ざし、槍やりを持もちおり、ダヴィドはその手てに琴ことを彈ひきい

3) わが聞いたこと。
 4) ゴリアト。
 5) 罪なき者の血。
 6) ダヴィドは宮廷で再び例の職務を行つた。

一〇 たり。一〇サウル忽ちその槍もて、ダヴィドを壁に刺し貫
 かんとしたれど、ダヴィド、サウルの面前より身を躲し
 たらば槍は彼に中らずして壁に突き立ちたり。ダヴィド
 は逃げてその夜は難を免れぬ。二 茲に於いてサウル已
 が衛兵をダヴィドの家に遣し、彼を見張らしめ、朝に至
 りて殺さんとせり。時にダヴィドの妻ミコル、彼にこ
 の事を告げて云いけるは、「汝今夜身を救わずば、明日
 必ず死すべし。」と。二三 かくて窓より彼を下したれば、⁹⁾
 彼行きて逃げ去り、難を免れぬ。二三 次いでミコル像を取
 り、¹⁰⁾ 之を床の上に置き、その頭部に毛の附きたる山羊
 の皮を被せ、衣服もて之を覆えり。二四 しかしてサウルが
 ダヴィドを捕えんと、捕吏を遣すに及びて、彼の病める
 由を答えぬ。二五 一五 サウルまたも使者を遣し、ダヴィドを

7) サウルの激怒がまた前のように
 静まると思つたので、單身自分の
 家に逃げ隠れた。―本一八・一一。
 8) 多分裁判の様子が見えるように
 9) 物を吊りあげたり吊りおろした
 りするのは、階段を昇降して運ぶ
 よりも普通であつた。それで大き
 い家にはそのための用具が一切備
 わつていた。ダヴィドも大方後の
 パウロ(徒九・二五)の如く、籠
 で吊り下されたのである。この
 記念にダヴィドは詩篇五八を作つ
 た。―10)これが家に祀つてあつた
 神々の偶像を意味するかは(創三
 一・一九参照)十分確實ではない。
 多分立像か祖先の像のことである
 う。―11)ミコルはこの計略で時を
 稼ぎ、ダヴィドをガバ―から遠く

一六

一七

一八

一九

二〇

見させんとして云いけるは、「彼を殺さんために、床ながらわが許に連れ來れ。」と。12) 一六 使者等乃ち入りて見たるに、床に像あり、その頭に山羊の毛皮あり。一七 時にサウル、ミコルに云いけるは、「汝何故にかく我を欺き、わが敵を放ちて逃げ去らしめしぞ。」と。ミコル、サウルに答えけるは、「彼我に、〃我を去らしめよ、然らずば我汝を殺さん。〃と云いたればなり。」と。一八 さてダヴィドは、逃げて難を免れ、ラマタなるサムエルの許に至りて、サウルの己に爲したる事をすべて之に告げぬ。それより彼とサムエルとは、行きてナヨトに往たりたり。13) 一九 然るに或る人之をサウルに告げて云いけるは、「視よ、ダヴィドはラマタなるナヨトに在り。」と。二〇 サウル乃ち捕吏等を遣してダヴィドを捕えんとせしが、彼等一團の預言者等14)の預言しつつあり、サムエルの之が長たるを見し時、主の靈彼等に

離れた隠れがに逃してやろうと思つた。—12) サウルはミコルがダヴィドを愛していることを知つていたから、かの女の言を信じなかつた。—13) ここで、多分一種の避難權をも有している預言者達の中に入つて、ダヴィドはわが身が安全になつたと信じた。—14) 彼らは共同生活をしていたらしい。預言者の學校についてはその濫觴と歴史とにはいささか曖昧な所がある。これは母上一〇・五及び一〇に始めて出て來る。本節に見えるのはそらい

も亦下りしかば、彼等も等

しく預言し始めたり。¹⁵⁾

三よりて人之をサウルに告

げしに彼の使者を遣せ

り。されど彼等も亦預言し

たれば、サウル重ねて三度

使者を遣したるが、彼等も

亦預言せり。茲に於いてサ

ウル大いに怒り三己も亦ラ

マタに行き、ソコに在る大

井戸に至るや、問いて云い

けるは、「サムエルとダヴ

イドとは何處にか在る。」

う學校の一つで、ラマの特別な「居住地」(ナヨト)内に設けられ、サムエルの指導の下にあつたもの。それでどうしてもこの尊敬すべき預言者がその創立者であつたと信ぜざるを得ない。聖書の記事によれば、少時の間これらの學校は埋もれていたが、また現れ、エリアとエリゼオとの時に大いに榮えた(王上二〇・三五。王下四・三八―四八。六・一―七等)。この第二期に學校を成していた人々は、「預言者たちの子等」と稱せられた。これらの學校は多少修道會に似ていなくはない、何故ならその各人は共同の規則を守り、一人の長の下に共に生活し、祈禱や律法の研究に従つていたからである。これら「預言者たちの子等」が啓示を受けて本當に同時代の人々に將來のことを告げたかと云えば、なかなかそうではなかつたが、少くとも天主は彼らの中から數人を選んでその大役を果たさせ給うた。彼らが或はその善徳の龜鑑によつて或はその力強い偶像禮拜反對によつて、また或は同國民の年代記編纂によつて、イスラエルである重要な使命を果たしていたことは、萬人の一致して認める所である。―¹⁵⁾彼らは預言者達の讚美歌に刺戟されて、精神が善に向かい、それで王の殺害命令をさえ忘れて、彼らと共に天主を讚美謳歌した。

と。人乃ち之に云いけるは、「視よ、彼等はラマタの
 ナヨトに在り。」と。三三 されば彼ラマタのナヨトに行
 きしに、¹⁶⁾ 主の靈彼にも亦下りしかば、彼ラマタのナ
 ヨトに至るまで、途を歩みつつ預言せり。三四 しかして
 彼も亦その衣服を脱ぎて、¹⁷⁾ 殘餘の者等と共にサムエル
 の前にて預言し、その日終日終夜裸のまま¹⁷⁾ 臥しい
 たり。これによりてもまた「サウルも亦預言者の仲間
 なるか。」といふこと、¹⁸⁾ 諺となりぬ。

第二十章

サウル執拗にダヴィドを殺さんとす—ヨナタス父王に執成したれど
 効なく、ダヴィドを去らしむ。

一 一 さてダヴィド、ラマタなるナヨトより逃げ來り、¹⁾
 ヨナタスの前にて云いけるは、「抑々我何をか爲した

16) 今や彼の憤怒は自らサムエル及び
 預言者達の團體の前に出ても氣怯れ
 せぬほどになつた。しかし天主は奇
 蹟によつて、御自分がダヴィドに付
 いておいでになること、従つてサウ
 ルが彼に對し何の危害も加え得ぬこ
 とを示し給うた。—¹⁷⁾ 上衣を着ずに。
 18) この諺はこの時できたものでなく
 (本一〇・一二参照)、思い出された
 のである。—本一〇・一二。

第二十章 一) ラマタでの異常な出來
 事は、自分が天主の特別な御加護を
 蒙つてゐるといふ彼の信念を少から

二 我に何の悪しき事あり、汝の父に對する何の罪あればとて、彼はわが生命を求むるぞ。」と。ニヨナタス之に云いけるは、「否、否、汝死することあらじ。蓋しわが父は事の大小を問わず、先ず我に告げずしては何をも爲さず。然らば彼ただこの事のみを我に隠すべきか。」^一 斷じてさる事あらじ。」と。三彼累ねてダヴィドに誓いしかばダヴィド云いけるは、「汝の父は、我が汝の眼前に籠を得たることをよく知れり。されば彼は云わん、〃この事ヨナタスに知らしむべからず、是、その悲しむことなからん爲なり。〃と。されど主は活き給う、また汝の靈魂は生く。」^二 (我云うを得べくんば) 我の死を去る唯一歩のみ。」^三と。四ヨナタス、ダヴィドに云いけるは、「汝の我に云う所は、何にても我汝の爲に之を爲さん。」^四と。五ダヴィド、ヨナタスに云いけるは、「視よ、明日は新月なり。慣例に循わば、我は王の傍に坐して食するを常とす。」^五 その時に我を去らしめよ、

ず強めたが、それでも彼はヨナタスに援助を求めた。またサムエルに累を及ぼしたくもなかつた。それで彼はサウルが恍惚状態に陥つてゐる間に逃げたのである。^一 本一九・一にある計畫は一九・六の誓いで既に取りやめになつてゐる。^二 誓の語。一) 崖のふちにゐるようなもの。^三 原文 *anima tua* 「汝の魂」。一) この月の始の祝いはただ天主への祭祀ばかりでな

六 さらば我三日目の夕まで、畑に身を隠さん。六 汝の父もし願みて我を求めなば、汝彼に答うべし、「ダヴィドは己が市なるベトレヘムに馳せ行かんことを我に乞えり、そは彼處にその一族の犠祭あればなり。」と。七 彼もし「善し」と云わば、汝の下僕安きを得ん。されど彼もし怒らばその害心極まれりと知れ。八 然る時は、汝の下僕に憐憫をかけ給え、汝下僕なる我をして、汝と主の盟約を結ばしめられたればなり。然れども我に悪しき事あらば、汝我を殺せかし。九 しかして我を汝の父の許へ引き行くなかれ。」と。九 ヨナタス云いけるは、「かかる事断じて汝にあるべからず。蓋し、我はわが父汝を害するに定まれりと確に知らば、之を汝に告げざるを得ず。」と。一〇 ダヴィド、ヨナタスに答えけるは、「汝の父もし我に就きて汝に情なく答うるることあらば、之を我に告ぐべきは誰ぞ。」と。一一 ヨナタス、ダヴィドに云いけるは、「來れ、我等畑に出でん。」と。一二 彼等乃ち共に畑に出で行きしが、一二 ヨナタス、ダヴィドに云いける

く、世俗的祭典として、二日間も行われた。のダヴィドが實際ベトレヘムに往く志があつてその計畫を實行したことも含まれている。一族の祭の際には、その一員はせひとも行きたいと望んだものである。一の我は罪ありと認められる位なら、寧ろ汝の手にかかつて死にたい。

一三 は、「主イスラエルの天主よ、我もし明日または明後日、わが父の意を探り知りて、ダヴィドの爲に善き事あるに、直に人を汝の許に遣して、汝に知らしめずば、一三願わくは主ヨナタスにかく爲し、更に累ねてかく爲し給わんことを。」⁹⁾ されどわが父もし汝に對する害意を棄つるなくば、我汝の耳に之を打明けて汝を去らしめん。是汝安らかに行くを得て、主會てわが父と共に在したる如く、汝と共に在さん爲なり。¹⁰⁾ 我もしなお生きてあらば、汝我に主の御憐憫を施せ。されど我もし死にたりせば、一五主ダヴィドの敵を悉く地上より絶やし、ヨナタスをその家より除き、ダヴィドの敵に報い給う時にも、汝の憐憫を永久にわが家より除き去るなかれ。¹¹⁾」と。一六かくヨナタス、ダヴィドの家と契約を結びぬ。しかして主ダヴィドの敵に報い給えり。一七ヨナタス累ねてダヴィドに誓いたり、そは彼を愛すればなり。蓋しヨナタスは己の生命

9) 必ずそうするとの誓
 10) ヨナタスは自分がダ
 ヴィドを次の王と認め
 ていることを、ここで
 始めて言明する (本一
 六・一三。一八・一一。
 一四・二八参照)。サウ
 ルが妬み怖れているこ
 とを、ヨナタスはそれ
 が自分に不利であるに
 もかかわらず、快く承
 認する。一11) ヨナタス
 は自分の家の没落を豫
 知している。それで之
 に憐憫をかけてくれる
 よう、自分からもダヴ
 ィドに願うのである。

一八

の如く彼を愛せしなり。一八ヨナタス更にダヴィドに云いけるは、「明日は新月

一九

なれば、汝探ねらるべし、一九蓋は汝の席明後日まで空しければなり。汝速か

二〇

に下りて、労働の許さるる日に隠れおるべき處に至り、エゼルと稱ぶ石の傍に

二一

坐すべし。二〇さて我はその邊にて、三本の矢を射、的に向いて稽古するかの如

二二

くに放たん。三しかして「行きてわが爲に矢を取り來れ。」と云いて、童兒を

二三

遣さん。三我もしその童兒に「視よ、矢は汝の此方に在り。之を取れ。」と云

二四

わば、汝わが許に來れ。そは主活き給う、汝安けくして何の危険もなければな

二五

り。されど我もしその童兒に、「視よ、矢は汝の彼方にあり。」と、かく云わ

二六

ば、汝安らかに行け、そは主汝を去らしめ給えばなり。二三さて我と汝との語り

二七

しこの言に就きては、願わくは主永久に我と汝との間に在さんことを。」と。

二八

かくてダヴィドは畑に隠れぬ。さるほどに新月來りしかば、王坐して麪を食

二九

せんとせり。二五即ち王慣例に循いて、壁の邊に在る座に就きし時、ヨナタスは

三〇

起ち、アブネルはサウルの傍に坐しけるが、ダヴィドの席を見れば空しかりき。

12) 云つた言の證者として。

創三一

・四八

参照。

二六 二六されどその日サウルは何をも云わざりき。蓋し、何事か彼に起り、彼淨か
 二七 らずして、未だ身を潔めざるにこそ、と思ひしなり。二七 新月過ぎて二日目來
 りしかど、ダヴィドの席を見ればなお空しかりき。茲に於いてサウルその子
 ヨナタスに云いけるは、「イサイの子は何故昨日も今日も來り食せざるぞ。」
 二八 と。二八 ヨナタス、サウルに答えけるは、「彼はベトレヘムに行かんとて切に
 二九 我に云い、二九 之いけるは、我を去らしめよ、そはかの市に犠祭あればなり。
 わが兄の一人、我を招きたり。よりて、今、我もし汝の眼前に寵を得たらば
 我速かに行きてわが兄等に見えん。」と。この故に彼は王の食卓に來らざる
 三〇 なり。」と。三〇 サウル乃ちヨナタスに對し怒りて云いけるは、「男を惑わす女
 の子よ、¹³⁾ 汝がイサイの子を愛して、自らを恥しめ、また汝の破廉恥なる母
 三二 を恥しむることは、我いかで之を知らざらんや。三二 イサイの子の地上に生く
 三三 る限り、汝も汝の王位も安固なるを得ざるべし。されば今直に人を遣して、
 彼をわが許に引來らしめよ、彼は死の子¹⁴⁾ なればなり。」と。三三 ヨナタスそ

13) 生れつき悪性の。小アシアではこの種の侮辱が母に及ぶとはされなかつた。しかし子にとつては甚だ酷と思われ
 た。
 14) 死に相當する者

三三 父サウルに答えて云いけるは、「彼何故に死すべきか。抑何をか爲したる。」と。三三 時にサウル槍を執りて、彼を撃たんとせり。茲に於いて

三四 ヨナタス、その父のダヴィドを殺さんと思ひ定めたるを悟りぬ。三四 され

ばヨナタス烈火の如く怒りて食卓より起ち、新月の二日目には麪を食せ

ざりき。蓋し彼はその父がダヴィドを恥しめしに由りて、その爲に悲し

三三 みたるなり。三五 かくてその夜明くるや、15) ヨナタス、ダヴィドとの約束

三六 に従い、小さき童を伴いて畑に至り、16) 三六 その童に云いけるは、「行き

三七 てわが放つ矢を、わが爲に取り來れ。」と。童乃ち馳せ行くに、彼他

の矢を童の彼方に放ちぬ。三七 しかして童ヨナタスの放てる矢の處に至る

三八 や、ヨナタス童の背後より叫びて云いけるは、「視よ、矢は其處に、汝

の遙か彼方にあり。」と。17) 三八 ヨナタスまた童の背後より叫びて云いける

三九 は、「疾く急げ、立留るなかれ。」と。やがてヨナタスの童、矢を拾い

てその主人の許に携え來りしが、三九 行われし事の何たるかを、些かも知

15) サウルは新月の次の日の晩に食事をした。従つてこれは三日目のことである
16) ヨナタスは全く疑われる餘地のないように小童に伴をさせた
17) この矢を射たのは、ヨナタスがそれを口實として、ダヴィドの隠れ場所と分つている所に赴くため選んだ手段であつた。

らざりき。ただその事を知りたるはヨナタスとダヴィドのみ。

四〇。かくてヨナタスその武器を童に與えて云いけるは、「去れ、

四一。之を市に携え行け。」と。四二。童乃ち去るや、ダヴィド南に向

えるその處より起ち出で、地に平伏して三度敬禮しぬ。18) それ

より彼等互に接吻して、共に泣きけるが、わけてもダヴィド甚

四二。だしかりき。四三。ヨナタス、ダヴィドに云いけるは、「安らかに

行け。願わくは主我と汝との間に在し、また代々に至るまで

わが裔と汝の裔との間に在さんことを。」と云いて、我等兩人

四三。主の御名により誓いし事は、すべて堅く守らん。19)と。四四。ダヴ

イド乃ち起ちて去り、ヨナタスは市に入りぬ。20)

第二十一章

ダヴィド司祭アキメレクの聖なる麴を受け、後ゲトの王アキスの前にて狂氣をよそおう。

一。さてダヴィド、ノベに來りて司祭アキメレクの許に至りしに、アキメレク、ダヴィド

18) 王子に敬意を表して。

原語 adora vit 禮拜する、

又は地に接吻して敬禮す

る。創三三・三。19) 原

文はこの意味を含むのみ

で明文なし。20) ヨナタ

スの死ぬ前に、兩友は一

度しか再會しなかつた

(本二三・一六一―一八)。

二
の來れるに驚きて之に云いけるは、「汝單身にして、何人も汝と共におらざるは何故ぞや。」と。ダヴィド、

三
司祭アキメレクに云いけるは、「王我に或言を命じて云えり、わが汝を遣す用務、及びわが汝に與えたる命の如何なるかは、誰にも之を知らしむるなかれ。」と。されば我も僕にかくかくの處に行くことを命じたり。故

四
に今汝何か手許にあらば、縦しや麪五箇にても、もしくは何にても見當る物を、我に與えよ。」と。司祭ダヴィドに答えて云いけるは、「わが手許には普通の麪なし、あるはただ聖き麪のみ。されどその若者等は潔きか、わけても婦女に就きて然るや。」と。ダヴィド司祭に答

五
えて云いけるは、「寔に婦女に就きては、我等昨日も一昨日も、即ち出で來りし時より身を慎しみたり、されば

第二十一章 1)ノベはイエルサレムの北方、同市のすぐ近くにある(書一〇・三二。尼一一・三二)。アキメレクは前にアキアスと云われていたのと同じの大司祭であるらしい(本一四・三)。理由はアキメレクの父もアキアスの父と同じくアキトブという名であるから(本一四・三と二二・九、一一參照)。2)窮餘の策とすれば、この虚偽の説明はつくが、しかしそれだからとて宥恕することはできない。3)取り下げた供えのパンは聖物で、ただ司祭達だけが、それも聖所で食べることを許されていた。しかしダヴィドには是非共必要であつたから、司祭はやむを得ぬと認めて、これを彼に與えた。

六 若者等の容器⁴⁾は淨かりき。またこの道^{みち}たとい不淨^{ふじよう}なりとするも、今日^{きよう}その器^{うつわ}によりて潔^{きよ}めらるべし。」と。六^{こゝ}茲^{こゝ}に於^おいて司祭^{しさい}、彼^{かれ}に聖別^{せいべつ}したるパンを與^{あた}えぬ。蓋^そは彼處^{かしこ}にただ熱^{あつ}き麴^{パン}を供^{そな}えんとて、主^{しゆ}の御面^{みまへ}前^{まへ}より取除^{とりぞ}きたる供^{そなえ}の麴^{パン}のほか別^{べつ}にパンなかりし故^{ゆゑ}なり。⁵⁾七^{しち}然^{しか}るにその日^ひ其處^{そこ}には、サウルの僕^{しもべ}の一人^{ひとり}、主^{しゆ}の幕屋^{まくや}の内^{うち}に在^ありしが、その名^なをドエグと云^いい、⁶⁾イドウメアの人^{ひと}にして、サウルの牧者^{ぼくしやら}等の頭^{かしら}なりき。八^{はち}ダヴィドまたアキメレクに云^いいけるは、「此處^{こゝ}に汝^{なんじ}の手許^{てもと}に、槍^{やり}または劍^{つるぎ}ありや。王^{おう}の用務^{ようむ}急^{きゆう}を要^{よう}したれば、我寔^{われまこと}にわが劍^{つるぎ}も武器^{ぶき}も携^{たずさ}え來^{きた}らざりけり。」と。九^く司祭^{しさい}云^いいけるは、「視^みよ、此處^{こゝ}に汝^{なんじ}がテレビンの谷^{たに}にて討^{うち}取りしファイリスト人^{びと}ゴリアトの劍^{つるぎ}、布^{ぬの}に包^つまれて肩衣^{エフオド}の後^{うしろ}に在^あり。汝^{なんじ}もし之^{これ}を取^とらんと欲^{ほつ}せば取^とれ、⁷⁾此處^{こゝ}には之^{これ}を除^{のぞ}き

⁴⁾ 容器とは帖前四・四にある如く、身體のことである。ダヴィドは、彼らが規定通り新月の祝いを行つたから淨い、道が屍で不淨であつたとしても、道のために彼らは穢されず、寧ろ道が彼らによつて淨くなつた、と云うのである。一¹⁾の墳一二・三、四。一¹⁾のドエグはイスラエルの宗教を奉じていたイドウメア人で(本二二・九)、願を果すため聖所に籠つていたのである(徒二一・二六参照)。一¹⁾のこの劍は奉納物として天主に獻げたものであつたが、極めて必要な場合には、供えのパン同様、取ることができた。

一〇 てまた他にあらざればなり。」と。ダヴィド乃ち云いけるは、「之に匹敵するもの、また他に非ず、之を我に與えよ。」と。一〇。かくてダヴィドは、その日起ちてサウルの面前より逃げ去り、ゲトの王アキスの許に至りぬ。二時にアキスの臣僕等、ダヴィドを見てアキスに云いけるは、「是はかの國の王ダヴィドならずや。人々之が爲に舞いつつ歌いて、〃サウルは千を撃ち、ダヴィドは萬を撃てり。〃と云いしに非ずや。」と。二。然るにダヴィドこの言を己が心に蔵め、ゲトの王アキスの面前を太く恐れたり。二三。されば人々の前にてはその顔貌を變じ、倒れかかりて彼等の手に抑え留められ、門の扉に突き當りなどしたり。しかしてその涎は鬚を流れ下りぬ。10) 一四。アキス乃ちその僕等に云いけるは、「汝等かの人狂えるを見たり。汝等何故に彼をわが許に連れ來りしぞ。一五。我等の許に狂人なければとて、汝等この者を引き入れて、わが

8) アキスは詩三四にアキメレクと云つてある
 ダヴィドは自國民の最も根強い敵の許に難を避けに行つたのである
 9) 本一八・七。集四七・七。一〇) ダヴィドは
 フイリスト人の談話から、事態が自分にとつて此の上なく危険であることを悟つたので、狂氣を裝つた。精神病者は今日でも、小アジアで、同情すべき者とされ、手をかけてはいけないことになつてゐる。

前に狂態を演ぜしめたるか。この者いかでわが家に入るべけんや。」と。11)

第二十二章

多くの人ダヴィドの許に集まるーサウル命じてアキメレク及びノベの司祭を悉く殺さしむーアピアタル、これをダヴィドに告ぐ。

一 茲に於いてダヴィド其處を去り、オドラムの洞穴に逃れしが、¹⁾ その兄弟及びその父の家の者皆之を聞くや、彼處に下り彼の許に至りぬ。ニまた惱める者、負債に苦しめる者、心に不満ある者、皆彼の許に集い來り、彼その首長となれり。かくて彼の許にある者は約四百人なりき。²⁾ 三 次いでダヴィド、其處を去りてモアブにあるマスファに至り、モアブの王に云いけるは、「乞う、我が天主のわが爲になりし給う所を知るまで、わが父わが母をして汝の許に留まら

11) 詩三三及び五五参照。

第二十二章 1) オドラムの洞穴はベトレヘムの附近にあり、後に山のとりでと云われている(四、五兩節参照)。パレスチナの洞穴は近づき難いのと、廣いので、天然の要害をなし、それを屢々人工で強化使用した。²⁾ ダヴィドの許に集まつた者は決してたゞ卑賤の出の人々ばかりではなかつた(代上一二・一六参照)。

四 しめよ。」と。3) 四しかして彼等をモアブの王の面前に遺しけるが、

五 ダヴィドが要塞に在る間、常に彼等はその許に留まれり。五時に預

言者ガド、4) ダヴィドに云いけるは、「要塞に留まるなかれ、去りて

六 ユダの地に行け。」と。ダヴィド乃ち去りてハレトの森に至りぬ。

六 然るにサウルはダヴィド及び彼と共なる人々の現れたる由を聞け

り。さてサウル、ガバーンに住まり、手に槍をもちてラマにある森

七 の中に居り、その僕等皆その周圍に立てる時、七己が傍なるその僕

等に云いけるは、「さて聽け、イエミニの裔等よ。イサイの子、汝

等すべてに畑と葡萄畑とを與え、汝等一同を千夫長、百夫長になす

八 ことあらんや、八汝等皆結びて我に叛き、わが子がイサイの子と盟

約を結びたる重大時と雖も、我に報ずる者絶えてなければとて、彼

の然することあらんや。汝等の中、わが不運を悲しむ者、我に告げ

知らせる者一人もなし、蓋はわが子、今日に至るまで我に陰謀を抱

3) ダヴィドの曾祖母はモアブの女であつた(得四・一〇)。

サウルはモアブに敵意を持つていたからその敵手らしく見えるダヴィドは、そこに援助を期待することとができた。1) 預言者ガドは後に再び出てくる(母下二四・一一一八)。彼はダヴィドの歴史を書いた(代上二九・二九)。1) ユダの山地にあり。1) 王権のしるし。

九 き、わが下僕を唆して我に敵對わしめられたればなり。」と。九時に傍に立てる、サウルのの僕等のの首長のなるイドウメア人ドエグ、の答えて云いけるは、「我はノベに於いてイサイの子がアキトブの子司祭アキメレクの許に在るを見しが、一〇アキメレクは彼の爲に主に問い、また彼に糧を與え、剩えファイリスト人ゴリアトの劍まで與えたり。」と。二茲に於いて王人を遣し、アキトブの子司祭アキメレク、及びその父の全家、即ちノベに在る司祭等を召しければ、彼等皆王の許に來れり。一二サウル、アキメレクに云いけるは、「聽け、アキトブの子よ。」彼答えけるは、「主君よ、我御前に在り。」一三サウル之に云いけるは、「汝とイサイの子と、何故に謀りて我に叛きたるや。汝はまた彼にパン及び劍を與え、彼の爲に主に問い、彼をして我に起ち逆わしめ、今日に至るまで絶えず我を狙わしめたり。」と。一四アキメレク王に答えて云いけるは、「されど汝のすべての僕の中、誰かダヴィドの如く忠にして、王の婿たり、汝の命の儘に行い、汝の家に敬わるる者あらんや。一五我今日始めて彼の爲に主に問いしや。斷じて然ら

のドエ
グはす
べての
僕の長
でなく
牧者等
の長で
あつた

一六 問わす、知る所なかりしなり。」と。一六 王云いけるは、「アキメレクよ、汝
 一七 は死せざるべからず、汝も汝の父の全家も共に。」と。一七 王乃ち己が周
 圍に立てる前驅の者共に云いけるは、「主の司祭等に向いて之を殺せ、實
 に彼等の手はダヴィドに與したり、そは彼等その逃げたるを知りながら、
 我に告げざりしを以てなり。」と。されど王の僕等は、主の司祭等にその
 一八 手を出すを欲せざりき。一八 時に王ドエグに云いけるは、「汝、司祭等に向
 いて之を襲え。」と。イドウメア人ドエグ、乃ち司祭等に向いて之を襲い、
 一九 その日の中に亞麻布の肩衣を着たる者八十五人を殺せり。一九 また彼は司祭
 等の市ノベを劍の刃もて撃ち、男、女、子等、乳呑兒、牛、驢馬、羊を劍
 二〇 の刃にかけたり。二〇 然るにアキトブの子アキメレクの子等の一人にて、そ
 二一 の名をアビアタルと云える者、遁れてダヴィドの許に走り、三之にサウル

8) アキメレクは
 大司祭としての言葉
 を以て、何の敵對行爲も與り知らざることを斷言したのにサウルはこれに死刑を宣告した。この殘忍さは彼が天主に棄てられた一つの結果である。申二四・一六参照

三 三
が主の司祭等を殺したる由を告げたり。三時にダヴィド、

三 三
アビアタルに云いけるは、「我はイドウメア人ドエグが彼
處に居りしその日に、彼の必ずサウルに告げんことを知れ
り。我は汝の父のすべての人々⁹⁾に對して責あり。10) 三 三 汝わ
が許に留まれ。恐るるなかれ、11) 蓋しわが生命を求むる者
は、また汝の生命をも求む。汝我と共に救わるべし。」と。

第二十三章

ダヴィド、フィリスト人に圍まれたるケイラを救うーダヴィド、
ジフの荒野に遁るーサウル、ダヴィドを追いて之に迫りたれど、
フィリスト人侵入せしにより、呼び返さる。

一 一人々ダヴィドに告げて云いけるは、「視よ、フィリスト
人ケイラ¹⁾を攻めて打禾場を掠奪す。2)」と。ニダヴィド乃
ち主に問いて云いけるは、「我行きてこのフィリスト人³⁾
を討つべきか。」と。主ダヴィドに曰いけるは、「行け、しか

9) 原語 animarum 「魂」—10) サウ
ルにはいつも他人に罪を着せる
傾きがあるように、ダヴィドは
自分が責を負う。—11) アビアタ
ルはこの時から逆境にも順境に
も彼の常住の伴侶となつて、彼
のそばで大司祭の職務を行つた

第二十三章 1) ケイラはいわゆる「丘陵地」(セフェラ)にあるユダ族領の一都市で、ヤムニアの南方四十キロメートルの所にある。—2) 穀物は通例町の前にある。

三 して汝なんじファイリスト人びとを討うち、ケイラを救すくうべし。三 然しかるにダヴィドと共ともなる人々ひとぐ、彼かれに云いいけるは、「視みよ、我等われらはこのユダに在ありても、既すでに恐おそる。如何いかに況いんやケイラに行ゆきてファイリスト人の軍ぐんに敵對はむかうおや。」と。四 茲こゝに於おいてダ
 四 ヴイド再またび主しゆに問うかひしに、主しゆ答こたえて之これに曰のたまいけるは、「起たちてケイラに行ゆけ、
 五 我われファイリスト人びとを汝なんじの手に付わたさん。」と。五 よりてダヴィドとその部ぶ下かの人々ひとぐ、
 六 ケイラに行ゆきてファイリスト人びとと戦たたかひ、その家畜かちくを奪うばひ、大おほいに彼等かれらを打破うちやぶれり。
 七 かくてダイヴド、ケイラの住民たみを救すくいぬ。六 アキメレクの子アビアタルは、ケ
 七 イラなるダヴィドの許もとに遁のがれし時とき、肩衣エフオドを携たづさえて下くだれり。七 然しかるにダヴィドの
 八 ケイラに來きたりし由よし、サウルに知ししかば、サウル云いいけるは、「主しゆ、彼かれをわが
 八 手てに付わたし給たまへり。即すなわち彼かれは門もんと門かんある邑まちに入いりしに由よしりて閉込とじこめられたり。」
 九 と。八 サウル乃すなわちすべての民たみに命めいじて、下くだり行きケイラにて戦たたかひ、ダヴィドと
 九 その部ぶ下かの人々ひとぐとを圍かこましめんとせり。九 してダヴィドはサウルが密ひそかに己おのれを
 害がいせんと圖はかるを知るや、司祭しさいアビアタルに、「肩衣エフオドを執とり來きたれ。」と云いいぬ。

の大き
 い廣場
 である
 打禾場
 には、
 より長
 い間置
 いてあ
 つた。
 3) ウリ
 ムとト
 ウミム
 を用い
 て天主
 に何う
 ために

一〇 しかしてダヴィド云いけるは、「主イスラエルの天主よ、汝の下僕は、サウルがケイラに來りて、わが爲に邑を荒さんと手配せる風聞を聞きたり。

二 ケイラの人々我を彼の手に付すや。また汝の下僕の聞きたる如く、サウル下り來るや。主イスラエルの天主よ、汝の下僕に告げ給え。」と。主は「彼下り來らん。」と曰えり。ケイラの人々は我及び我と共にある者共をサウルの手に付すや。」と。主曰いけるは、「彼等付さん。」と。茲に於いてダヴィドとその部下の人々約六百人ばかり、起ちてケイラを出で、住處定めず此處彼處と漂泊えり。然るにダヴィドのケイラを遁れて難を避けしこと、サウルに傳えられしかば、彼出ずることを取りやめたり。一四 さてダヴィドは荒野に於いて砦に居り、ジフの荒野の山中なる木立多き峯に留まりぬ。サウルは常に彼を探ねしかど、主之をその手に付し給わざりき。一五 ダヴィド、サウルの己が生命を奪わんとて出で來れるを見たり。折しもダヴィドはジフの荒野なる森に居りしに、一六 サウルの子ヨナタス起

4) 殊にその邊に少くない天然の要害たる洞穴などを云う。
 5) ジフはまだユダ領で、モアブとはたゞ荒野一つで隔てられていた。

一七

ちて森に入りダヴィドの許に行き、天主によりてその手を強からしめた
り。即ち彼に云いけるは、一七「恐るるなかれ。蓋しわが父サウルの手、汝
を捉うることあらじ。しかして汝イスラエルに君臨し、我は汝に次ぐ者と

一八

なるべし。わが父サウルも亦之を知れり。」と。一八かくて兩人主の御前に
盟約を結び、ダヴィドは森に留まり、ヨナタスはその家に歸りぬ。一九さ

一九

るほどにジブの人々ガバーなるサウルの許に上り行きて云いけるは、「視

二〇

よ、ダヴィドは我等の許にありて、荒野の右手にあるハキラ山⁸⁾の森の岩
に隠れおるに非ずや。二〇されば汝の魂が下らんと望む如く、今こそ下

二一

り給えかし。さらば彼を王の手に付すは、我等が事たるべし。」と。二一サ
ウル云いけるは、「汝等主に祝せられよかし、そは汝等わが運命を憐みた

二二

ればなり。二三されど乞う、行きて力を盡し、心を傾けて探ね、彼の足跡の
ある處と、誰が其處に於いて彼を見たるかを見定めよ。蓋は彼我に就きて

二三

我が巧みに彼を待伏せすと思ひおればなり。10) 二三探索りて彼が潜める隠れ

6) ヨナタスは

主がダヴィド

と共に在すこ

とを指摘して

その超自然的

理由でわけて

も彼を勵まし

た。一の盟約

の更新。

8) この丘はジ

ブとカルメル

との間にある

9) 本二六・一。

10) ジブの人々

がガバーへ來

てから、既に

若干の時がた

つていた。そ

二四 場を悉く見出し、その事を確めてわが許に歸り來れ。さらば我汝等と共に
 行かん。彼たとい地に¹¹⁾潜むとも、我は之をユダ數千の人々皆の中より探
 ね出さん。」と。彼等乃ち起ちてサウルに先立ちジフに行きぬ。時にダ
 ヴイドとその部下の人々とは、イエシモンの右、平野の中にあるマオン¹²⁾
 二五 の荒野に在りき。かくてサウルとその伴侶とは、行きて彼を探ねたり。
 然るにこの事ダヴィドに傳えられしかば、彼直に岩の所に下り、マオンの
 二六 荒野に住まれり。サウル之を聞くや、マオンの荒野にダヴィドを追いぬ。
 二六 その時サウル山の此方を行きしが、ダヴィドとその部下の人々とは山の
 彼方に在りき。ダヴィドはサウルの面前より遁るるを得んと望みを絶て
 二七 り。サウルとその部下とは、ダヴィドとその部下とを、輪の如く圍みて之
 を捕えんとしたり。折しもサウルの許に使者來りて云いけるは、「ファイ
 二八 リスト人國に侵入したるに由り、急ぎ來り給え。」と。さればサウル、
 ダヴィドを追うことをやめて歸り、ファイリスト人に向かい行けり。この故

れでサウルは
 ダヴィドがま
 だ同じ場所に
 いるか疑つた
 11) ユダの領内
 に。—12) マオ
 ンはジフから
 行程約三時間
 の所にあり。
 13) 天主の御攝
 理の介入がか
 くも明らかに
 現れたのは、
 ダヴィドの天
 主信賴の念が
 強められんた
 め。

に人々その處を別離の岩と稱したり。¹⁴⁾

¹⁴⁾本章二五節参照。

第二十四章

サウル、エンガツデイの荒野にダヴィドを探し索め、洞穴に入りてダヴィドの掌中に落つ—ダヴィド之を見のがす。

一 一その後ダヴィドは彼處より上りて、エンガツデイ¹⁾の要害に住まりぬ。ニ然るにサウル、フィリスト人を追いて歸るや、人々之に告げて云いけるは、「視よ、ダヴィドはエンガツデイの荒野に在り。」と。三茲に於いてサウル、全イスラエルより精選りし三千人を率い、行きてただ野山羊の通うのみなる嶮しき岩の上までも、探りてダヴィドとその部下とを索めたり。四かくて途にある羊の檻に至りしに、其處に洞穴ありしかば、サウル用を足さんとして之に入れり。然るにダヴィドとその部下の人々、洞穴の内部に潜みいたり。²⁾五ダヴィドの僕等彼に云いける

第二十四章 1) 死海の西岸に建てられた町。歌一・一三の讚えている棕櫚や葡萄樹は全くなくなつたが、今なお豊かなオアシスである。周圍には巖窟が多い。1) 2) サウルはマントを脱いでいたのである。小アジアの洞窟は「夜のうちに暗く」よほど鋭い眼でも、五歩ほど離れて奥の方にいる人の姿を認めることができない。

二 給うや。二視よ、今日汝の眼、主が洞穴に於いて汝をわが手に付し給えること
 一〇 は、一汝如何なれば、二ダヴィド汝を害せんとす。三と云う人々の言を聞き
 九 始めし旅を續けたり。四ダヴィドも亦その後より起ちて洞穴を出で、サウル
 八 し給いし者なればなり。五と。六ダヴィドその部下にかく云いて、彼等を宥め
 七 起ちて、密かにサウルの衣の裾を切りぬ。七その後ダヴィドの心彼を責めた
 六 起ちて、密かにサウルの衣の裾を切りしに由りてなり。八ダヴィドその部下に云
 五 り、そは彼サウルの衣の裾を切りしに由りてなり。九ダヴィドその部下に云
 四 いけるは、一主願わくは我に憐憫を垂れて、二主の注油し給いたるわが主君に
 三 對し、之にわが手を下す如き、かかる事を爲さしめ給わされ、彼は主の注油
 二 し給いし者なればなり。三と。四ダヴィドその部下にかく云いて、彼等を宥め
 一 起ちてサウルを襲うことを之に許さざりき。よりてサウルは洞穴を起ち出で

しかし長くその中にいれれば眼が慣れ、入口の方を通る人を隨分的確に認めることとができ、一三王に十分尊敬を拂わなかつたという心配から生ずる良心の苛責。

とを見たり。我汝を殺さんと思いたれども、わが眼汝を見遁せり。即ち我謂えらく、¹¹我はわが主君にわが手を伸べじ、そは彼主の注油し給いし者なればなり。¹²と。二三更に、わが父よ、わが手にある汝の衣の裾を

見て知り給え、我は汝の衣の裾を切りし時にも、汝に手を伸ぶるを好まざりしなり。わが手に悪も不義もなく、またわが汝に罪犯せることなきを憶い見給え。然るに汝はわが生命を狙いて之を奪わんとし給うなり。

二三主我と汝との黑白を判定め給えかし、また主わが爲に汝に仇を報い給えかし。されど我は汝に手を下さざるべし。¹⁴また古の諺に云える如く、背徳は不信の輩より出ず。¹⁵されば我手を汝に下さざるべし。¹⁵汝

は誰を追い給うや、イスラエルの王よ、汝は誰を追い給うや。汝の追うは死せる犬なり、一匹の蚤なり。¹⁶主、審判者となりて、我と汝との黑白を判定め、見てわが訴訟を審べ、以て我を汝の手より救い出し給

えかし。」と。¹⁷さてダヴィド、サウルに是等の言を語り終うるや、サ

4) ダヴィドはこの諺で、自分もし悪人であつたなら、洞窟で王を毒手にかけてたであるう、というつもりであつた。1)のダヴィドが自分を小アジアで最も輕蔑されている二つの動物に譬えたのは、サウルが自分如き卑賤な人間を怖れるに及ばぬことをあらわすため。

一八 ウル云いけるは、「わが子ダヴィドよ、是は汝の聲なりや。」と。かく
 てサウル、聲を擧げて泣けり。6) 一八 彼またダヴィドに云いけるは、「汝
 は我よりも義し。蓋は汝我に善を爲したるに、我汝に報ゆるに惡を以
 てしたればなり。一九 しかも汝は今日、汝が我に如何なる善事を爲すか
 を示したり、そは主、我を汝の手に付し給いしに、汝我を殺さざりけ
 ればなり。二〇 蓋し人もしその敵に逢わば、誰か之を安らかに去らしめ
 んや。願わくは主汝が今日我に爲したるこの善行に對し、汝に報い
 給わんことを。二一 さて我は今や汝が必ず王となり、イスラエルの王國
 を汝の手に收むべきことを知りたれば、二三 汝わが後に於いてわが胤を
 滅ぼさず、またわが名をわが父の家より絶やさざらんことを、主によ
 りて我に誓え。」と。二三 ダヴィド乃ちサウルに誓いぬ。7) かくてサウル
 はその家に行き、ダヴィドとその部下の人々とは、更に安全なる處
 8) に上れり。

6) サウルは自分の不正非行を良心に責められ(一八節参照)、且ダヴィドを除かんとした試みが悉く徒勞であつたことを悟つた。(一九節) 7) ダヴィドはまたサウルから迫害を受けたので(二六章)、この誓を果たす義務がなくなつた。8) 犠祭を獻げにマスファへ

第二十五章

サムエルの死—ダヴィド、ナバルを怒りて之を滅ぼさんとし、アビガイルに宥めらる。

一 やがてサムエル逝きたれば、イスラエル皆集まりて

之を悼み、ラマタなるその家に葬りぬ。1) ダヴィドは

起ちてファランの荒野に下れり。2) 茲にマオンの荒

野に一人の人あり、その所有地はカルメル。3) にあり

き。この人は甚だ大いにして、羊三千頭、山羊一千頭

を有せしが、或る時カルメルにてその羊の毛を剪りし

ことあり。3) さてその人の名はナバル。4) と云い、ま

たその妻の名はアビガイルと云えり。この女はいと賢

くして美しかりしかど、その夫は情なくして甚だ悪し

く、且性卑しかりき。彼はカレブの一族なり。4) 然る

にダヴィド荒野に在りて、ナバルがその羊の毛を剪り

第二十五章 1) 特別に敬うべき人々

のためには、その所有地内、庭園や

耕作地などに廟を建てた。(王上二・

三四。百三〇・二三参照)。2) 本二

八・三。集四六・二三。3) カルメ

ルは、ここではイエズラエル平野の

南端にある山でなく、ヘブロンの方の町、今日のクルムルをさす。

4) ナバル(愚者)はカレブ人の一族。

この族は「南の地」(ネゲブ)に住

みついていたが、その粗暴な行状の

ために悪評があつたらしい。

五 おるの⁵⁾ 由を聞くや、^五若者十人を遣し、彼等に云いけるは、「汝等カルメ
 ルに上り、ナバルの許に至り、わが名によりて之に安かれと挨拶し、^六か
 く云うべし、^六わが兄弟ならびに汝安泰なれ、汝の家も安泰なれ、また汝
 の有てるすべての物も安泰なれ。^七我は、荒野に於いて我等と共にありし
 汝の羊飼等が毛を剪りおる由を聞きたり。我等は曾て彼等を惱ましたるこ
 となく、また彼等が我等と共にカルメルに在りし間、その羊群より一頭だ
 も失せたることなかりき。^八汝の僕等に問え、さらば彼等汝に告げん。
 故に今汝の僕等をして、汝の眼前に恩恵を得しめよ。蓋し我等は吉き日に
 來れり。汝の手許にある物を、汝の僕等及び汝の子ダヴィドに與えよ。〃
 九 と。〃^九ダヴィドの僕等乃ち至るや、ダヴィドの名によりて是等の言を悉
 くナバルに告げてしかして黙しぬ。^{一〇}然るにナバル、ダヴィドの僕等に
 答えて云いけるは、「ダヴィド何者ぞ。イサイの子何者ぞ。今日僕等のそ
 の主人の許より遁るる者多し。⁸⁾ 二然らば我、わがパン、わが水、及びわが

5) この折には祭を行い、その家に功勞のあつた人々が贈物を請い求めるのが慣であつた。
 6) 本二三・一参照。ダヴィドは住民達と仲よく暮し、強盜等を防いで彼らを衛つた。一のへブレオ語聖書「坐しぬ。」
 8) 我が彼及び彼らの如く扱

羊の毛を剪る者の爲に屠りたる家畜の肉を取りて、何處の者とも知れざる人々に與うべしやは。」と。二二ダヴィドの僕等己が途を歸り行きしが、戻り來るやその云いし言を悉くダヴィドに告げぬ。二三時にダヴィドその若者等に「各人の劍を佩びよ。」と云いしかば、彼等各自身その劍を佩びたり。ダヴィドも亦その太刀を佩びぬ。ダヴィドに従える者凡そ四百人あり、また二百人は荷の所に留まれり。二四然るにナバルの妻アビガイルに、その下僕の一人告げて云いけるは、「視よ、ダヴィド我等の主人を祝せんとて、荒野より使者を遣したるに彼は彼等を斥けたり。二五その人々は我等に甚だ善くして、我等を惱ましたることなく、また我等荒野にて彼等と交わりし間、終始何物も失せたることなし。二六我等が彼等の許にありて羊を牧いおりし間、毎に彼等は夜も晝も我等の爲に垣となりたり。二七この故に汝熟考えて何を爲すべきかを思ふべし。そは汝の夫と汝の家とに危害の來らんこと必定なればなり。しかも彼はベリアルの子なれば、何人も之と語るを得ず。」と。二八アビガイル乃ち急ぎパン二百箇、葡萄

うべき
 者はま
 だ澤山
 あるだ
 ろう。

一九 酒二袋、調理したる牡羊五頭、⁹⁾ 炒麥五斛、乾葡萄百房、乾無花果二百
 顆を取りて¹⁰⁾ 之を驢馬に載せ、一九その僕等に云いけるは、「我に先立ち
 て行け。視よ、我は汝等の背後に従わん。」と。されどその夫ナバルに
 は告げざりき。二〇かくて彼女は驢馬に乗りて、山の麓に下りし時、ダヴ
 イドとその部下の人々と、之に對いて下り來りしかば、彼女彼等に逢い
 ぬ。二一ダヴィド云いけるは、「我が荒野にてこの人の所有を悉く守護り
 彼に屬せるすべての物を一として失せざらしめしも寔に徒なりき。彼は
 我に對し、善に報ゆるに惡を以てせり。二三我もし彼に屬するすべてのも
 のの中、男子¹¹⁾を一人だも明朝まで残したらんには、天主ダヴィドの敵
 にかく爲し、更に累ねてかくなし給え。」と。二三さてアビガイルは、ダヴ
 イドを見るや急ぎ驢馬より降り、ダヴィドの前に平伏し地に叩頭して敬
 禮せり。¹²⁾ 二四しかして彼の足下に伏して云いけるは、「わが主君よ、この
 不義は我に歸し給え。¹³⁾ 請う、汝の婢をして汝の耳に語らしめ、汝の召

9) ナバルはこれらすべて羊の毛を剪る際に調理した。—10) かの女は求められた(六節)贈物となすべくこれを獻げるのである。—11) 原文 *mingenten ad parietem* 壁或は垣にいばり(尿)する者。—12) 先ず遠くから挨拶し、それから近寄つて更に平伏した。—13) 不義を辯明し又は償

二五 使の言を聴き給え。二五 願わくはわが主君王がこの悪しき人ナバルを意に
 介し給わざらんことを。彼はその名の如く愚者にして、愚は彼の屬性な
 ればなり。しかも汝の婢なる我は、わが主君よ、汝の遣し給える僕等を
 ば見ざりき。二六 さればわが主君よ、主は活き給う、また汝の靈魂は活く
 主は汝が血を流すに至るを防ぎ、汝の爲に汝の手を止め給えり。今汝の
 敵及びわが主君を害せんとするすべての者は、ナバルの如くになれかし。
 二七 されば汝の婢がわが主君なる汝に齎したるこの祝福を受け、且わが主
 君なる汝に従う若者等にも之を與え給え。14) 二八 汝の婢の不義を赦し給え
 蓋し主は、わが主君なる汝が主の御軍に戦いしに由り、必ずわが主君な
 る汝の爲に忠實なる家15) を起し給わん。されば汝の生き給う日の限り、
 汝に悪しき事あらざれかし。二九 夫れ、いつの時にか人起ちて汝を迫害し
 汝の生命を奪わんとする折と雖も、わが主君の生命は、主汝の天主の御
 許に、活ける者の包の中にある如く保たれん。16) されど汝の敵の生命は

うことを私にお
 許し下さい。
 14) この贈物はあ
 なたの従者の方
 々にあげて下さ
 い、あなたにさ
 しあげるにはあ
 まりにつまらぬ
 物です。—15) 多
 くの譯者は「絶
 えざる家」と譯
 している。—16) ダ
 ヴイドの生命は
 恰も包の中に入
 れてある貴重品
 の如く、危害を
 全く受けぬよう
 にされている。

三〇 恰も烈しく投石器もて投げうつ如く、抛たるべし。三〇 主汝に就きて語り給いし
 種々の善き事を、わが主君なる汝に爲し、汝を立ててイスラエルの長となし給
 三二 わん時、三二 汝が罪なき血を流し、或は自己が仇を報いたることも、汝の悲嘆と
 なりわが主君の心の痛みとなることなかるべし。かく主のわが主君を幸ならし
 三三 め給わん時は、汝の婢を憶い給え。」と。三三 David、アビガイルに云いける
 は、「今日汝を遣して我を迎えしめ給いし、主イスラエルの天主は祝せられさ
 三三 せ給え、また汝の言は祝せられよ。三三 またわが今日來りて血を流し、また自ら
 三四 の手もて己が仇を報ゆるを止めたる汝も祝せられよ。三四 然らずば、わが汝に害
 を加うるを止め給いし主イスラエルの天主は活き給う、即ち汝もし急ぎ來りて
 我を迎えざりせば、明朝の曙までに、男子はナバルの許に一人も残らざりしな
 三五 らん。」と。三五 かくて David 彼女の手よりその彼に携え來りしあらゆる物を
 受けて之に云いけるは、「安らかに汝の家に行け。視よ、我は汝の聲を聞き、
 三六 汝の顔を¹⁸⁾ 尊びたり。」と。三六 それよりアビガイル、ナバルの許に至りしに、

17) 心配
 せず
 18) 汝が
 嘆願し
 て地に
 伏せた
 顔を。

三七 視よ、彼はその家にて、王の饗宴の知き饗宴を開き、ナバルの心樂しめり
 蓋し彼は太く酔えるなり。されば彼女は翌朝まで、小となく大となく、一
 言も彼に告げざりき。三七されど明方に至りてナバルの酒氣の失するや、そ

三六 彼の妻彼に是等の言を告げたるに、彼の心その衷に死して、彼は石の如くに
 なれり。一九) それより十日を経て、主ナバルを撃ち給いしかば、彼即ち死

三九 時にダヴィド、ナバルの死せる由を聞きて云いけるは、「主は

祝せられさせ給え、蓋は主ナバルの手より出でしわが恥辱の訴訟を審判き

その僕を制して悪に陥らざらしめ給いし故にして、また主はナバルの悪を

その頭上に返し給えり。」と。茲に於いてダヴィド人を遣し、アビガイル

と語らしめて、之を己が妻に迎えんとせり。二一) 四〇ダヴィドの僕等、乃ちカ

ルメルに在るアビガイルの許に至り、之に語りて云いけるは、「ダヴィド

は汝を己が妻に迎えんとて我等を汝の許に遣せり。」と。四一 彼女起ちて地

四一 に平伏し、敬禮して云いけるは、「視よ、汝の婢をして、わが主君の僕等に

19) 昂奮か、恐怖か、憤怒か
 に由つて腦溢血を起した。

20) ナバルは卒中の發作で死んだらしい

21) アビガイルがエダの名門の出である故に、人心を攪するため、また賢いその女を自分の傍に置いて相談相手とするため。

四二
 の足を洗う召使たらしめ給え。」と。四三
 アビガイルは急ぎ起ち
 上り、驢馬に乘れり。その侍女なる五人の少女も之と共に行き
 ぬ。かくて彼女はダヴィドの使者に従い行きて、その妻となれ
 り。四三
 ダヴィドは更にイエズラエルのアキノアム²²⁾をも娶りし
 かば、彼等兩人ながらその妻となりぬ。四四
 然るにサウルは、そ
 の娘にしてダヴィドの妻たりしミコルを、ガリムの出なるライ
 スの子フアルテイに與えたり。²³⁾

第二十六章

サウル再びダヴィドを追い求む—ダヴィド夜にサウル及びその部下
 の眠れる所に至りしかど、之を害せず。

一
 さる程にジフの人々ガバーに在るサウルの許に來りて云いけ
 るは、「視よ、ダヴィドは荒野に對えるハキラの丘に隠れたり。」
 二
 一) サウル乃ち起ちてジフの荒野に下り、イスラエルより精

22) アキノアムはダヴィド
 の妻の中眞先に擧げられ
 ている女(代上三・二)。
 その上席を與えられたの
 は、多分最初に兒を産ん
 だためである。—23) 多
 分復讐のため。ダヴィド
 は後にミコルを返して貰
 った。

第二十六章 一) 本二三・
 二九。

選りし三千人を率いて、ジフの荒野にダヴィドを探し索めんとせり。

三 かくてサウル荒野に對えるガバー・ハキラに於いて、道の邊に陣

したるが、ダヴィドは荒野に在り、サウルが己を追いて荒野に來るを

見しかば、探偵の者を遣して、彼の正しく來りしことを知れり。五 茲

に於いてダヴィドは、密に起ちてサウルの居る所に至りしが、サウル

及びネルの子にしてその軍の將なるアブネルの眠れる處を見、サウル

は天幕の中に³⁾ 眠りおり、殘餘の民はその周圍にあるを見るに及び、

六 ダヴィド、ヘト人なるアキメレクと、サルヴィアの子にしてヨアブ

の兄弟なるアビサイ⁴⁾ とに、語りて云いけるは、「我と共に陣中なる

サウルの許に下らんは誰ぞ。」と。アビサイ云いけるは、「我、汝と共に

に下らん。」と。七 かくてダヴィドとアビサイ、夜民の許に至りて見し

に、サウルは天幕の中に臥して眠り、槍はその枕頭の地に刺してあり、

アブネルと民とはその周圍に眠れり。八 時にアビサイ、ダヴィドに云

2) パレスチナの南の大街道。— 3) 戦車などで構築した陣地の中央に。

4) ダヴィドの父イサイには、八男のほかに、サルヴィア及びアピガイルという二女があつた。サルヴィアはヨアブとアビサイとの母(代上二・一六)である。この二子は慣例の如く、父に因まず、母に因んで名づけられた。

九 槍もて唯一突きに彼を地に刺し貫かん、二突きするには及ばざるべし。」と。
 一〇 ダヴィド、アビサイに云いけるは、「彼を殺すなかれ。抑々誰か主の注油し給いし者にその手を伸べて、罪なきを得んや。」と。一〇ダヴィドまた云いけるは、「主は活き給う、⁵⁾主彼を撃ち給うか、或は彼の死すべき日來るか、或は戦争に下り行きて殞るるかするに非ずば、二主我に恩恵を賜い、我をして主の注油し給いし者にわが手を伸べざらしめ給え。されど今彼の枕頭にある槍と、水吞とを執れ。しかして我等去らん。」と。二三ダヴィド乃ち槍とサウルの枕頭に在る水吞とを取りて、彼等去りしが、一人だに之を見し者、知りし者、また眼覺めし者、あらずして、皆眠りいたり、そは主よりの⁶⁾熟睡彼等を襲いたればなり。一三さてダヴィドは對側に移りて、遙かに山の頂に立ち、彼等の間隔大となりし時、一四ダヴィド、民及びネルの子アブネルに呼ばわりて云いけるは、「アブネルよ、汝答えざるか。」と。アブネル答えて云いけ

5) 本二四・五以下と同様の理由。
 6) これも次節の「主我に恩恵を賜い」云々と共にへブレオ語特有の誓の語。
 7) 天主の御攝理によつて。

一五 するは、「呼ばわりて王の眠りを防ぐる汝は何者ぞや。」と。一五ダヴィド、ア

ブネルに云いけるは、「汝は男子ならずや。またイスラエルの中、他に誰

か汝に匹敵う者あらんや。然るを汝、何故汝の主君なる王を護らざる。蓋

一六 し群衆の一人、入りて汝の主君なる王を殺さんとせり。一六汝の爲したるこ

の事は善からず。主活き給う、汝等は主の注油し給いし者たる汝等の主君

を護らざりしに由りて、死の子なり。今王の槍何處にあるか、又その枕

一七 頭にありし水呑何處にあるかを見よ。」と。一七サウル、ダヴィドの聲と知

りて云いけるは、「わが子ダヴィドよ、是は汝の聲ならずや。」と。ダヴィ

一八 ド云いけるは、「わが主君王よ、わが聲なり。」と。一八彼また云いけるは、

「わが主君何故にその僕を追い給うや。我何をか爲したる。またわが手に

一九 何の悪しき事かある。一九さればわが主君王よ、乞う、汝の僕の言を聞き給

え。もし汝を驅りて我を討たしめしが主ならば、犠牲薫れかし。10) されど

人の子ならば、その者共は主の御眼前に呪われよかし、彼等は〃行きて異

8) 死に値する者なり。

9) 我が汝を責めるのも無理でないことを

汝が悟るよう

に。10) 天主

が我に對する

憎悪や敵意の

悪しき念の汝

に起るを許し

給うたのなら

天主の御心を

和げんと努め

よう。

二〇 國の神々に事えよ¹¹⁾と云いて、¹¹⁾ 主の嗣産¹²⁾に住まうを得ざらしめん
 と、今日我を追い出したればなり。¹²⁾ 願わくは今主の御前にわが血大
 地に流るることなかれ、蓋は山にて鷓鴣を追う如く、イスラエルの王
 二 一匹の蚤を求めんと出でたればなり。¹³⁾と。三 サウル云いけるは、
 「我は罪を犯せり。わが子ダヴィドよ、歸れ。蓋し我は最早汝を害せ
 じ、そはわが生命汝の眼に今日貴く見えたるに由りてなり。實に我が
 愚に振舞いて、いと多くの事を知らざりしこと明らかなり。」と。
 三三 ダヴィド答えて云いけるは、「視よ、王の槍を。王の僕の一人渡り
 三三 來て之を取れ。¹⁴⁾ 主は各人にその義と眞實とに循いて報い給わん。主
 今日汝をわが手に付し給いしも、我は主の注油し給いし者にわが手を
 二四 伸ぶるを欲せざりき。¹⁵⁾ 汝の生命、今日わが眼に貴かりし如く、わが
 二五 生命主の御眼に貴かれ、主諸々の患難より我を救い給え。」と。¹⁴⁾ 二五 サ
 ウル乃ちダヴィドに云いけるは、「わが子ダヴィドよ、汝は祝せられ

11) 私が眞の信仰に
 従つて暮すことが
 できないようにし
 て。――12) 聖地。
 13) 畑に群れいるか
 かる鳥は追うが、
 山に逃げた鷓鴣は
 誰がわざわざ追い
 に行こうか。その
 ように氣高いサウ
 ル王が私風情を意
 に介する筈がない
 一 本二四・一五。
 14) 人々が私を迫害
 しても、天主は私
 を救い給うだるう

よかし。實に汝、大いに爲す所ありて、榮えに榮えん。」と。かくて
ダヴィドは己が途を行き、¹⁵⁾ サウルは己が處に歸りぬ。

第二十七章

ダヴィド再びゲトの王アキスの許に遁れ、シケレグの邑を與えらる。

一 ダヴィドその心の中に謂えらく、「我いつの日かサウルの手に落ち
ん。わが逃れてフィリスト人の地にて身の安全を得るこそ善からずや。
然らばサウルも我を斷念めて、イスラエルの全領土に我を探し索む
ることを止めん。されば我は彼の手より遁れん。」と。ニダヴィド乃ち
起ちて、己に従う六百人と共に、マオクの子にしてゲトの王なるアキ
スの許に行けり。¹⁾ かくてダヴィドとその部下の人々、ゲトに於いて
アキスの許に住みぬ、各人その家族と共にあり、ダヴィドはその二人
の妻、即ちイエズラエル人アキノアムと、カルメルの子バルの妻たり
しアビガイルと共にあり。²⁾ 四さてダヴィドのゲトに逃げし由サウルに

15) 天主の御旨によつて歩むべき途。

第二十七章 1) 多

分本二一・一〇のと同じアキスである。王は眞の天主を全然認めていなかつた譯でもないらしい(本二九・六一九)、それがダヴィドに信頼の念を與えた。
2) 本二五・三九以下。

傳えられしかば、彼その上引續き彼を探し索めざりき。

五 然るにダヴィド、アキスに云いけるは、「我もし汝の眼

前に恩恵を得なば、この國の一つの邑の中にて、我に處を

與えて其處に住まわしめよ。汝の僕争でか汝と共に王の都

に滞留まるを得べき。」と。3) 六 アキス乃ちその日シケレグ

を彼に與えたり。この故にシケレグ4) はユダの王領となり

て、今日に及べり。七 かくてダヴィドがフィリスト人の地

に住みたりし日數は、四箇月なりき。八 さてダヴィドとそ

の部下の人々とは、上り行きてゲスリ、ゲルジ、及びアマ

レク人等より掠奪せり。5) 蓋し是等の村は、昔スールの方

エジプトの國にまで及ぶ人々の住める地なりしなり。九 か

くダヴィド全地を撃ちて、男をも女をも生かしおかず羊、

牛、驢馬、駱駝、及び衣服を取りて、6) アキスの許に歸り

3) ダヴィドは王宮から遠く離れた町に行けば、身の一層安全なることを思い、次に述べる自分の企圖を自由に行おうとした。

4) シケレグは最初ユダ族のもので次にシメオン族のものであつた

後フィリスト人が之を征服したが、住みはしなかつたらしい。

ガザの南三十キロメートルの所にあり。1) アキスは、彼がフ

イリスト人のために、これらと戦うのだと信じていた。1) ア

マレク人の討滅は、天主が御自ら命じ給うた。他の兩民族は呪

咀の犠牲となつたカナアン人の裔であつた。

一〇 來りぬ。の。一〇時にアキス彼に云いけるは、「汝今日誰を襲いしぞ。」と。ダヴィド答えけるは、「ユダの南と、イエラメール⁸⁾の南と、ケニ⁹⁾の南とを。」と。二ダヴィドは男をも女をも生かしおかさりき、また「恐らくは我等のことを悪しざまに云わん。」と云いて一人もゲトに引き來らざりき。ダヴィドはかく爲しぬ。しかして彼がフィリスト人の國に住める間、その爲す所常にかくの如くなりき。一三さればアキス、ダヴィドを信じて云いけるは、「彼はその民イスラエルに數多の害を加えたり。故に彼は末長くわが僕たるべし。」と。

第二十八章

フィリスト人出でてイスラエルと戦う—サウル天主に棄てられて
巫女に頼る—サムエル、サウルに現る。

一 さてその頃の事なりき、フィリスト人その軍勢を集めて、イスラエルと戦う用意をな

の彼に出征の様子を語り、またその分なる分捕品の一部を呈するために。一⁸⁾イスラエル人の一族。ユダの曾孫であつた始祖に因んでかく命名された。代上二・九、二五を参照。
9)ヘブレオ人と同盟したキン人。

したり。時にアキス、ダヴィドに云いけるは、「汝今正に知れ、汝及び汝の部下、我と共に出陣すべし。」と。

二　ダヴィド、アキスに云いけるは、「汝の僕の爲さん所を、汝今こそ知るべけれ。」と。アキス乃ちダヴィドに云いぬ、「さらば我汝を立てて毎にわが頭を護る者とな

三　さん。」と。三さてサムエル逝きたれば、イスラエル皆

四　之を悼み、之をその邑なるラマタに葬れり。またサウルはその國より魔術者と占卜者とを悉く追ひ拂いぬ。二四さ

五　るほどにフィリスト人集い來りて、スナム³⁾に陣したれば、サウルも亦イスラエルを悉く集めて、ゲルボエ⁴⁾に至れり。五サウル、フィリスト人の陣を見て恐れ、その心大いに怯みたり。六彼主に問いしかど、主之に答え給わざりき、夢によりても、司祭等によりても、預言者等

第二十八章 1) 王の親衛隊長。

2) 本二五・一。集四六・二三。サウルはサムエルの死後、最後の支柱が倒れたように感じ、その生前ないがしろにしていた人心を得ようとした。それで盛大な追悼の祭祀を行い、全國の偶像を破壊しようとしたのである。3) スナムは今日のスレムで、ナザレトの南東十四キロの所にある。4) ゲルボエ山地は今のヂエベル・フクアで、イエズラエル平野の南東部を遮断している。5) 敵の軍備が大である故に、ダヴィドとその勇士とを怖れるあまり、また多分サムエルの死後、わが方にイスラエル人が信頼を置かなくなつたために。

七 によりても然り。⁶⁾ 七さればサウルその僕等に云いけるは、

「わが爲に、降神する婦を索めよ、さらば我その許に行き

之に依りて問わん。」と。その僕等彼に云いけるは、「エン

八 ドルリに降神する女あり。」と。⁸⁾ 茲に於いて、彼その装

いを變え、他の衣服を着て、二人の人を伴い、夜その女の

許に至りて之に云いけるは、「わが爲に神降して占い、わ

九 が汝に告ぐる者を我に呼び起せ。」と。女彼に云いけるは

「視よ、汝はサウルが爲したる一伍一什、即ちその魔術者及

び占卜者を國より絶やしたる次第を知る。然るを汝何故に

わが生命を奪う策を廻らして、我を殺さんとするぞ。」と。

一〇 サウル主によりて之に誓い云いけるは、「主活き給う、

この事の爲に、いかなる禍害も汝に起ることあらざるべ

二 し。」と。二次いで女彼に「我誰をか汝に呼び起すべき。」

⁶⁾ 普通の、また許される範圍の手段は悉く試みた。―のゲルボエ山から北へ行程三時間の所にあり。―⁸⁾「死靈を呼び出すこと」は、古代の異教では特に女によつて大に行われた「魔術」である。それは一般に全く瞞着眩惑にほかならなかつた。「巫女」は問う人に見えないその所謂現れた靈をして、「お告げ」をさせるが、この「お告げ」はもちろん瞞着者が腹話術その他類似の方法である。しかし悪魔が出現して欺瞞を行うことも否定できない。―利二〇・二七。申一八・一一。徒一六一六。

と云いしに、彼云いけるは、「我にサムエルを呼び起せ。」

と。二三さて女サムエルを見るや聲高く叫び出しけるが、

やがてサウルに云いけるは、「汝何故に我を欺きしや。」

二三 汝こそはサウルなれ。」と。二三 王之に「恐るるなかれ、

汝何をか見たる。」と云いしに、女サウルに云いけるは、

一四 「我は神々の地より上るを見たり。」と。一四 彼また之に

「その形は如何に。」と云えば、女、「翁上り来る。そは

袍を纏えり。」と云えり。サウル乃ちそのサムエルなる

一五 ことを知りしかば、地に平伏して敬禮せり。一五 時にサ

ムエル、サウルに云いけるは、「汝何故にわが安息を妨

げて我を呼び起したるぞ。」サウル云いけるは、「我太く

窮す、そはフィリスト人我と戦い、また天主我を離れて

預言者の手によりても、夢によりても、我に聽くを欲し

9) 即ちサムエルが常に着ており、

サウルに目印となつたかの袍。本

一五・二七参照。一四) 少からぬ解

釋者及び多くの教父達の説に従え

ば、サウルは巧妙な女の詐欺にひ

つかかつたのである。女はそらい

う種類の人間に特有な炯眼で、王

と悟り、サウルの絶望的な立場を

見ぬいて、サウルには見えない

(十四節) 虚偽のサムエルの靈を

して將來を預言させた。他の聖書

解釋者の説によれば、サムエルが

實際に現れたのだが、それは巫女

の欺瞞手段によらずして、サウル

にその迫りつつある破滅の前に改

心するよう最後の警告を與えよう

との天主の御旨によつたのである

と。

一六 給たまわざればなり。この故ゆゑに我われ汝なんじを呼よびて、爲なすべき事ことを我われに示しめさしめんとし
 たるなり。」と。11) 一六サムエル云いいけるは、「主しゆ汝なんじを離はなれて、汝なんじの敵あいて手かた方に就つ
 一七 き給たまえるに、汝なんじ何なにとて我われに問とうや。一七 蓋けだし主しゆは我われに12) よりて語かたり給たまいし如ごとく
 汝なんじに爲なして、汝なんじの王くに國にを汝なんじの手てより挽もぎ取とり、之これを汝なんじの近ちかき者ものダヴイドに與あた
 一八 え給たまわん。一八 是これ、汝なんじが主しゆの御み聲こゑに従したがわす、その激はげしき御おん怒いかりをアマレクに漏も
 さざりしに由よりてなり。さればこそ主しゆは汝なんじの苦くるしむ事ことを今日こんにち汝なんじに爲なし給たまいし
 一九 なれ。一九 主しゆはまたイスラエルをも汝なんじと共にともにフイリスト人びとの手てに付わたし給たまわん。
 かくて汝なんじ及および汝なんじの子こ等ら、明日あした我われと共にともにあるべし。13) 更さらに主しゆはイスラエルの陣じん
 二〇 營えいをもフイリスト人びとの手てに付わたし給たまわん。」と。二〇 サウルは忽たちまちち地ちに身みを伸のべ
 て倒たおれたり。蓋けだしサムエルの言ことばに太いたく恐おそれしなり。且かつ彼かれはその日ひ一日いちにちパンを
 二一 食しょくせざりしに由よりて、その身みに力ちからあらざりき。二一 折おりしもかの女おんな、太いたく恐おそれお
 るサウルの許もとに入り來きたりて、之これに云いいけるは、「視みよ、汝おんの婢しもめ汝おんの聲こゑに従したが
 二二 い、我われが生命いのちを賭として14) 汝おんの我われに云いいし言ことばを聽ききたり。二三 されば汝おんも亦また今いま

11) 集四六・二三。

12) 原文二〇

manu

mea わが

手に。

13) 冥府に

14) 原文

posui

animam

meam

in manu

mea わが

生命をわ

が手に置

きて(人

にささげ

るため)。

二三 汝の婢の聲を聴き、我をして汝の前に一片のパンを供せしめ給え。是汝が食して力を得、道を行くを得ん爲なり。」と。15) 二三されど彼は拒みて、

二四 「我食せじ。」と云いしが、その僕等及びかの女、彼に強いしかば、彼も終に彼等の聲を聴きて、地より起上り、床の上に坐しぬ。二四さてその

二五 女は家に肥えたる犢ありしかば、急ぎ之を屠り、また粉を取りて之を捏ね、酵なきパンを調製りて、二五之をサウルの前、及びその僕等の前に供したり。彼等乃ち食して起上り、その夜は終夜歩み行けり。

第二十九章

ダヴィド、ファイリスト人と共に出征して長等に歸さる。

一 時にファイリスト人の軍、悉くアフエク1)に集いたり、イスラエルも亦
二 イエズラエルにある泉の邊に陣せり。ニファイリスト人の長等、百夫、及び千夫を率いて進みしが、ダヴィドとその部下の人々とは、アキスと共に後尾にありき。三然るにファイリスト人の長等アキスに云いけるは、「是

15) この女は不運な王を人情から氣の毒に思つてもてなしたのである。

第二十九章

1) アフエクは今
のラス・エルア
インで、ヤツフ
アの北にある。

四

五

六

七

等のヘブレオ人は何が爲に此處にあるぞ。」と。アキス、ファイリスト人の長等に云いけるは、「汝等はダヴィドを知らざるか、彼はイスラエル王サウルの僕にして、幾日も、否幾年もわが許に在りしが、そのわが許に遁れ來りし日より今日に至るまで、我は彼に何の咎をも見出さざりき。」と。四されどファイリスト人の長等之を怒りて彼に云いけるは、「この人は歸りて、汝が之を置きたる處に留まるべし。我等と共に戦争に下るべからず。これ彼が我等の戦争を始むる時に當りて、我等に仇を爲さざらんためなり。蓋し、彼は我等の頭を以てする外に、抑々何を以てかその主君を宥むるを得べき。」²⁾ 五是は人々が舞いつつ歌いて、サウルは千を撃ち、ダヴィドは萬を撃つと云いしことありしダヴィドならずや。」と。³⁾ 六茲に於いてアキス、ダヴィドを呼び、之に云いけるは、「主は活き給う。わが見る所にては、汝は正しくして善し、汝が我と共に陣中に入するも亦然り。汝がわが許に來りし日より今日に至るまで、我は汝に何の非をも見出さざりき。されど長等は汝を悦ばず。七されば歸れ、安らかに行け。

2) 代上
一二・
一九。
3) 本一
八・七。
4) 何事
をなす
も。

八

しかしてファイリスト人の長等の目障りとなるなかれ。」と。ハダヴィ

ド、アキスに云いけるは、「抑々我何をか爲したる。わが汝の眼前

に至りし日より今日に至るまで、汝その僕なる我に何を見たらばと

て、我行きてわが主君なる王の敵と戦うを得ざるか。」と。九 アキ

ス乃ち答えてダヴィドに云いけるは、「我、汝がわが見る所にては

善きこと天主の使の如くなるを知る。6) されどファイリスト人の長等

ハ彼は我等と共に戦争に上るべからず」と云えり。一〇 されば汝及び

汝と共に來りし汝の主君の僕等、明朝に起きよ、即ち汝等未明に起

きて夜の明け初むる頃に出でて去れよかし。」と。二よりてダヴィ

ドとその部下の人々、未明に起きて、朝に出で立ち、ファイリスト人

の地に歸りぬ。しかしてファイリスト人はイエズラエルに上れり。

5) ダヴィドは、フイ

リスト人の諸侯が疑

つたために、自國の

民と戦わねばならぬ

か、それを拒んだら

自分の宿主たる恩人

アキス王の信頼を裏

切るかする苦境を免

かれた。一6) アキス

もダヴィドを疑うに

至り、ために之を去

らせる。

第三十章

アマレク人シケレグを焼きて物を掠め去る―ダヴィド之を追いて
その手よりすべてを取戻す。

一 ダヴィドとその部下の人々、三日目にシケレグに至りしに、アマレク人
既に南の方よりシケレグに侵入して、シケレグを撃ち、火もて之を焚き、
二 その中にありし女を小より大に至るまで捕虜となし、一人だに殺すこと
なく之を引ききて己が方に去りたり。三 さてダヴィド及びその部下の人々市
に至りて見たるに、そは火に焚かれ、その妻その子女は捕虜として連れ去
られたりしかば、四 ダヴィド及び彼と共にある人々、聲を擧げて泣き、終
にその涙も涸るるに至りぬ。五 蓋はダヴィドの二人の妻、イエズラエル人
アキノアム、及びカルメルのナバルの妻たりしアビガイルも亦捕虜として
引き行かれたればなり。六 ダヴィドは太く悩みたり、蓋し民各自その子女
の爲に心を痛めしあまり、彼に石を抛たんとしたればなり。されどダヴィ

第三十章

1) アマレク人はサウルに蒙つた戦敗とダヴィドの襲撃(本二七・八)との復讐をする。―代上一二・二〇。

七 ドば主しほその天主てんしほによりて力ちからを得たり。彼かれ乃すなわちアキメレクの子こ司祭さいアビアタル
 に「わが許もとに肩衣エラオドを持ち來きたれ。」と云いしかば、アビアタル、ダヴィドの許もとに
 肩衣エラオドを持ち來きたりしに、ハダヴィド主しほに問うかいて云いけるは、「我われこの強盜ごうとうら等を追おう
 べきか、また我われ之これに追おいつくや否いなや。」と。然しかるに主しほ彼かれに曰のたまいけるは、「追おえ、
 汝なんじ必かならず彼等かれらに追おいつきて、分取物ぶんどりものを取り戻もどすならん。」と。九よりてダヴィド
 及および彼かれと共ともにある人々ひとぐ、行ゆきてベソル溪流がわに至いたりしが、疲つかれて其處そこに留とどまれる
 者ものもありたり。一〇されどダヴィド及および四百人にんは追おい行きぬ。即すなわち二百人にんは疲つかれ
 二 にベソル川がわを渡わたる能あたわらずして、留とどまりしなり。二 人々ひとぐ畑はたけに於おいて一人ひとりのエジ
 プト人びとを見みかけ、之これをダヴィドの許もとに連つれ來きたりて、食しよくせしむるにパンを、飲のま
 三 しむるに水みずを與あたえ三 また無花果いちじくの菓子かし一つ、乾葡萄ほしぶどう二房ふさをも與あたえたり。彼之かれこれを
 食しよくし終おうるや、その氣力きりよくを恢かい復ふくし、我われに歸かえりぬ。蓋けだし彼かれは三日か三晩物ほんものを食しよくせず
 一三 水を飲のみまざりしなり。一三 時にダヴィド彼かれに云いけるは、「汝なんじは誰たれの屬ものなりや。
 一三 又また何處いそこより來きたりて、何處いそこにか行ゆく。」と。彼かれ云いけるは、「我われはエジプトの

2) 長途
 の行軍
 と糧食
 の蓄え
 がな
 い
 のと
 で
 力盡
 き
 た
 の
 だ
 ら
 ぬ
 有
 る。

一四 若者にて或アマレク人の僕なるが、我一昨日より病み初めたれば、わが主人
 我を棄てたり。一四 我等はケレテイの南部とユダとカレブの南部とに侵入し、

一五 シケレグを火もて焚きぬ。」と。一五 ダヴィド彼に云いけるは、「汝我をその部
 隊に連れ行くを得るや。」彼云いけるは、「汝我を殺さず、また我をわが主人

一六 の手に付さざらんことを、天主によりて我に誓い給え、³⁾さらば我汝をか部
 隊に連れ行かん。」と。ダヴィド乃ち彼に誓いぬ。一六 かくて彼ダヴィドを連れ

行きたるに、視よ、彼等地の面に普く臥して、且食い、且飲み、フィリスト
 人の地及びユダの地より奪いし諸々の獲物と鹵獲品との爲に、さながら祭日

一七 に祝える如くなりき。一七 ダヴィドその夕べより翌日の夕べまで彼等を討ちし
 が、駱駝に打乗りて逃げたる若者四百人⁴⁾を除きては、その中一人も遁れた

一八 る者あらざりき。一八 かくの如くにしてダヴィドは、アマレク人の奪いし物を
 悉く取戻し、その二人の妻をも救い出せり。一九 男子も女子も、分捕られし

一九 物も、小より大に至るまで、何一つ失せたるはなかりき。即ちダヴィドは彼

3) 彼は敵軍の者なので、殺されはせぬかと心配して

4) 下僕たち。アマレク人は生命財物を護るために闘つたが、下僕達は逃げた。

二〇 等が奪うばいたるものをすべて取戻とりもどしたるなり。三〇また彼は羊ひつじと牛うしとを悉ことごとくく取り
 之これを已おのが前まえに驅かりて歩あゆましめたり。されば人々ひとぐは云いえり、「これぞダヴィド
 の分捕物ぶんとりものなる。」と。三二かくてダヴィド、かの疲つかれて留とどまりし二百人にん、即すなわち
 ダヴィドに従したがう力ちからなかりしによりて、彼かれが命めいじてベソル川がわの邊ほとりに止とどめたる者もの
 等どもの許もとに至いたりけるに、彼等かれら出いでて來きたりてダヴィド及び彼かれと共ともなる民たみを迎むかえたり。
 三三ダヴィドまた民たみに近ちかづきつつ彼等かれらに安やすかれと挨拶あいさつせり。三三時にダヴィドと
 共ともに行ゆきし、悪あしく邪よこしまなる人々ひとぐみな皆答こたえて云いいけるは、「彼等かれらは我等われらと共ともに來きた
 らざりし故ゆえに、我等われらは取戻とりもどしたる獲物えものを何なにも彼等かれらに與あたえじ、ただ各人おのひと己おのが妻さい
 子しを取とるを以もつて足たれりとなし、立去たちさるべし。」と。三三然しかるにダヴィド云いいけ
 るは、「わが兄弟等きょうだいたちよ、汝等なんじら、我等われらを護まもりて、我等われらを襲おそいし強盜等ごうとうらを我等われらの
 手てに付わたし給たまいたる、主しゆが我等われらに賜たまえる是等これらの物ものを然しかなすべからず。三四またこ
 の言ことに就つきては、何人なにびとも汝等なんじらに聽きくべからず。戦争たふかいに下くだりし者ものの分ぶんも、荷にの
 所ところに留とどまりし者ものの分ぶんも等ひとしからしめて、同どう様に分わかつべし。」と。三五之これはその

5) 彼らが
 自分につ
 いて來な
 かつたの
 を悪く思
 つていな
 いという
 印に。
 6) 分捕品
 等分の規
 定につい
 ては、民
 三一・二
 七。書二
 二・八を
 見よ。

二六

日ひより後のち、憲のりとなり定則さだめとなり、今日こんにちに至いたるまでイスラエルに於おける法おきての如ごとくになれり。次ついでダヴィド、シケレグに至いたり、己おのが近ちかき者ものなるユダの長老等ちやうろうたちに分捕物ぶんどりものの中うちより贈物おくりものを遣つかわして云いいけるは、「主しゆの敵てきより分捕ぶんどりし物ものの恩澤おんたくを受けよ。」と。

二七

即すなわちベテルにある者もの、南みなみの方かたラモトにある者もの、イエテルにある者もの、二八 アロエルにある者もの、セファモトにある者もの、エスタモにある者もの、二九 ラカルにある者もの、イエラメールの邑々まちにある者もの、ケ

三〇

ニの邑々まちにある者もの、三〇 アラマにある者もの、アサン湖この邊ほとりにある者もの、三二

三一

アタクにある者もの、三二 ヘブロンにある者もの、及びダヴィドがその部下かと共に留とどまりし諸處しよくにある殘餘ほかの人々ひとぐに贈物おくりものを遣つかわしたり。8)

第三十一章

イスラエル、ファイリスト人に敗れ、サウルとその子等殺さる。

一 さるほどにファイリスト人ひとイスラエルと戦たいしが、イスラエルの人々ひとぐファイリスト人ひとに追お

7) 以前個々の場合に指定されていたことが、今は一般的な掟になつた。

8) ここに列挙してある諸都市は大方ダヴィドの逃亡中之を助けたものであり、また多分アマレク人に苦しめられたものであつたらう。そしてサウルがファイリスト人に敗れたために非常な窮地に陥つていたので相違ない。次章参照。

二 われて逃げ、ゲルボエ山にて屠られ殞れたり。ニフィリスト人サウルとその子等とを襲い、サウルの子等なるヨナタス、アビナダブ、及びメルキスアを討取りぬ。三 戦闘の重壓全くサウルに向けられ、射手の人々彼に追い迫りて、彼ついに射手等の爲に重傷を負えり。四 時にサウルその武器持に云いけるは、「汝の太刀を抜きて我を打て。然らずばこの割禮なき者共、來りて我を殺し、我を嘲弄せん。」と。されど武器持は之を肯ぜざりき、蓋し彼は太く畏懼れたるなり。茲に於いてサウルその太刀を取り、之が上に伏しぬ。五 その武器持之を、即ちサウルの死したるを見るや、自身も亦その刃に伏して彼と共に死したり。六 かくてサウルとその三人の子、その武器持、及びその部下の人々皆、その日共に死せり。七 さて谷の彼方、及びヨルダンの彼方にありしイスラエルの人々、イスラエル人の逃走し、サウルとその子等との死したるを見、その市々を棄てて逃走りければ、フィリスト人來

第三十一章 1) 代上一〇・二、三。
2) 我とわが手に自害して果てたサウルの悲惨な末路は天主に恵を受け稀に見る高い地位にあげられた者が、いかにひどく没落することがあるかという恐ろしい一例である。―代上一〇・四。―3) 代上一〇・六参照。
彼の息子イスボセトと彼の軍將アブネルとは助かつた

八 りて其處に住まりぬ。八翌日フィリスト人戦死せる者を

剝がんとて來りたるに、サウルとその三人の子等、ゲル

ボエ山に仆れるを見出せり。九よりて彼等サウルの首を

斬り、その武器を掠めフィリスト人の地に廻し送りて、

神々の宮及び民の中にてその由を告げたり。四。一〇次いで

彼等その武器をアスタロトの宮⁵⁾に置きけるがその體は

之をベトサンの石垣に梟けぬ。6) ニヤベス・ガラードの

住民、フィリスト人のサウルに爲したる事の一伍一什を

聞くや、二三勇氣卓れたる人々、皆起ちて終夜歩み、サウ

ルの屍とその子等の屍とをベトサンの石垣より取りてヤ

ベス・ガラードに至り、其處にて之を焼けり。7) 二三しか

して彼等その骨を取り、之をヤベスの森に葬りて七日の

間斷食したり。8)

4) 代上一〇・一〇によれば、サウルの首はダゴンの宮に置かれた。

5) アスカロンにある。1) 8) ベトサ

ンは今日のベイサン。ゲルボエ山

の東麓、ヨルダンの溪谷中に位し

河の右岸にあり。1) 7) これはサウ

ルに感謝の念あるガラード人(本

一一・一以下)の援助の下に焼か

れた。通常は大罪人の死骸でなけ

れば火葬にはしなかつた。サウル

とヨナタスとの遺骨は、ヤベスの

檉柳(ぎよりゆう)の下に埋葬さ

れたが、後、始祖キスの墓に移さ

れた(母下二一・二二)。1) 母下二

・四。1) 8) 盛大なる哀悼。母下一

・一二。三・三五参照。